

The Institute of Humanities and Social Sciences Nihon University

研究活動報告書

第7号 2015年度



日本大学文理学部人文科学研究所

目次

人文科学研究所総合研究報告

1-1	近代東アジアにおける記憶の表象：Phone（話者）Visuality（視覚）の連動	1
1-2	コーパス言語学の課題と発展	4
1-3	近現代におけるナショナリズムと歴史認識への各国の対応に関する研究	8
1-4	幸福の決定要因に関する学際的実証研究（カンボジアと日本の比較研究の試み）	11
1-5	21世紀における日本の針路に関する学際的研究—少子高齢化とそれに伴う諸問題の克服策—	14

人文科学研究所共同研究報告

2-1	心と世界	17
2-2	ヨーロッパにおける「帝国」の比較史的研究	20
2-3	大学院・学部・学科教育を視野に入れた日本語学・日本語教育学ならびに書学研究の融合	23
2-4	日本文学および関連諸学を連携させた広域的総合研究	28
2-5	時代の要請に応えた中国学の発信に向けて	31
2-6	英語英文学の包括的研究（その5）	34
2-7	近現代ドイツ語圏における文化・語学研究	38
2-8	現代社会における問題の状況の分析に資する社会学的研究Ⅴ—「格差・不平等」をめぐる諸側面—	41
2-9	現代社会における問題の状況の分析に資する社会学的研究Ⅴ—現代人の「生」をめぐる諸側面—	43
2-10	ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題に関する総合的研究	46
2-11	現代における教育改革の理念・方法・成果についての研究視点の構築に関する研究	50
2-12	スポーツ競技者のパフォーマンス低下をもたらす心理的ストレスについての精神生理学的検討	52
2-13	体育教師における実践的指導力の構成能力—教科指導に焦点化して—	54
2-14	日常認知に関する基礎と応用に関する総合的研究（3）	56
2-15	精神的健康に関する臨床心理学的研究（5）	59
2-16	グローバル化時代のリージョナリズムの潮流	61

3 人文科学研究所公開講演会

「日本語教育の可能性」	63
-------------	----

4 各種研究費助成

4-1	科学研究費補助金（文部科学省・日本学術振興会）	78
4-2	文理学部個人研究費及び付置研究所所員個人研究費	80
4-3	その他の助成金等	85

5 研究員受入

6 研究紀要

6-1	人文科学研究所研究紀要第90号総目次	93
6-2	人文科学研究所研究紀要第91号総目次	94

7 事業報告

1-1 近代東アジアにおける記憶の表象：Phone（話者）Visuality（視覚）の連動

- 代表者 山口 守（中国語中国文学学科・教授）
 ●分担者 小平麻衣子（国文学科・教授）
 高 榮蘭（国文学科・准教授）
 紅野謙介（国文学科・教授）
 三澤真美恵（中国語中国文学学科・教授）

【研究の目的および概要】

近代東アジアの歴史や文化を研究する場合、植民地主義と戦争に支配された時空によって構成された集団記憶を前提とすることが多いが、ポスト・コロニアリズム或いはポスト・コールドウォーの視点から言えば、公的な集団記憶から排除されがちな個人記憶を如何に可視化するか、またそれを集団記憶に吸収する機制とは何かを解明することがより重要である。本研究はこの問題を話者と視覚という言葉・表象の問題から考察しながら、従来定点的であった研究視点を、記憶表象に関わる話者の移動や言語転移に着目して、文学や表象文化における話者や視覚の主体と客体の連動性を探る新しい試みである。

具体的には、Sinophone Literature（華語語系文学）、Nipponophone Literature（日本語語系文学）のようなトランスナショナルかつマージナルな視点を参照しながら、植民地主義、戦争、移民、グローバリズムにより話者が移動することで、個人記憶が集団記憶の規制を受けつつどのように文字化、可視化されるかについて研究を進める。ここでは、単にアーカイブ資料や口述記録のような「記憶⇒可視化」資料だけに依拠するのではなく、植民地期、戦争期、或は冷戦期前後に、話者や言語が移動・転移する過程で生成されるテキストそのものに積極的に焦点を当てる。

【研究の結果】

今年度は研究参加者の個人研究以外に、学内で三回定例研究会を開催した。

- 第一回定例研究会：2015年11月5日（木）18：00-20：00 講師：キル・ユンヒョン「いま東アジアに何が起きているのか、韓国メディアの視点から一歴史と安保が絡んだ韓日4年間のせめぎ合いを中心に―」
- 第二回定例研究会：2016年1月29日（金）18：00―20：00 講師：黒川創「日本語と「日本語文学」のあいだで―創作が生じる場所のこと」
- 第三回定例研究会：2016年3月18日（金）15：00―18：00 講師：渡辺考・五味淵典嗣「従軍作家たちと戦争―アジア太平洋戦争下の文学」

【研究の考察・反省】

まず定例研究会についてまとめる。第一回研究会では、講師に韓国『ハンギョレ新聞』東京支局長であるキル・ユンヒョン氏を迎え、取材現場から感じ取った安倍政権と朴政権の登場前後の変化について、慰安婦の問題を含む歴史問題や日米・日韓同盟の問題を軸にしながら説明してもらった。メディアの表面にはなかなか浮上してこない日・韓・米・中における外交的接触の舞台裏についても聞くことが出来た。東アジアをめぐる研究にかかわっている本研究会のメンバーにとって、それぞれが接しているいま・この研究テーマを如何に展開するかを考える上で示唆的であった。第二回研究会は、講師に黒川創氏（作家・評論家）を迎え、「日本語と「日本語文学」のあいだで―創作が生じる場所のこと」というテーマで行った。黒川氏の名著『暗殺者たち』（新潮社）、『鷗外と漱石のあいだで―日本語の文学が生まれる場所』（河出書房新社）の二冊を軸にしながら、「日本語文学」という概念の可能性と問題点について報告を受け、議論を重ねた。研究会メンバーのほか、学内外からも多くの参加者があり、30人近い集まりとなった。第三回研究会は、講師に渡辺考氏（NHKディレクター）、五味淵典嗣氏（大妻女子大学准教授）

の二人を迎え、「従軍作家たちと戦争——アジア太平洋戦争下の文学」というテーマで行った。『戦場で書く』(NHK出版)の著者でもある渡辺氏からはNHKスペシャル「従軍作家たちの戦争」およびETV特集番組などの制作経緯を聞き、五味渕氏には「交錯する偶像——火野葦平から李香蘭へ」と題した報告をしてもらい、情報統制下のメディアと表現のありようについて議論した。研究会メンバーのほか、やはり学内外から25人ほどの参加者があった。

こうした定例研究会を通じて、共同で一つのテーマを討議、研究する目的はある程度達成できたように思う。研究参加者各個人の研究成果は以下のように豊富で多岐にわたるが、近代東アジアの記憶という大きな問題に関して、言語と表象の間の相互関連性への関心は共通していた。この研究を通じて発見できた知見、また自覚した不備は今後の研究の中で発展、解決されるものと期待する。

【研究発表】

- ◆ Ko Young-ran, “Hiroshima,” “Kwangju,” and the Appropriation of Memory : The Anti-Nuclear Movement and Support for Korean Democratization in the 1980s, “UCLA Trans-Pacific Symposium“, Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, Center for Korea Studies, 5 JUNE 2015, at UCLA
 - ◆ 高 榮蘭「革命と転向—吉本隆明「転向論」和林鐘國「親日文学論」の間から—」, 国際シンポジウム「日本の戦後70年を問う—戦後思想の光と影」, 日仏会館フランス事務所主催, 2015年7月19日, 於日仏会館
 - ◆ 高 榮蘭「「原爆」をめぐる想像力の枠組み—朝鮮戦争とベトナム戦争を手がかりに—」, 第48回原爆文学研究会「戦後70周年連続ワークショップⅧ」, 原爆文学研究会主催, 2015年8月2日, 於長崎大学
 - ◆ 高 榮蘭「「社会主義」と「転向」をめぐる文化政治——一九三〇年前後の「社会主義」書物をめぐる競争／狂騒をてがかりに—」2015年度日本近代文学会秋季大会, 特集「移動と空間をめぐる想像力」, 2015年10月24日, 於金沢大学
 - ◆ Ko Young-ran, “Korean Tenkō and the Japan-Okinawa Divide: Between Yoshimoto Takaaki's “On Tenkō” and Kim Talsu's “The Trial of Pak Tal“, “The Work of “postwar“ Workshop“, 18 December 2015, at New York University
 - ◆ 紅野謙介「1960年前後の松本清張——文学と映画のあいだ——」, 松本清張研究会, 2015年6月6日, 於東京学芸大学
 - ◆ 紅野謙介「『大菩薩峠』の戦後——京大人文研と受容の軌跡」, 共同研究「戦後文化再考」プロジェクト会議, 2015年9月20日, 於国際日本文化研究センター
 - ◆ 紅野謙介「「キノコ雲」と隔たりのある眼差し——戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法」, 第49回原爆文学研究会「国際会議：核・原爆と表象／文学—原爆文学の彼方へ—」, 2015年12月12日(土)—13日(日), 於九州大学西新プラザ大会議室
 - ◆ 三澤真美恵「1950年代前半台湾の映画館における「国歌斉唱」プログラムの確立」, 日本台湾学会第17回学術大会第13分科会「「戦後」台湾における国民党政権の映像資料の可能性—統治・宣伝・正統性」, 2015年5月23日(土), 於東北大学川内北キャンパス
 - ◆ Mamie Misawa “Sinicizing Taiwanese through Singing: Ritual Program of the ROC’s National Anthem Film,” “Visualizing the Process of Becoming Japanese: Colonial Taiwanese Film Civilian Dojo,” International workshop: Nation, Gender, and Genres: Literature and Film from Taiwan and Korea, 1930s ~1960s, August 7, 2015 at Run Run Shaw Tower, Room 730, at Hong Kong University.
- 三澤真美恵「台湾ドキュメンタリーと移行期正義」シンポジウム「ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」2015年10月11日(日), 主催: 山形大学人文学部附属映像文化研究所・台湾文化部, 共催: 公益財団法人りそなアジアオセアニア財団・山形国際ドキュメンタリー映画祭・台北駐日経済文化代表処台湾文化センター, 於遊学館(山

形県生涯学習センター)

- ◆三澤真美恵「映画『セデック・バレ』における再現の不可能性——植民地期台湾原住民族抗日武装蜂起事件の映画化をめぐる」, 2015年度 東アジア歴史研究フォーラム「媒体と公共記憶の中の戦争:19世紀末~20世紀前半期」, 2015年11月6-7日, 於(韓国) 漢陽大学
- ◆山口 守「交差する眼差し:巴金と芹沢光治朗」,「巴金展記念シンポジウム」, 2015年9月5日, 於慶應義塾大学文学部
- ◆山口 守「北京時期:痛苦的/張我軍/的痛苦」, 在地與易地——第十一屆東亞學者現代中文文學國際學術研討會, 2015年11月13日, 於(台灣) 國立政治大學台灣文學研究所
- ◆山口 守「超越本質主義:漢語文學/華語語系文學如何可能」, 當代漢語文學概念與思潮國際學術研討會, 2015年11月20日, 於立教大學
- ◆山口 守「超越作为范例的中国文学概念:以华语语系文学与汉语文学为视角」, “东方学“学科建构与中日韩印阿文学之关联学术研讨会—暨中国东方文学研究会第十五届年会, 2015年11月29日, 於(中国) 广东外语外贸大学

【研究成果物】

- ◆小平麻衣子「林芙美子「放浪記」のカチューシャ」『語文』153輯, 2015年12月, pp.18-24
- ◆小平麻衣子「『若草』における同人誌の交通—第八巻読者投稿詩について」『語文』152輯, 2015年6月, pp.59-69
- ◆小平麻衣子「生き延びる『放浪記』—改造社版と新潮社版の校異を読み直す」『藝文研究』No.109-1, 2015年12月, pp.131-147
- ◆小平麻衣子「文学の教養化と作家の効用—国文学・鑑賞主義論争にふれて」『作家／作者とは何か—テキスト・教室・サブカルチャー』和泉書院, 2015年11月, pp.97-112
- ◆高 榮蘭「「原爆」をめぐる想像力の枠組み——ベトナム戦争と「アジア」言説を手がかりに」, 原爆文学研究会『原爆文学研究』14号, 2015年12月, pp. 264-282
- ◆紅野謙介編著『文学の再生へ 野間宏から現代を読む』富岡幸一郎との共編, 2015年11月, 藤原書店
- ◆紅野謙介「概観 日本文学研究(近代)」日本文藝家協会編『文芸年鑑2015』所収, 新潮社, 2015年6月
- ◆紅野謙介「書評 黒川創著『鷗外と漱石のあいだで／日本語の文学の生まれる場所』」『週刊読書人』2015年9月18日号
- ◆三澤真美恵「国立台湾歴史博物館所蔵「植民地期台湾映画フィルム史料」の特徴」『メディア史研究』38号, 2015年9月, pp.21-46
- ◆山口 守「中国文学の本質主義を超えて——漢語文学・華語語系文学の可能性」『中国——社会と文化』第30号, 中国社会文化学会, 2015年7月, pp.18-44
- ◆山口 守「主體-母語-寫作:超越本質主義」利格拉樂・阿烏『祖靈遺忘的孩子』序二, 台北:前衛出版社, 2015年12月, pp.15-21
- ◆山口 守「白先勇小説中の現代主義:《台北人》的記憶與鄉愁」白睿文/蔡建鑫主編『重返現代』, 台北:麦田出版, 2016年1月, pp.365-382

1-2 コーパス言語学の課題と発展

- 代表者 荻野綱男（国文学科・教授）
- 分担者 田中ゆかり（国文学科・教授）
- 塚本 聡（英文学科・教授）
- 浜野明大（ドイツ文学科・准教授）
- 保阪靖人（ドイツ文学科・教授）

【研究の目的および概要】

グループごとの研究を進めるとともに、共同研究会を開催して、相互に討議を重ねる機会を持った。研究チーム全体としてコーパス言語学を目指すものであるが、研究の目的や概要ということになると、グループごとの違いが大きいので、以下はグループごとに示すことにする。

【荻野綱男】WWW を現代日本語のコーパスとして活かす研究を行った。具体的には、いくつかのテーマで研究を行ったが、方言語形が地域的にどのような分布を示すのかを中心的なテーマにした。

【田中ゆかり・林直樹】主な研究テーマは、以下の3種類である。(1) WWW上の「打ちことば」文書を用いた「ヴァーチャル方言」研究 (2) WWW上の「打ちことば」文書を用いた言語サービス研究 (3) WWW上の「打ちことば」文書を用いた新語・新しい用法研究

【塚本 聡】言語変化について、統語解析コーパスを横断的に使用し、初期近代英語期の言語特徴を明らかにすることを目的とした。PPCEME, PPCMBE, CLMET, ARCHERおよびECCOコーパスを使用することにより、研究の基礎となるコーパスの属性についてその差異について検証したのち、当該時期の言語特性を明らかにした。

【浜野明大】リファレンスコーパス古ドイツ語（750-1050）、中高ドイツ語レフェランスコーパス（1050-1350）、ボンの初期新高ドイツ語コーパス（1350-1650）という中世を3区分する古ドイツ語コーパスを実践的運用し、これまでの言語史的通説を検証していく。この際におそらくコーパス自体の問題点も浮き彫りになってくることが予想される。コーパスの開発者たちに情報・技術提供を現地でして頂きながら、古ドイツ語コーパスを使った新たな言語研究の可能性を検証し、研究の深化に努める。

【保阪靖人】ドイツ語の動詞は、非能格、非対格の区別が有り、それは完了形の助動詞の選択だけではなく、名詞化、受動化などの他の統語現象と関連している。また完了形の選択は動詞の意味的な特性にも依存していることが知られている。しかしながら、現代ドイツ語においてはその意味特性を考慮しない選択を行う動詞も見られる。この逸脱ともみられる現象についての言語データを示していく。

【研究の結果】

【荻野綱男】方言語形の分布については、WWWでいくつかの市町村の方言辞典や方言語彙集を探し、次に、その中の方言語形数十語を抽出し、WWWで用例の検索を行い、全国のどの地域で使われているかを調査した。各語形について分布地域を明らかにすることができた。

【田中ゆかり・林直樹】2015年度は、制約付きながらも“感情の入った発音と「打ちことば」表記の実態把握”を目指した調査を企画・実施した。調査概要は下記の通り。

- ・調査時期：2015年7月28日～8月8日
- ・調査人数：18人（男性7人、女性11人）
- ・現住所：首都圏18人（埼玉県4人、千葉県1人、東京都10人、神奈川県2人）、非首都圏1人（茨城県1人）
- ・調査対象：日本大学文理学部国文学科に所属する3～4年生
- ・依頼方法：調査依頼文を配布し、スマートフォンを通して調査サイトにアクセス。調査サイト経由で回答を依頼。

・回答方法：スマートフォンを通して、1 言う調査（発話の録音）、2 言う＋打つ調査（発話の録音、ならびにテキストの入力）、3 言語意識項目（ラジオボタン式アンケートの入力）、以上3項目への回答を依頼。

【塚本 聡】ARCHERとPPCEMEおよびPPCMBEを比較すると、存在文there、BE動詞現在分詞形や過去分詞形では両者のコーパスでの生起数に強い相関がみられるが、否定辞や一部の代名詞では負の相関がみられた。また、PPCコーパスでは、トークン数及びテキスト数の少なさから、時系列上で生起率に大きなばらつきがみられた。PPCMBEおよびECCOの語彙及び品詞比較では、高頻度語においては、両コーパス間では大きな差異は見られず、相関係数は0.82～0.99（複数種の検定による）と高い相関を示した。品詞別生起数の比較では、形容詞、決定詞、名詞など高頻度語でも生起数にはかなりの差がみられた。これらの観察事実からコーパスサイズが研究結果に相当程度影響を及ぼす可能性があることが明らかになった。

【浜野明大】「古高ドイツ語コーパス（DDD *Das Referenz Korpus Althochdeutsch*）」に焦点を当て、その課題を検証する研究を進めた。その際に検索する語は「主人、支配者」を表す *truhtin* とし、全13コーパス、987テキスト、342219トークンのうち、この語が検出された6コーパスに絞り込み、品詞分析された格、数、さらには意味も精査した（主格、呼格は品詞分析されていないので、自分で分類した）。また、類義語である *got* と比較し、*truhtin* が「神」に近いのか「人間」に近いのか、把握するため共起する語も調査した。このコーパスデータを検証するために、2016年2月に出版した初期中高ドイツ語版『創世記』のデータと比較することも試みた。

【保阪靖人】非能格動詞の非対格化については、保阪（2015、開拓社）において、ドイツ語独自の意味特性によるものである可能性を示している。本プロジェクトでは、典型的な非能格動詞である、*schwimmen* が非対格的完了形を形成するのに対して、*wandern*, *tanzen* のような動詞に関しても同じ事が言えるのかを調査継続中である。*tanzen* に関しては移動を伴う場合でも圧倒的に非能格的である場合が多く、同じ種類の動詞でも同一に分類できないことが明らかになりつつある。

【研究の考察・反省】

【荻野綱男】方言語形の分布を調べるときにどの市町村を選ぶかという問題があった。都会に隣接する地域、地方の中心都市、関東と関西など、いくつかの観点で地域を選んだが、もう少し体系的に選定ができるとよかった。

【田中ゆかり・林直樹】研究期間の後半の2016年度後期に、田中が長期海外出張のため、林と連携をとる形で本研究課題を推進した。その結果、別途示す通りの研究成果を得た。

【塚本 聡】英語の歴史的コーパスにはいろいろあり、それらを組み合わせて使うことにより、各時代の言語変化を解明することができる。その意味では順調に研究を進めることができた。

【浜野明大】実際に古高ドイツ語コーパスを使用した調査により、コーパス自体が孕んでいる細かな課題が見えてきた。前年度に行った初期新高ドイツ語コーパスよりも規模が大きくなり、品詞分析の精度は上がってはいるが、データの信憑性には疑問が残る。

また、本来研究主旨であった「1050年から1350年までの品詞分析された中高ドイツ語のコーパス」を使用した研究ができなかったという問題は、ボン大学トーマス・クライン名誉教授から、まだ一般公開されておらず、関連する内部の研究者たちにしかアクセス権のない中高ドイツ語コーパスの貴重なデータとコーパスへのアクセスパスワードを研究期間の最後である2016年3月に頂いたことで解決できた。さらに、その内容を詳細にレクチャーして頂き、僥倖ながら今までの私のコーパス研究から生じた様々な疑問について議論させてもらった。これらはこの研究にとって大変有意義なものとなり、大きな飛躍となった。しかし、残念ながら共同研究期間は終了してしまうため、このコーパスを使っただけの研究は今後の課題とし、将来的に大きな研究テーマとなることを付記しておく。

【保阪靖人】作成済みコーパスへのデータの追加は予定通り行えた。また、コーパスからの用例抽出は順調に行

えた。しかし、それらを分類・整理することが大変であった。その意味では予定通りには進展しなかったといえる。分析は次年度にかけても継続していきたい。

【研究発表】

荻野綱男 (2015.5.23) 「等語線の引き方」日本語学会2015年春季大会予稿集, pp.129-136

荻野綱男 (2015.9.18) 「Automatic Isogloss Drawing」VIII th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics, Eastern Mediterranean University, North Cyprus

塚本 聡 (2015.10) 「近代英語コーパスの代表性の検討—3 コーパスの比較検討」英語コーパス学会第41回大会 (愛知大学)

浜野明大 招待講演: 2015年6月 Eine neue Edition der ›frühmittelhochdeutschen Genesis‹ Ein Werkstattbericht. Prof. Dr. Elke Brüggem und Claudia Wich-Reif: „Originale und Editionen. Lesehilfen für (Vor-) Leser –in/ Texten des 11. bis 15. Jahrhunderts.“ (Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn)

【研究成果物】

荻野綱男 (2015.12) 「新刊紹介・田中ゆかり編『日本のことばシリーズ14 神奈川県のことば』」語文153輯, p.36 [田中ゆかり・林直樹]

著書 (編共著) 『神奈川県のことば』(明治書院) (共著者: 日野資純・伊川公司) pp.001-256 (田中執筆部分: 第I部 pp.2-18, あとがき p.246, 林執筆部分: 第II部 pp.19-pp.40) (2015年9月)

シンポジウム 口頭発表 (共) 「『江戸・東京 WebGIS』からみた江戸・東京圏」TOKYO TEXTSCAPE: Tadashi YANAI Initiative for Globalizing Japanese Humanities (2015年5月8-9日) カリフォルニア大学ロス・アンジェルス校 於: 米国 Los Angeles 市 (田中ゆかり・林直樹) (2015年5月)

研究発表会 口頭発表 (共) 「『1万人調査からみた最新の方言意識: 『2015年全国方言意識web調査』の概要と報告』 国立国語研究所共同研究プロジェクト (基幹型) 多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明共同研究発表会 (国立国語研究所) (林直樹・田中ゆかり・前田忠彦) (2016年1月)

[田中ゆかり]

論文「言語選択とその背景—東京中心部におけるデパートを中心に—」『日本学』40 東国大学校日本学研究所 (韓国ソウル市), pp.109-128 (2015年5月)

論文「ミュージカル『ライオンキング』の「方言キャラ」—トリックスター「ティモン」と「プンバァ」—」『語文』152 (日本大学国文学会) pp.1-14 (2015年6月)

論文「宝塚歌劇『外伝 ベルサイユのばら—アンドレ編—』に現れるヴァーチャル方言」『語文』153 (日本大学国文学会) pp.1-24 (2015年12月)

エッセイ

「ザ・九州弁」ができるまで—『聖サルマタ伝』から『男おいどん』へ—『地域語の経済と社会—方言みやげ・グッズとその周辺—』第330回 (2015年6月) 三省堂ワールドワイズ・ウェブ

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/ytanaka/>

エッセイ「考える夏「ザ・男弁」から「モテ弁」へ?」『考える人』2015年夏号53 pp.206-207 (新潮社)

インタビュー記事「役割としての敬語の時代 言葉の乱れととるか、豊かさにとるか」『ヒューマンスキル教育研究』23, pp.82-86+p.93 「日本語の教養を深めるオススめブックガイド」秘書サービス接遇教育学会 (2015年4月)

報告書 (編著) 『銀座の言語景観5』(私家版) (2016年02月)

招待講演「戦後日本における「方言」の価値の変遷:Shifting Valences of Dialect in Postwar Japan」於：コロンビア大学東アジア言語文化学部 403 Kent Hall (New York 市) (2015 年 11 月)

招待講演「Virtual Dialects as a Window on Japanese Language and Society (「ヴァーチャル方言」からみる日本語社会：テレビドラマを例として)」Cornell University EAP Speaker Series Talk (於：374 Rockefeller Hall Asian Studies Lounge) (ITHACA 市, NY 州) (2016 年 2 月)

〔浜野明大〕著書：2016 年 2 月 Die frühmittelhochdeutsche Genesis: Synoptische Ausgabe nach der Wiener, Millstätter und Vorauer Handschrift, Hermaea Neue Folge 138, De Gruyter, Berlin/ New York 2016.

1-3 近現代におけるナショナリズムと歴史認識への各国の対応に関する研究

●代表者 小浜正子（中国語中国文学科・教授）

●分担者 小野雅章（教育学科・教授）

粕谷 元（史学科・教授）

土屋好古（史学科・教授）

初見 基（ドイツ文学科・教授）

古川隆久（史学科・教授）

松重充浩（史学科・教授）

森ありさ（史学科・教授）

【研究の目的および概要】

本研究は、近代以来、さまざまな国や地域における民族意識・国民意識が如何にして形成され、それぞれの地域の人々が自己の所属する社会集団を他者との関係の中でどのようにアイデンティファイしてきたか、それは時間の経過の中で如何に反芻され他者との相互作用の下で如何なる歴史意識が形成されたかを、比較の視座をもって、実証的かつ総体的に検証しようとしている。具体的には日本および中国、ロシア、ドイツ、トルコ、アイルランド・イギリスなどの地域における近代的国民(民族)および国民(民族)意識の形成とそこからの排除、その発露のされ方や、そのことを各国の政府や社会、知識人や民衆はどのように認識し反復してきたのか、他者との協調的または対立的な関係はそこにどのように影響しているのか、などに関わる諸問題を比較史的な視点を持って考察しようとするものである。

研究の方法としては、近代以来現在までのナショナリズムと歴史認識について、各共同研究者が専門とする地域の事象を対象としてその地域・時期のナショナリズムと歴史認識の特徴を具体的に明らかにすることを基盤とする。その上で、各地域の事象の比較から見通せるナショナリズムがはらむ一般的な問題点を、歴史学はもちろん教育学や現代文化研究の視点も交えて掘り下げるとともに、異なった地域を専門とする研究者による共同研究であることを生かして、それぞれの地域のナショナリズムの特徴を相対化し、さらにそうした民族意識・国民意識の相互連鎖によって、互いにどのような影響をうけてナショナリズムのあり方が変容していったかを分析する。このような研究方法を採ることによって、現在の東アジアにおけるナショナリズムが相互関係の中での先鋭化してゆく状況の認識のための客観的な理解の視座を得るとともに、その成果を社会的に発信して社会貢献をめざすものである。

【研究の結果】

各地域の近現代のナショナリズムの具体的な様相は、下記研究発表や研究成果物に挙げたメンバーの実証研究に詳しい。それらを通覧していえることは、個々の地域の民族意識・国民意識のあり方は、当時の世界の環境—とりわけ世界大戦などによる影響を大きく受けているものの、その具体的な発現のあり方には相当な違い—個性も見られることである。そのような各地域のナショナリズムの個性に留意しつつ、それらの相互連鎖が排他的・対立的なものになる場合と、異なった個性を持つ国や民族が共存の路を求めてゆく場合とがみられることが注目される。その際に、他国との関係の中で形成された自国の歴史をどのように捉え、現在をそれと如何に関連づけてゆくかという歴史認識のあり方が少なからぬ影響を及ぼすことも見て取ることができる。

【研究の考察・反省】

近代から現在に至る日本および中国、ロシア、ドイツ、トルコ、アイルランドの各国の民族意識・国民意識の諸相について、共同研究のメンバーそれぞれが具体的な文献史料に基づく実証研究を行って成果を挙げ、それを共有

することによって比較史的な視座での考察を行うことが出来た。また、今回の共同研究では、こうした歴史研究の成果をどのように教育現場や社会に還元し、より開かれた国際協調的な国民意識・民族意識の形成に資することが出来るかについても、教育実践の最前線で試行錯誤を続ける専門家と共に議論し、またシンポジウムなどの場においてそれを社会発信することも出来た。現在、日本社会が急速に変化する中で、実証研究の蓄積に基づいた歴史意識を涵養し、今後の社会のあり方を歴史から学ぶことの出来るような歴史認識の形成へ向けて、こうした共同研究の成果を活かすことが出来る方法を、さらに模索してゆきたい。

【研究発表】

- ・ 小野雅章「『日本教育史研究の発信力』とは何かの自問自答——「受け手」を意識した研究の成果と授業とは」第34回日本教育史研究会サマーセミナー，2015年8月23日，於：東洋大学白山キャンパス。
- ・ 森ありさ「1916蜂起：スティーヴンス・グリーン占拠の再検討」2014年度アイルランド研究年次大会シンポジウム，2014年11月23日（日），日本大学文理学部。
- ・ 森ありさ「イースター蜂起とアイルランド独立」アイルランド文学・歴史合同研究会，2015年10月24日（土），法政大学。
- ・ Masako KOHAMA, “Birth Planning and Transformation of Rural Families in China”, The Third Congress of the Asian Association of World Historians, Nanyang Technological University, Singapore, 31st May, 2015.
- ・ 松重充浩「日中関係の中の大連」，国際善隣協会主催「東北フォーラム：「新しい世代が見た満洲」」，2015年10月21日，国際善隣協会。

【研究成果物】

- ・ 古川隆久『近衛文麿』（吉川弘文館 2015年9月）。
- ・ 古川隆久『昭和史』（筑摩書房・ちくま新書 2016年5月）。
- ・ 古川隆久・森暢平・茶谷誠一編『『昭和天皇実録』講義』（吉川弘文館 2015年10月，編者，「はじめに」「幼少期と帝王教育」執筆）
- ・ 小野雅章「日本教育史研究における研究成果の「発信力」再考——研究成果と授業（講義）との間で」『日本教育史往来』（日本教育史研究会）No.218号，2015年。
- ・ 小野雅章「戦後七〇年に再考する御真影「奉護」と近代天皇制との関係史」『パブリシャーズ・レビュー』2015年11月号（通巻40号）。
- ・ 土屋好古「帝国と「国民」の相克—ロシア自由主義者の市民的ネイション形成志向とツァーリ専制（1904—1905年）」（2014年度大会共通論題「戦争と「未完のネイション」—近現代ヨーロッパ史再考—」基調報告）『西洋史研究』新輯44号，2015年，pp.123-138。
- ・ Yoshifuru Tsuchiya, “From Workers’ Milieu to the Public Arena: Workers’ Sociability and Obshchestvennost’ before 1906” in Yasuhiro Matsui ed., *Obshchestvennost’ and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society*. (London, Palgrave Macmillan, 2015), pp.34-60.
- ・ 初見 基「ベルリンの〈近代〉」，『西洋近代の都市と芸術5 ベルリン 砂上のメトロポール』（2015年，竹林舎）92-118頁。
- ・ 初見 基「〈連帯〉の変容—戦後ドイツ政治文化の一断面—」，『ドイツ文学論集』第37号（2016年3月，日本大学文理学部ドイツ文学科研究室）47-66頁。
- ・ 加藤聖文・田畑光永・松重充浩編『挑戦する満洲研究—地域・民族・時間—』（東方書店，2015年12月）全248頁。

-
- ・ 小浜正子編『ジェンダーの中国史』勉誠出版, 2015年11月, 全295頁.
 - ・ 小浜正子「歴史教育のジェンダー主流化へ向けてー日本学術会議ジェンダー史分科会などの取組から」, 大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会編『史学会125周年リレーシンポジウム1 教育が開く新しい歴史学』山川出版社, 2015年11月, 86～103頁.

1-4 幸福の決定要因に関する学際的実証研究 (カンボジアと日本の比較研究の試み)

- 代表者 山本質素 (社会学科・教授)
- 分担者 嘉吉純夫 (哲学科・教授)
- 小林紀由 (哲学科・教授)
- 高橋陽一郎 (哲学科・教授)
- 大塚友美 (総合文化研究室・教授)
- 石川晃司 (総合文化研究室・教授)
- 藁谷哲也 (地理学科・教授)
- 落合康浩 (地理学科・教授)

【研究の目的および概要】

目的：本研究の目的は、日本社会における「幸福の決定要因」に関する調査データの実証分析結果によって得られた知見について、国際的なレベルでの比較可能性を検討することにある。具体的には、岐阜県高山市で得られたアンケート・データと、カンボジア国内（シェムリアップ州内の二か村）で得られたデータを対比し、比較研究の可能性とその方法を検討することになる。

本研究は、人文科学研究共同研究・総合研究として以下のような経過を経ている。

平成21年度 社会経済変動と文化・伝統の変容の幸福への影響に関する学際的研究(日本を分析対象として)

平成22年度 社会経済変動と文化・伝統の変容の幸福への影響に関する学際的研究(飛騨・高山地域を分析対象として)

平成23年度 社会経済変動と文化・伝統の変容の幸福への影響に関する学際的実証研究(飛騨・高山地域を分析対象として)

平成24年度 社会経済変動と文化・伝統の変容の幸福への影響に関する学際的実証研究(日本型モデルの構築と国際比較分析のフィージビリティ・スタディー〈実行可能性の調査研究〉)

平成25年度 幸福の決定要因に関する学際的実証研究(文理調査データの活用)

概要：国際比較の可能性を検討するための基礎となるデータは、平成22年度総合研究において実施した、飛騨・高山地域を対象にしたアンケート「高山市における伝統・文化と生活意識に関する調査」データであり、比較するデータは、平成25年度にカンボジア王国シェムリアップ州ノコール・トム地区ロハール村を対象地として実施したアンケート「伝統・文化と生活意識に関する調査」データ(2013年12月25-27日)、および平成26年度に同州ドーン・ケオ地区ピエム村において実施した、「伝統・文化と生活意識に関する調査(ピエム村)」データ(2014年12月23-25日)である。ロハール村はアンコール遺跡群のうちのタ・プローム寺院遺跡およびバンテアイ・クデイ寺院遺跡に隣接し、観光関連産業に携わる機会が多く、観光地化の影響を強く受けて、村人の生活に大きな変化がみられる村落である。また、ピエム村は、遺跡群から離れた位置にあるため、観光地化の進展がなく、伝統的な農業生産を基礎にした生活を送る村落である。平成25年度・26年度の研究は、2村で実施したアンケート・データおよびインタビュー調査データを中心に進めた。

経過：平成26年度・27年度(2014年度・2015年度)は以下のように研究を進めた。

1. アンケート調査対象村落の選定と調査準備、村民および関係機関へのインタビュー調査

(1) 調査項目の修正と調査票の作成および調査対象地の設定

- ・2014年4月～8月：2013年12月に実施したロハール村でのアンケート調査の考察・反省を踏まえ、語句等を修正したアンケート調査票を作成(日本語)。クメール語への翻訳を依頼。調査方法(アンケート回答補助員を依頼する等)を確定。

- ・ 9月2日～9日：アンコール・ワット遺跡群周辺村落を対象に、第2回目のアンケート調査対象村落を選ぶための調査を実施。比較調査対象地の選定については、2013年度にアンケートを実施したロハール村が観光地化の進んだ地域であることから、伝統的な生活の変化が急激に進んでいない地域を中心に進めた。数か村で行った選定調査の結果、アンケート実施候補地として、西バライの北側に位置するドーン・ケオ地区ピエム村を選定し、関係機関に調査協力を依頼。

(2) ピエム村におけるアンケート調査の実施

- ・ 12月20日～29日：ピエム村内3か所でのアンケート調査を実施。23日81票, 24日79票, 25日68票, 計228票を得た。調査票の点検を行う。

(3) 調査対象村落村民へのインタビュー調査, および周辺地域の視察

- ・ 2015年9月1日～9月10日： アンケート調査実施2村落およびNGOにおいてインタビュー調査を実施。
 - 9月2日：ロハール村村長およびピエム村村長訪問と挨拶。ピエム村村民へインタビュー
 - 9月3日：ピエム村村長および村民へインタビュー
 - 9月4日：バンテアイ・スレイNGOシェムリアップ事務所において、管理者および所員へインタビュー
ピエム村村民へインタビュー
 - 9月5日：ピエム村村民へインタビュー
 - 9月6日：クバル・スピアンおよび周辺村落視察
 - 9月7日：ロハール村村長および村民へインタビュー
 - 9月8日：バンテアイ・スレイNGOにおいて所員へインタビュー
- ・ 12月23日～29日：アンケート調査実施2村落においてインタビュー
 - 12月24日：ピエム村村民へインタビュー
 - 12月25日：ロハール村村民へインタビュー
 - 12月26日：ロハール村に隣接する北スラスラン村市場およびロハール村において村民へインタビュー
 - 12月27日：プノン・クーレン近郊の焼畑集落（ポペル村）においてインタビューおよび環境調査
 - 12月28日：トンレサップ湖周辺村落の視察

(4) アンケート・データの入力・分析

- ・ 2016年1月～2月：データ入力作業
- ・ 3月：データ集計および分析

2. 研究会の開催：2014年度および2015年度の研究会は以下のように実施した。

[2014年度]

- 第1回研究会 4月1日：研究方針について
- 第2回研究会 5月15日：研究内容と予算確認
- 第3回研究会 5月22日：ロハール村アンケート調査データの集計について

〈カンボジア現地調査〉 9月2日～9月9日：第2回アンケート調査地の選定・インタビュー調査

- 第4回研究会 10月9日：ピエム村におけるアンケート質問項目の修正についての検討
- 第5回研究会 11月19日：質問項目の修正

〈カンボジア現地調査〉 12月20日～12月29日：ピエム村においてアンケート調査・インタビュー調査

- 第6回研究会 2015年3月6日：ピエム村アンケート・データについての検討

[2015年度]

- 第1回研究会 4月15日：調査日程、アンケート・データ集計作業についての検討

第2回研究会 5月27日：調査日程の調整
第3回研究会 6月3日：調査日程・調査方法の検討
第4回研究会 6月18日：調査内容の調整
〈カンボジア現地調査〉 9月1日～9月10日：インタビュー調査
第5回研究会 9月17日：現地調査結果の検討
第6回研究会 10月28日：現地調査結果の検討
第7回研究会 11月19日：現地調査結果の検討
第8回研究会 12月17日：カンボジア現地調査打ち合わせ
〈カンボジア現地調査〉 12月23日～12月29日：インタビュー調査
第9回研究会 2016年2月16日：調査データの集計について
第10回研究会 2月20日：調査データの検討
第11回研究会 2月29日：集計データの検討
第12回研究会 3月3日：集計データのクリーニングについて

【研究の結果】

現在、カンボジア国内の2か村において実施したアンケート調査データと、インタビュー調査で得たデータとの照合・分析作業を進めている。

【研究の考察・反省】

第1回目のアンケート調査を実施したシェムリアップ州ノコール・トム地区ロハール村は、アンコール遺跡群の一つであるバンテアイ・ケデイ寺院遺跡に隣接し、観光地化が進み、遺跡周辺での土産物販売、土産物製作、レストラン等での就業のほかに、シェムリアップ市内で進むビル建築、道路建設の場での建築労働に従事する機会が増加し、大きな経済的・社会的変動を経験している村落である。第2回目のアンケート調査を実施した同州ドーン・ケオ地区ピエム村は、大きな人造湖である西バライの北側に位置し、遺跡群から離れていることから、観光地化の波を直接に受けることなく、村民は伝統的な農業生産を基本にした生活を営んできた村落である。そのために、NGOによる経済的・社会的援助の対象となってきたが、一方で、近年ではバイク等の交通手段の利用により、シェムリアップ市内で進むビル建築、道路建設等の建築作業員として働く機会が増加する等、貨幣経済の浸透とともに生活の変化が始まりかけている。

上記二つの村において実施した調査データに関しては、それぞれの村がおかれている地理的・社会的・経済的・歴史的な性格をどのように反映しているかを捉えることが肝要であり、また、その異同の背景を、インタビュー資料等との関係を通して捉えて行く作業をさらに進める必要がある。

【研究発表】

なし

【研究成果物】

大塚友美, 2015, 「社会経済変動と幸福」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』89号(117-123頁)
落合康浩, 2015, 「カンボジア王国シェムリアップ州ロハール村における観光地化と生活の変化の実態」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』89号(123-127頁)
山本質素・大塚友美・石川晃司, 2016, 「社会経済発展と農村の変容—カンボジア2農村の事例—」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』91号(83-104頁)

1-5 21 世紀における日本の針路に関する学際的研究—少子高齢化とそれに伴う諸問題の克服策—

●代表者 大塚友美（総合文化研究室・教授）

●分担者 山本質素（社会学科・教授）

内藤佳津雄（心理学科・教授）

櫛 英彦（体育学科・教授）

上之園佳子（社会福祉学科・教授）

石川晃司（総合文化研究室・教授）

落合康浩（地理学科・教授）

小池高史（社会学科・助手A）

【研究の目的および概要】

本研究の目的は、日本大学文理学部人文科学研究所平成25年度総合研究（21世紀における日本の針路〈少子高齢化への挑戦〉）の成果を基に、研究をさらに発展させることにより、今日の我が国が直面している少子高齢化に起因する複雑多岐にわたる諸問題を、総合的かつ学際的に考察することを通して、これからの日本が採るべき対応策を考察することにある。

社会経済の発展が成熟段階に達した今日の日本は、経済活力の減退、膨れ上がる社会保障費、年金制度の改正（財源の確保）、老人の孤独死、国民の健康のさらなる増進、といった様々な錯綜した問題に直面している。人口経済学の観点からするなら、これらの諸問題の根底にある要因は、人口転換（出生率と死亡率は、社会経済の発展にともなって高水準から低水準へと推移する、とする人口経済学上の基本的理論）の進展の帰結である少子高齢化現象に求めることができる。つまり、発展が成熟段階に達した先進諸国は、少子高齢化現象やそれにともなう諸問題の発生を回避することはできない、という厄介な事態に直面しているのである。

平成26年度および平成27年度における本総合研究は、①本学部の社会系・理系・文系の専門を異にする研究者が、少子高齢化の進展にともなう様々な問題に関してそれぞれが専門とする学問領域から多角的に学際的な実証分析を行い、②その成果に専門の異なる研究者チームが徹底的な検討を加える作業を通して、③少子高齢化がもたらす諸問題に対して今後日本が採るべき対応策を具体的に考察することを目指してきた。

ここで改めて強調すべきは、社会系・理系・文系の18学科1研究室からなる、総合学部としての文理学部の長所である。本学部は、文理融合（文と理の融合）を基本理念としていることから分かるように、こうした複雑かつ錯綜した問題を分析する上で必要となる学際的アプローチの推進に適したアカデミックな研究環境を有している。

この長所を生かすべく、本研究チームは、社会系・理系・文系の諸学問領域に属する研究者が協力して学際的研究（すなわち文理融合）を実施し、①少子高齢化が進展する過程、②少子高齢化が様々な社会経済問題と化す過程、そして③そうした問題への対応策を総合的に分析しようとするものである。

上記の目的を達成するため、本研究チームは次の手法をとった。初年度は、研究会を開催して（詳細は次の通り）、①各研究者の研究の進捗状況や、②各研究の互関連性などを確認すると同時に、③研究方針等を微調整した。さらに、少子高齢化対策の一環としての国土利用計画であるコンパクトシティーに関する国内現地調査を行い、実状の把握に努めた。

【平成26年度】

（研究会）

第1回研究会（2月20日）次年度の研究方針について。

第2回研究会（4月10日）研究プロジェクトの打ち合わせ等。

第3回研究会（7月3日）現地調査の実施について。予算確認。

第4回研究会（7月29日）レクチャー（トラムを中心とするコンパクトシティの交通事情）。

第5回研究会（8月20日）研究の推進について。予算確認。

第6回研究会（10月2日）研究の進捗状況の確認。

（国内調査）

2月1日～2月3日、コンパクトシティ視察（富山市）。

第2年度においては、①定期的に研究会を開催し（詳細は次の通り）、②各研究会において1～2名の研究者がその研究成果を発表し、次いで③これに社会系・理系・文系の各学問分野からの検討を行うことにより、総合研究の精緻化を図った。なお、第2年度においても、少子高齢化対策の一環としての国土利用計画であるコンパクトシティに関する国内現地調査を行い、実状の把握に努めた。

【平成27年度】

（研究会）

第1回研究会（4月15日）研究成果の出版計画について。

第2回研究会（5月13日）発表者：大塚友美

第3回研究会（5月27日）発表者：澤田博司、葭田光三

第4回研究会（6月25日）発表者：石川晃司、小池高史

第5回研究会（7月23日）発表者：櫛 英彦

第6回研究会（10月8日）発表者：藁谷哲也、落合康浩

第7回研究会（10月22日）発表者：上之園佳子・内藤佳津雄

（国内調査）

2月3日～2月5日、コンパクトシティ視察（掛川市、浜松市）

【研究の結果】

研究成果の概要に関しては、分析の対象が社会系・文系・理系の多分野にわたるため、ここで一括して論ずることはできない。しかし、先に述べた本研究の目的は概ね達成された、と確信している。

なお、本研究チームの研究の成果の詳細に関しては、平成28年度中に文真堂より出版される予定であり（下記参照）、これを参照されたい。

大塚友美編著『人類の歩み』（仮題、AN21研究シリーズ、No.6）文真堂、平成28年度に刊行予定。

【研究の考察・反省】

本研究チームは、所期の目的は概ね達成することができた、と確信する。反省点としては、研究の成果物（大塚友美編著『人類の歩み』（仮題、AN21研究シリーズ、No.6）文真堂、平成28年度に刊行予定）において、各研究分野の有機的な関連性をもう少し濃厚に打ち出した方が、社会的アピールも大きかったのではないかと、と思われる点である。

【研究発表】

①大塚友美「少子高齢化現象の経済的帰結（簡易人口経済計量モデルの活用）」、日本人口学会第66回大会、（2014

年6月14日(土)～6月15日(日))。

②大塚友美「生活の充足度に関する住民意識調査」日本人口学会第67会大会（2015年6月5日～6月7日，於：梶山学園大学）。

【研究成果物】

既述の通り，本研究の成果は，平成28年度中に文真堂より出版の予定。

大塚友美編著『人類の歩み』（仮題，AN21研究シリーズ，No.6）文真堂，平成28年度に刊行予定。

2-1 心と世界

- 代表者 丹治信春（哲学科・教授）
- 分担者 飯田 隆（哲学科・教授）
- 永井 均（哲学科・教授）
- 高橋陽一郎（哲学科・教授）
- 小林紀由（哲学科・教授）

【研究の目的および概要】

現在の日本のように、科学教育が行き渡っていて、かつ、キリスト教やイスラム教のような一神教的宗教が力をもたない社会においては、この世界は究極のところ物質から成ると考えている人が多数にのぼるにちがいない。つまり、物質とは別の種類の存在者である霊や魂のようなものがあるとする二元論的世界観は、この社会の中で公然とは信じられていない。だが、そうすると、私たちの感覚や感情や気分や思考といった、心に属する事柄が、どうやって物質だけから成る世界の中に位置を占めることができるのだろうか。

本研究は、このような問題意識のもとに、心は世界の中にどう位置づけられるかという問いに対して、一方で、現代の心の哲学、言語哲学、倫理学、美学および宗教学といった多様な学問領域からアプローチすると同時に、他方で、西洋と東洋という異なる文化的視点からもアプローチするという目的で、計画された。

この目的のために、平成23年度以来行っている「日本大学人文科学研究所哲学ワークショップ」を二回開催するとともに、海外からの研究者による講演とそれに続く討議からなる「日本大学人文科学研究所哲学セミナー」を二回開催した。

いずれの催しも、学外からの多くの参加者を迎え、活発な討議がなされ、心に属する事柄を物質界に位置付けるという大きな問題に対して、きわめて多様なアプローチが存在すること、それにもかかわらず、相互間の理解が可能であることが確認された。このことは、本年度の研究の大きな成果であったといえる。

【研究の結果】

まず、人文科学研究所哲学ワークショップ第9回として、2015年5月29日に「Topics in Ontology」を開催した。このワークショップの目的は、存在論に属する諸問題について、その歴史的背景を念頭におきながら議論することにあった。その中心となったのは、飯田隆（本学哲学科所属）の“Towards an ontology of a rainbow”と題された発表と、Wolfgang Ertl氏（慶應義塾大学文学部）による“Kant’s dual track account of things in themselves and appearances”と題された発表であり、前者についてはZed Adams氏（New School of Social Research, New York）が、後者については林晃紀（本学人文科学研究所研究員）が、それぞれ詳細なコメントを行った。前者では、虹の存在論的身分についての、アリストテレスからカントに至るまでの議論が検討され、後者では、虹がその比喻としても用いられたカントにおける物自体と現象の関係が論じられた。飯田の発表は、虹が人間の知覚と相対的にのみ同定される現象でありながら、その原因を自然の秩序のなかにもつ物的出来事であること、また、その本性について古代ギリシアから近代に至るまで、議論が絶えなかったことは、「心と世界の関係」という問題を考えるのに大きな手がかりを与えてくれるという予想のもとになされた。Ertl氏の発表は、その同じ関係が、カントの哲学体系の要でありながら大きな問題でもある現象と物自体という考察のなかにあることをはっきりさせた。

2018年3月14日に開催された第10回の人文科学研究所哲学ワークショップは、「現代形而上学から倫理学へ」と題され、現代分析哲学の一分野である現代形而上学が倫理学にどのように貢献しうるかに関して、形而上学および倫理学の専門家である四名の若手の研究者による発表が行われた。心と世界という問題が尖鋭な形で現れるのは、倫理の本性を考える場面においてである。自然主義のもとでは、自然的世界のなかには本来、倫理的善悪のような

価値は存在しないと考えられるがゆえに、倫理学が扱う現象は、客観性をもたず、あくまでも人間の心と相対的な存在しかもたないと考えられるからである。

まず鈴木生郎氏（慶應義塾大学）は、全体の導入として、「現代形而上学と倫理学の幸福な関係に向けて：問題の所在」と題する発表を行った。鈴木氏は、現代形而上学は、倫理学的主張がもつ形而上学的前提を吟味することで倫理学の問題解決に資するだけでなく、形而上学と倫理学の関係についての一般的な考察のきっかけにもなると論じた。続いて谷川卓氏（千葉大学・慶應義塾大学）は、「原因と責任：現代形而上学は倫理学に（どのように）貢献できるのか」という題目の発表を行った。谷川氏によれば、因果関係についての反事実条件法に基づく分析は、原因と責任についてのより深く正確な理解に結びつく。その点で、形而上学は責任についての倫理学に貢献しうるのである。次に、吉沢文武氏（千葉大学）が、「害に関する比較説／非比較説の対立と非存在の価値」と題する発表を行った。害の理論として比較説と非比較説は鋭く対立するものと一般に理解されているが、吉沢氏によれば、両者には実は実質的な対立はない。そしてそれを示す議論の重要なポイントにおいて、形而上学的考察の重要性が示されることになる。最後に、蝶名林亮氏（創価大学東洋哲学研究所）は、「メタ倫理学における非還元的事実論について」という題目の発表を行った。蝶名林氏は、非還元的事実論を批判する際に持ちだされた「中立テーゼ」に注目し、その是非を検討した。中立テーゼは、メタ倫理学と規範倫理学の中立性を主張するものであり、形而上学と倫理学の関係を考える上で重要な意味をもつものである。本ワークショップは、とくに多くの聴衆を集め、活発な討議が交わされたことが特筆されるべきである。

海外の研究者を迎えての講演会・セミナーは本年度二度開催した。2015年6月19日には、Sebastien Gandon 氏（Blaise Pascal University, Clermont-Ferrand, France）を迎えて「Russell and Neo-Logicians」（ラッセルと新論理主義者たち）と題された講演会を開催し、2016年1月28日には、Jenny Hung 氏（Lingnan University, Hong Kong）を迎えて「On Baker's Constitutionalism of Persons and Materialist Ontology」（ベイカーの人格構成主義と唯物論的存在論）と題された講演会を開催した。前者は、数理哲学に属する専門的課題に関するものであったため参加者は少数であったが、きわめて活発で有益な議論が交わされた。後者は、人間とそれ以外の動物とのあいだに本質的な違いを設定する現代アメリカの哲学者ベイカーの議論への批判を展開するものであり、自然界のなかでの人間の位置を考えるという本年度のテーマに直接的にかかわるものであった。

【研究の考察・反省】

人文科学研究所哲学ワークショップは、本年度10回を数えるまでに至った。とくに3月に開催するワークショップに関しては、例年この時期に開催していることもあり、首都圏での哲学関係の恒例行事のひとつとみなされるまでに至っている。本年度に関して残念であったことは、ワークショップの提題者のなかに本学所属の大学院生を含めることができなかったことであり、この点については来年度以降、改善して行きたい。海外の研究者が日本を訪れる機会が増えていることもあり、そうした研究者を迎えてのワークショップ、あるいは、セミナーは今後とも開催する機会が増えると思われるが、それに対応できるだけのコミュニケーション能力を本学の大学院生に身に着けさせることも、今後の大きな課題である。

【研究発表】

1. 飯田 隆 2015年5月29日 “Towards an ontology of the rainbow”
日本大学人文科学研究所第9回哲学ワークショップ「Topics in Ontology」
2. 飯田 隆 2015年9月16日 “Towards an ontology of the rainbow”
招待講演 北京大学哲学科

【研究成果物】

1. 永井均著 『存在と時間——哲学探究1』文藝春秋, 2016年3月30日

2-2 ヨーロッパにおける「帝国」の比較史的研究

- 代表者 土屋好古（史学科・教授）
- 分担者 坂口 明（史学科・教授）
森ありさ（史学科・教授）
林 亮（史学科・助手A）

【研究の目的および概要】

近年、「帝国」に対する関心が高まっている。それは世界の近代化の中で追求されてきた国民国家という国家形態が、一方で国内の国民的凝集性を高め、近代資本主義の発展に有利な状況を生み出す一方で、民族的少数者に対する差別や排除という傾向を内包し、国際関係においては国民国家間の対立を解消しきれていないからであり、また帝国が、その専制国家的イメージの一方で、多民族・多文化の共生空間として存在していたことが明らかにされてきているからである。2014年に柄谷行人が『帝国の構造』を上梓して、近代国民国家を帝国に止揚するというラディカルな議論を展開したのも、このような背景によるであろう。

本研究は、こうした「帝国」の歴史的事実を、古代から近現代のヨーロッパの歴史において探ることを目的とする。古代帝国の一つの典型とされるローマ帝国、近代の陸上帝国であるロシア帝国と、帝国とされながらそうした古代以来の陸上帝国とは異なるいわゆる海上帝国であった大英帝国を主な分析対象としながら、さらに中世における帝国形成の試みとその挫折の分析を行うことで、ヨーロッパにおける帝国のあり方を比較史的に明らかにする。

【研究の結果】

まず、研究参加者各人の研究は以下のとおり遂行された（研究対象の時代順に記す）。

坂口：ローマ帝国の経済、社会についての史料収集と検討をおこなった。おもに都市社会の実態を明らかにするため、オスティアやポンペイの商工業に関する遺構の画像データと、碑文の収集を行った。その結果、活発な経済活動の実態とともに、社会的流動性を確かめることができた。これらを帝国の構造の分析に結び付けるためには、さらに属州のデータを集めることが必要である。ローマ帝国を考える際には、支配の担い手の変化に注目する必要がある。イタリアの都市貴族や属州の「ローマ化」された人々が、もともとのローマの貴族層に代わって、元老院議員や皇帝をはじめとする権力の中核に進出した点に、ローマ帝国の大きな特徴と強みがあると思われるからである。

林：中世フランスのカペー朝を中心に、その前後の時代としてフランク王国、あるいはヴァロワ朝時代における王国統治の構造についての史料状況を調査した。また、同時代のイングランドやドイツといった西ヨーロッパの諸王朝、およびそれらを宗教的側面から統合する権力体としての教皇庁についても、比較検討を行った。今回はこうした調査をもとに、貴族、つまり騎士身分への参加儀礼の成立過程を検討することで、封建社会下で支配階級（貴族）の再編成がどのような過程で進化したのかを考察することができた。今後は、今回の調査で得られた史料状況をもとに、より広範な地域や側面における中世西欧の権力構造の検討を行いたい。

土屋：フィンランド国立図書館（＝ヘルシンキ大学図書館）スラヴ図書室において史料調査を実施し、1906年の第一国会関係の同時代文献の閲覧と写真撮影を行った。本研究も含めて、ここまでの研究で以下の点を確認した。ロシア帝国においては、20世紀初頭に統治構造としての帝国と、専制体制を脱して民主化を求める自由主義運動などの方向が対立した。多民族多文化的空間であったロシア帝国において、帝国の一体化という前提を維持したまま民主化を実現するためには、各民族の個別のナショナリズムを抑制した上で、各民族が平等な市民として民主的体制に参加するという政体を実現するほかはなかった。自由主義者はこうした政体の実現をめざして、日露戦争のさなかから第一次革命期にかけて運動を展開した。しかし、結果として生まれた憲法と国会の体制は、平等な市民か

らなる国家ではなく、帝国的多様性をそのまま選挙制度に持ち込んだ体制となった。一定の民主化は達成されたが、帝国的国家構造は維持された。これについては下記に記すように国際会議で報告した。

もう一つの点は、自由主義運動と重なり合いながらしかし独自の運動を展開した労働者と、自由主義の基盤となった教養社会との関係を考察した。平等な市民からなる国家の構築をめざす自由主義運動は、第一次革命期に労働者や農民をも自分たちと対等の政治アクターとして認めようとした。ここに、少なくとも一時的に下層民衆を包摂するようなロシア版市民社会の萌芽が生まれたことを論じた。

森：第一次世界大戦期のアイルランドにおける自治運動、およびブリテンからの分離運動の史料調査等を行った。この過程で2016年3月27日のイースター蜂起100周年記念行事への招待を受ける機会を得た。今後は50周年、75周年等の節目の時期、さらには主として過去の政権交代時のコメモレーションのあり方との比較研究が課題である。

【研究の考察・反省】

各人の今後の課題については上述のとおりである。ここでは、本研究の趣旨の点から簡単に考察を述べたい。古代・中世においては、近代的なナショナリズムが生まれておらず、したがって帝国的な統治のあり方にはある種の安定性があったと考えられる。支配の担い手が変化しても、帝国的な統治自体は維持されていくという坂口の指摘からもそのことはうかがえる。ウォーラスティンは、歴史上現れた世界システムが、近代ヨーロッパの資本主義世界システムを除いてすべて世界帝国化したと主張しているが、帝国が広大な空間に一定の安定をもたらすことができるのだとすれば、国家建設・統治の力学が帝国化に向かったことは理解に難くない。中世にはローマ帝國的な枠組みが解体して諸国家が分立したが、他方で近代とは異なり国家を超えた統合原理が働いていた。すなわち、林が述べるカトリック権力である。またこの時代の国家は、近代的な意味での領域国家・主権国家でもなかった。個々の国家構造は帝國的なものではなかったが、ヨーロッパ社会全体で見れば、帝國的な、ヒエラルキーに基づいた権力の構造が存在していたのだと言えるかもしれない。のちに宗教改革が起ると、キリスト教は徐々に個別の国家を超えた統合原理であるよりも、むしろ国教化して、国内の統合原理とナショナリズムの基盤となっていくだろう。中世において、なぜ政治的な統合をめざす、つまり帝國的な支配をめざす動きが挫折したのか、について今後さらに検討を加えていく必要がある。

18世紀後半以降、ヨーロッパでナショナリズムが生まれ拡大すると、西ヨーロッパ諸国では資本主義発展に適合的な国民国家の体制が成立していった。これは多様性多重性を特徴とする帝国とは全く異なる、均質な国民からなる国家であった。ロシアでは、帝国内部の諸民族の独立という方向ではなく（最も強固なナショナルな感覚を持っていたと考えられるポーランド地域ですら第一次革命期において独立の主張は主流ではなかった）、それらの諸民族の平等を前提とした帝国の再編が追求されることになった。他方、アイルランドでは、大英帝国からの分離・独立という方向が打ち出された。本研究では取り上げられていないが、東ヨーロッパにおいても、諸民族が独立して国家を形成するという形で、オーストリア＝ハンガリー帝国は解体した。ナショナリズムがすでに生まれている時代において、帝國的な構造をどのように再編するのかという近代の帝國的國家の課題について、こうした相違がどこから生まれてくるのか、これは今後の課題としなければならない。

【研究発表】

林

学会名：日本大学史学会 平成27年度第7回例会

発表テーマ：記憶装置としての騎士叙任式の役割について

2016年3月12日，日本大学文理学部2201教室

土屋

学会名：ICCEES World Congress in Makuhari

発表テーマ：“The Russo-Japanese War, the First Revolution and the Liberal Quest for Civic Nation-building.”

8 August 2015, Kanda Universtiy of International Studies （神田外語大学）

森

学会名：日本アイルランド協会：文学・歴史合同研究会

発表テーマ：イースター蜂起とアイルランド独立

2015年10月24日，法政大学（市ヶ谷）外濠校舎S205

【研究成果物】

坂口

共著『各国史大系 イタリア1』（山川出版社，2016年刊行予定）のローマの社会的諸身分についての章を執筆。

土屋

①「帝国と「国民」の相克ーロシア自由主義者の市民的ネイション形成志向とツァーリ専制（1904－1905年）ー」
『西洋史研究』新輯44号，2015年11月，pp.123-138.

② “From Workers’ Milieu to the Public Arena: Workers’ Sociability and Obshchestvennost’ before 1906.” In Yasuhiro Matsui ed., *Obshchestvennost’ and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society*. (Palgrave Macmillan, 2015), pp.34-60.

2-3 大学院・学部・学科教育を視野に入れた日本語学・日本語教育学ならびに書学研究の融合

- 代表者 鈴木晴彦（国文学科・教授）
- 分担者 荻野綱男（国文学科・教授）
田中ゆかり（国文学科・教授）
鈴木功真（国文学科・准教授）
鮮于 媚（国文学科・助教）
金子 馨（国文学科・助手A）
林 直樹（国文学科・助手A）

【研究の目的および概要】

本共同研究は、その成果の学部・学科教育への反映を視野に入れた複数の領域の融合的研究と学部・大学院教育への反映を目指すものである。

複数の領域とは、日本語学（田中ゆかり、荻野綱男、鈴木功真、林 直樹）、日本語教育（鮮于媚）、書学（鈴木晴彦、金子 馨）の3領域である。本研究課題の構成メンバーは合計7人ということになる。

本研究では、以下の2つの柱を設け、複合的な領域の融合と学部・大学院教育への反映をめざす。

第一の柱は、現代日本語学と日本語教育の融合である。研究テーマは、現代の日本語と日本語社会の実態把握とその背景の解明である。日本語学の研究成果は、生きた日本語・日本語社会を反映するもので、日本語教育に反映されるべきものである。一方、日本語教育の立場からは、どのような日本語学的研究成果が期待されるものであるのか、という提案が可能である。双方向に理解を深め、研究・教育の両面における融合をめざす。

第二の柱は、文献日本語学と書学の融合である。研究テーマは、右筆と日本語正書法研究のための文献に関する基礎的研究である。本研究の成果は、書学ならびに日本語史の教育への還元が期待される。

本研究では、4つの下位チームを設け、複合的な領域の融合と学部・大学院教育への反映をめざした。

- ① 現代日本語学1（荻野綱男）
- ② 現代日本語学2（田中ゆかり・林 直樹）
- ③ 書学・文献日本語学（鈴木晴彦・金子 馨・鈴木功真）
- ④ 日本語教育（鮮于媚）

それぞれの成果を共有することによって、現代日本語学と日本語教育、文献日本語学と書学の融合をめざした。以下、成果報告は①～④について記すこととする。

【研究の結果】チームごとに研究成果を示す。

①現代日本語学1（荻野綱男）：本研究費によって、東北大学で行われた日本行動計量学会に参加し、さまざまな研究発表を聞き、学際的研究を進める際に必要な指針を得ようとした。分野ごとの考え方の差を超えた学際研究を行うためには、データからどのように結論を導き出すか、その共通の考え方として統計学を活用する必要性を痛感した。

②現代日本語学2（田中ゆかり・林 直樹）：本チームでは、過年度本研究費に基づく調査データを用いた『日本のことばシリーズ14 神奈川県の方言』（明治書院）を2015年9月に刊行した。現代共通語基盤方言のひとつである神奈川県方言についての概説書で、学部・大学院教育に活用できると同時に日本語教育における基礎文献にもなる。また、約一万人を対象とした全国方言意識Web調査を企画・実施し、そのデータを用いた論文の執筆ならびに投稿を行った。今年度本研究費を用いて、占領期検閲資料を網羅的に所蔵するプランゲ文庫（メリーラン

ド大学、米国メリーランド市)を訪問し、日本語・日本語学・国語教育関連資料調査を行った。その成果については、なるべく早い時期に研究ノートなどにまとめる予定である。

③書学・文献日本語学(鈴木晴彦・金子 馨・鈴木功眞):文献日本語学(鈴木功眞)・書学(鈴木晴彦・金子 馨):日本語史、及び書学の調査では書記残存資料の実見、及び平泉で発展した文化の考察のため、東北地方中部の岩手県平泉に赴き、中尊寺や毛越寺を中心とした平泉一帯に残る神社仏閣等の実地調査を行った。具体的な実地調査としては、中尊寺に伝来する「紺紙金銀字交書一切経」(中尊寺経)や「紺紙着色金光明最勝王経金字塔曼荼羅図」など、平安時代末期の書記残存資料のほか、各神社仏閣に掲げられている扁額や聯、鐘銘や石碑などを調査した。これら実地調査に付随し、展示されている残存資料や書蹟等に関して書法や日本語表記についての意見交換を行うことにより、以後の研究や教育現場へ反映させている。特に、柳之御所資料館では、遺跡で発掘された木簡などを調査することができ、当時の書記媒体を実見できたことは大変有益であった。その他、実地調査に伴って撮影・記録された写真は、研究のみならず教育現場においても有用な資料としての活用が期待される。

④日本語教育(鮮于媚):本研究費によって、日本語教育の分野では、より積極的な融合を目指し、新たな実践研究を計画した。日本語を外国語として学ぶ学習者には、コミュニケーション能力を向上させ、円滑なコミュニケーションを身につけることが最終的な目標である。そのためには、日本語に溶け込んでいる言葉、文化的背景、教養といった内容も理解しなければならない。ただ、現状では、日本語の文化や文学などを知識の一部として学習し、コミュニケーションと関連づけて学習することが難しい。これらの現状を鑑み、本研究では、日本語の文学の名作品を音読する実践研究を計画した。この実践研究は、来年度の日本語の授業で行う予定であり、日本語学習者が音読をすることで、どのような要素を学習できるのか、そして、より日本語コミュニケーション能力に結びつくための工夫をする予定である。そのため、今年度の研究費は、日本語の朗読、音読関連書籍の購入に充たした。

【研究の考察・反省】

チーム別の研究としては、末尾研究成果に示す通り、一定以上の成果が上がった。また、領域間融合という点においても、研究の結果として示した通り、書学・文献日本語学チームで有効に機能している。現代日本語学と日本語教育の融合については、4チームの研究成果を共有することによって、両者が研究と教育の両輪であることが認識され、こちらも有効に機能した。今後の課題としては、より積極的な融合を目指す方法を検討することなどを指摘することができる。

【研究発表】チーム・個人別に成果を示す。

①現代日本語学1(荻野綱男)

●特になし

②現代日本語学2(田中ゆかり・林 直樹)

(1) 田中ゆかり

●招待講演 戦後日本における「方言」の価値の変遷:Shifting Valences of Dialect in Postwar Japan 於:コロンビア大学東アジア言語文化学部403 Kent Hall(New York市)(2015年11月20日)

●招待講演 Virtual Dialects as a Window on Japanese Language and Society(「ヴァーチャル方言」からみる日本語社

会：テレビドラマを例として) Cornell University EAP Speaker Series Talk (於：374 Rockefeller Hall Asian Studies Lounge) (ITHACA市, NY州) (Feb 9, 2016年2月9日 4:45 PM-6:00PM)

(2) 田中ゆかり・林 直樹

●口頭発表 (共)「「江戸・東京WebGIS」からみた江戸・東京圏」 TOKYO TEXTSCAPE : Tadashi YANAI Initiative for Globalizing Japanese Humanities(2015年5月8-9日)カリフォルニア大学ロス・アンジェルス校 於：米国Los Angeles市 (田中ゆかり・林 直樹)

●口頭発表 (共)「1万人調査からみた最新の方言意識:「2015年全国方言意識web調査」の概要と報告」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト (基幹型) 多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明共同研究発表会 (国立国語研究所) (2016年1月24日) (林 直樹・田中ゆかり・前田忠彦)

③書学・文献日本語学 (鈴木晴彦・金子 馨・鈴木功眞):

(1) 鈴木晴彦 特になし

(2) 金子 馨 特になし

(3) 鈴木功眞

●口頭発表 (単)「倭玉篇と高橋本色葉字」古辞書研究会, 於東京学芸大学, 平成27年12月29日

●口頭発表 (単)「近世初期イロハ韻諸本の和訓に就いて」古辞書研究会, 於東京学芸大学, 平成28年3月6日

④日本語教育 (鮮于媚)

●口頭発表 (単)「非母語話者による日本語の長短音素の学習過程の構造分析ー音響的判断から音韻的判断への変容を中心にー」日本大学国文学会大会 (2015年7月4日) (於：東京, 日本大学文理学部)

●口頭発表 (共)「ラウドネス関連特徴量を用いた日本語非母語話者の促音・非促音誤聴取分析」2015年日本学国際シンポジウム並びに中国日本語教学研究会西北分会設立大会論文概要集, p. 50, (2015年5月) (於：中国, 上海) (張琰龍・鮮于媚・加藤宏明・匂坂芳典)

●口頭発表 (共)「ラウドネス関連特徴量を用いた日本語非母語話者の促音・非促音誤聴取分析ー中国語母語話者の場合-」日本音響学会2015年秋季研究発表会講演論文集, pp. 419-420, (2015年9月) (於：福島, 会津大学) (張琰龍・鮮于媚・加藤宏明・匂坂芳典)

●口頭発表 (共)「Analysis on L2 learners' perception errors between geminate and singleton of Japanese consonants using loudness related parameters」Proceedings of The 18th Oriental COCOSDA / CASLRE, pp.186-189, (2015.10) (China/ Shanhai) (Yanlong Zhang・Mee Sonu・Hiroaki Kato・Yoshinori Sagisaka)

【研究成果物】チーム・個人別に成果を示す。

①現代日本語学1 (荻野綱男)

●「等語線の引き方」日本語学会2015年春季大会予稿集, pp.129-136 (2015.5.23)

●「Automatic Isogloss Drawing」VIIIth Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics, Eastern Mediterranean University, North Cyprus (2015.9.18)

●「新刊紹介・田中ゆかり編『日本のことばシリーズ14 神奈川県のことば』」語文153輯, p.36 (2015.12.25)

②現代日本語学2 (田中ゆかり・林 直樹)

(1) 田中ゆかり

- 著書(編共著)『日本のことばシリーズ14 神奈川県のことば』(明治書院)(共著者:林 直樹・日野資純・伊川 公司) pp.001-256(田中執筆部分:第Ⅰ部pp.2-18, あとがきp.246)
- 論文「言語選択とその背景—東京中心部におけるデパートを中心に—」『日本学』40 東国大学校日本学研究所(韓国ソウル市), pp.109-128 (2015年5月)
- 論文「ミュージカル『ライオンキング』の「方言キャラ」—トリックスター「ティモン」と「ブンバア」—」『語文』152(日本大学国文学会) pp.1-14 (2015年06月)
- 論文「宝塚歌劇『外伝 ベルサイユのばら—アンドレ編—』に現れるヴァーチャル方言」『語文』153(日本大学国文学会) pp.1-24 (2015年12月)
- エッセイ「ザ・九州弁」ができるまで—『聖サルマタ伝』から『男おいどん』へ—『地域語の経済と社会—方言みやげ・グッズとその周辺—』第330回(2015年6月13日)三省堂ワールドワイズ・ウェブ<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/ytanaka/>
- エッセイ 「考える夏 「ザ・男弁」から「モテ弁」へ?」『考える人』2015年夏号53(新潮社) pp.206-207
- エッセイ 「「方言キャラ」が引き出す新たな魅力—トリックスター, 「ティモン」と「ブンバア」—」『ラ・アルプ』3月号(四季株式会社) pp.36-37
- インタビュー記事 「役割としての敬語の時代 言葉の乱れととるか, 豊かさにとるか」『ヒューマンスキル教育研究』23, pp.82-86+p93「日本語の教養を深めるオススメブックガイド」 秘書サービス接遇教育学会(2015年04月01日)
- インタビュー記事 「(リレーおびにおん) テレビの時間:10 ドラマが映す, 方言の価値 田中ゆかりさん」(2016年03月01日 朝日新聞)
- 報告書(編著)『銀座の言語景観5』(私家版)(2016年02月)

(2) 林 直樹

- 著書(共著)『日本のことばシリーズ14 神奈川県のことば』(明治書院)(共著者:田中ゆかり・日野資純・伊川 公司) pp.001-256(林執筆部分:第Ⅱ部pp.19-pp.40)
- 研究ノート「音響的特徴からみた首都圏東部域アクセントの「あいまい性」—下降幅と相対ピーク位置を指標として—」『音声研究』(日本音声学会・査読あり), (2016年4月掲載決定)
- 解説「データの視覚化(1) Excelによるグラフ作成の基本(1)」『計量国語学』, 30(1)(計量国語学会・依頼あり), pp.33-48(2015年6月)
- 解説「データの視覚化(2) Excelによるグラフ作成の基本(2)」『計量国語学』, 30(2)(計量国語学会・依頼あり), pp.104-121(2015年9月)

③書学・文献日本語学(鈴木晴彦・金子 馨・鈴木功真)

(1) 鈴木晴彦 特になし

(2) 金子 馨

- 論文(単著)『『才葉抄』の伝本について—』『語文』152輯(pp.1-30) 2015年6月25日/日本大学国文学会
- 資料紹介(共著)「日本大学文理学部所蔵小謡本目録」『語文』152輯(pp.45-58) 2015年6月25日/日本大学国文学会(共著者:辻 勝美・金子 馨)
- 論文(単著)『『筆跡抄』の伝本について—附校本—』『書学書道史研究』第25号(pp.43-56) 2015年10月30日/

書学書道史学会

- エッセイ（単著）「書式について」『文字の力・書のチカラⅢ 書の流儀』（pp.65-66） 2016年1月9日／出光美術館
- エッセイ（単著）「書論から学ぶこと よき筆，よき料紙にて」『藍筍』第170号（p14） 2016年2月10日／藍筍会
- 論文（単著）「『入木口伝抄』の伝本について一附翻刻，国立国会図書館蔵『入木口伝抄』一」『語文』154輯（pp.1-30）
2016年3月25日／日本大学国文学会
- 資料紹介（共著）「日本大学文理学部所蔵謡本目録一附小謡本目録補遺一」『語文』154輯（pp.44-59） 2016年3月25日／日本大学国文学会（共著者：辻 勝美・金子 馨）
- 報告書（共著）「徳川ミュージアム所蔵「大手鑑」収載古筆切について」『平成27年度開校・彰考館プロジェクト水戸徳川家関連史料調査・活用事業報告書』 2016年3月31日／徳川ミュージアム（共著者：名児耶明・池田和臣・金子馨）

(3) 鈴木功真

- 論文（単著）「現代仮名遣いと歴史的仮名遣い」沖森卓也他編『品詞論の周辺』（品詞別学校文法講座第7巻），1～29頁，明治書院，平成27年10月20日
- エッセイ（単著）「国語辞書を比べてみる」『国文通信』4，日本大学国文学会，平成27年12月25日

⑤日本語教育（鮮于媚）

- 特になし

2-4 日本文学および関連諸学を連携させた広域的総合研究

- 代表者 藤平 泉（国文学科 教授）
- 分担者 梶川信行（国文学科 教授）
阿部好臣（国文学科 教授）
辻 勝美（国文学科 教授）
佐藤至子（国文学科 教授）
竹下義人（国文学科 教授）
紅野謙介（国文学科 教授）
小平麻衣子（国文学科 教授）
武内佳代（国文学科 准教授）
高 榮蘭（国文学科 准教授）

【研究の目的および概要】

昨年度から引き続いて国内外の研究、特に、近隣東アジア諸国における日本文学、歴史学・社会学等近接研究分野の成果を吸収、それと連携しつつ広域的に進めてきた共同研究の成果を踏まえ、更に日本文学の新しい視点を明らかにしていく。昨年度は、上代文学において東アジア日本語教育・日本文化研究学会大会（韓国釜山）の大会において渡来系官人の歌に関する口頭発表を行い、2014年には東アジア比較文化国際会議の大会（於台湾）に参加。また近現代文学研究においては、7月11日、12日韓国ソウル大学人文科学研究院主催の国際会議「1905年ロシア革命と東アジア3国」に参加、また同7月26日国際会議「1960年～70年代、東アジアの軍事独裁と日本語の役割」にも参加した。来年度も9月19日、国際ワークショップ「エスニックマイノリティと核」を台北（科研「核・原爆と表象／文学」主催）に参加する予定である。また平安、中世、近世文学研究においては、歴史学研究や発掘調査、出版文化研究等の最新成果を元に、従来の縦割りの文学史的枠組を越える新しい日本文学研究の視点を獲得すべく研究を進める。本研究は、日本文学を文化総体として位置づけ、文学の形成される様々な環境について、従来の文学研究の領域とされてきた枠を越境し、また日本国内に留まらず諸外国研究者との研究交流を通じ、文学の内外との多様な関係性の中で、新たな日本文学研究への視点を模索することを目的としている。本研究の展開の中心軸となるのは、研究分担者それぞれが専門とする研究領域での個別的な研究を進めると共に、個別的な研究を接続させる研究上のアイディアの構築や研究領域・時代を横断する問題意識の形成をはかるため研究会、シンポジウム等を展開する。そのため国文学科の研究組織である日本大学国文学会の活動において研究集会やシンポジウム、講演会等を企画・実施し、研究を展開させる。本研究の分担者は、日本文学のすべての時代をカバーできる構成になっているので、各自の個人研究活動と連携するかたちで、研究全体としての具体的な成果を積み上げることが可能である。

【研究の結果】

近年人文研究は、大学院生の減少や、大学の学科改組など厳しい状況におかれ、衰退の危機が叫ばれている。日本文学研究も例外ではなく、研究が細分化し、蝸壺化してしまっているという批判もある。そのような状況下で周辺研究領域ともその成果を共有し、各分野が刺激し合うことはますます必要となっていくと思われる。本年度も下記の通り各分野に於いて精力的な研究成果を口頭発表、論文として発表し、地域的には広く東アジアを視野に入れての研究も進んでいる。また時代区分を越えて伝わっていく書物の問題などスケールの大きな多様な研究課題においても成果をあげている。

【研究の考察・反省】

今後共同研究の成果の発表の場を各個人の論文や発表に留まらず多様な形で公表してゆく方法を考えたい。

【研究発表】

- 梶川信行 教科書の中の万葉歌—東歌を読む—東アジア日本語教育・日本文化研究学会〈大会 於西南学院大学〉
2016年8月22日(予定)
- 紅野謙介 「1960年前後の松本清張—文学と映画のあいだ—」(松本清張研究会, 2015年6月6日, 東京学芸大学)
- 紅野謙介 「『大菩薩峠』の戦後—京大人文研と受容の軌跡—」(共同研究「戦後文化再考」プロジェクト会議, 2015年9月20日, 国際日本文化研究センター)
- 紅野謙介 「「キノコ雲」と隔たりのある眼差し—戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法—」(第49回原爆文学研究会「国際会議: 核・原爆と表象／文学—原爆文学の彼方へ—」, 2015年12月12日(土)～13日(日), 九州大学西新プラザ大会議室)
- Ko Young-ran (高榮蘭) “Hiroshima,” “Kwangju,” and the Appropriation of Memory : The Anti-Nuclear Movement and Support for Korean Democratization in the 1980s, “UCLA Trans-Pacific Symposium”, Cosponsored by TERASAKI CENTER FOR JAPANESE STUDIES, Center for Korea Studies, 5 JUNE 2015, at UCLA
- 高 榮蘭 「革命と転向—吉本隆明「転向論」と林鐘國「親日文学論」の間から—」国際シンポジウム「日本の戦後70年を問う—戦後思想の光と影—」(日仏会館フランス事務所主催, 於日仏会館, 2015年7月19日)
- 高 榮蘭 「「原爆」をめぐる想像力の枠組み—朝鮮戦争とベトナム戦争を手がかりに—」第48回原爆文学研究会「戦後70周年連続ワークショップⅧ」, (原爆文学研究会主催, 於長崎大学, 2015年8月2日)
- 高 榮蘭 「「社会主義」と「転向」をめぐる文化政治 —一九三〇年前後の「社会主義」書物をめぐる競争／狂騒をてがかりに—」(2015年度日本近代文学会秋季大会, 特集「移動と空間をめぐる想像力」, 於金沢大学, 2015年10月24日)
- Ko Young-ran, (高榮蘭) “Korean Tenkō and the Japan-Okinawa Divide: Between Yoshimoto Takaaki’s “On Tenkō” and Kim Talsu’s “The Trial of Pak Tal”, “The Work of “postwar” Workshop”, 18 December 2015, at New York University
- Takeuchi Kayo (武内佳代) “The Cared for Dog and the Caring Dog: Ethical Possibilities in Matsuura Rieko’s Kenshin (The Dog’s Body),” The Asian Studies Conference Japan (ASCJ), Meiji Gakuin University, Shirokane Campus (東京), 2015年6月21日
- 武内佳代 「現代文学のなかの〈犬〉—松浦理英子『犬身』にみるケアの倫理—」(2015年度 日本大学国文学会, 日本大学文理学部(東京), 2015年7月4日)
- 武内佳代 「三島由紀夫と女性誌」(三島由紀夫国際シンポジウム, 東京大学駒場キャンパス(東京), 2015年11月15日)

【編著作】

- 紅野謙介 編著『文学の再生へ 野間宏から現代を読む』富岡幸一郎との共編, 2015年11月, 藤原書店
- 辻 勝美 『日本大学文理学部所蔵「兼好法師行状」』, pp1-73, 2016年3月 文成印刷
- 佐藤至子 『円朝全集 第十三巻』(校注) 2015年6月 岩波書店
- 佐藤至子 服部 仁と共著。『児雷也豪傑譚』(編・校訂・解題) 2015年7月 国書刊行会

【論文】

- 梶川信行 『万葉集』の持統朝—その歴史認識をめぐって—『語文』(日本大学) 152 輯 2015 年 6 月
万葉歌は抒情詩か—高等学校「国語総合」の『万葉集』—(『国語と国文学』(東京大学国語国文学会) 92 巻 11 号 2015 年 11 月)
- 阿部好臣 「く牛頭梅檀」と薫—彼方の仏の世界を模索する」(『物語研究』第 16 号, 2016 年 3 月) 刊行予定
- 小平麻衣子 「林芙美子「放浪記」のカチューシャ」『語文』(日本大学) 153 輯, 2015 年 12 月, pp18-24
- 小平麻衣子 「『若草』における同人誌の交通—第八巻読者投稿詩について」『語文』(日本大学) 152 輯, 2015 年 6 月, pp59-69
- 小平麻衣子 「生き延びる『放浪記』—改造社版と新潮社版の校異を読み直す」『藝文研究』No.109-1, 2015 年 12 月, pp131-147
- 小平麻衣子 「文学の教養化と作家の効用—国文学・鑑賞主義論争にふれて」『作家／作者とは何か—テキスト・教室・サブカルチャー』和泉書院, 2015 年 11 月, pp97-112
- 高 榮蘭 「「原爆」をめぐる想像力の枠組み—ベトナム戦争と「アジア」言説を手がかりに」, 原爆文学研究会『原爆文学研究』14 号, 2015 年 12 月, pp.264-282

【資料紹介】

- 辻 勝美 「日本大学文理学部所蔵小謡本目録」, 『語文』(日本大学) 152 輯, pp45-58, 2015 年 6 月, 金子馨と共著。
- 辻 勝美 「日本大学文理学部所蔵謡本目録—附小謡本目録補遺—」『語文』(日本大学) 154 輯, pp44-59, 2016 年 3 月 25 日, 金子馨と共著。

【書評その他】

- 阿部好臣 「源氏物語端役列伝」六八～七八『相模原「源氏」の会ニュース』2015・4～2016・2
- 紅野謙介 「概観 日本文学研究(近代)」日本文藝家協会編『文芸年鑑 2015』所収, 新潮社, 2015 年 6 月
- 紅野謙介 「書評 黒川創著『鷗外と漱石のあいだで 日本語の文学の生まれる場所』」『週刊読書人』2015 年 9 月 18 日号
- 梶川信行 万葉歌を読む 21・教科書の中の万葉歌——東歌を読む——『語文』(日本大学) 153 輯 2015 年 12 月
- 梶川信行 万葉歌を読む 22・教科書の中の万葉歌——志貴皇子の歌を読む——『語文』(日本大学) 154 輯 2016 年 3 月
- 佐藤至子 「「和本リテラシーニュース」のこと」『日本古書通信』第 1036 号 2015 年 11 月
- 佐藤至子 「解題」『日本文学全集 好色一代男／雨月物語／通言総籙／春色梅児誉美』2015 年 12 月 河出書房新社
- 武内佳代 「ジェンダー」『21 世紀の三島由紀夫』(翰林書房, 2015 年 11 月)
- 武内佳代 「書評 井原あや著『くスカンダラスな女』を欲望する—文学・女性週刊誌・ジェンダー—」『昭和文学研究』第 72 集, 2016 年 3 月

2-5 時代の要請に応えた中国学の発信に向けて

- 代表者 青木 隆（中国語中国文化学科・教授）
- 分担者 大川謙作（中国語中国文化学科・准教授）
小浜正子（中国語中国文化学科・教授）
田口一郎（中国語中国文化学科・教授）
舘野正美（中国語中国文化学科・教授）
張 麗群（中国語中国文化学科・教授）
平井和之（中国語中国文化学科・教授）
三澤真美恵（中国語中国文化学科・教授）
山口 守（中国語中国文化学科・教授）

【研究の目的および概要】

日本では古くからの漢学の伝統があり、極めて高い水準の研究成果が蓄積されてきた漢学大国である。さらに、近代以降、伝統的漢学にあきたらず、人文諸科学のさまざまな領域から新しい角度からの研究が盛んに行われている。本学科は、そのような日本の中国学研究の第一線の専門家を擁する中国学の研究センターの一つである。

非西洋世界の西洋化が推し進められた19世紀後半以降、中国の知的資源は、日本社会の知的ニーズの主たる対象でなくなったかのようであった。しかし、21世紀の現在、近年の顕著な経済的発展に裏打ちされた中国の国際的プレゼンスの増大により、長い歴史にわたる中国の知的遺産を、内外にわかりやすい形で伝えることがかつてないほど緊急の世界的課題になっている。いうまでもなく、こうした課題を担うことのできる中国学の専門家集団は、本学科においてほかにない。本共同研究は、そのような中国学のそれぞれの領域で研究を深化させ、その成果を内外に発信する方法を探ることを目的とするものである。

【研究の結果】

本学科の各スタッフが、個人の専門領域に即した中国研究を推進し、以下のような成果を得た。具体的には、青木が中国伝統思想としての中国ムスリム思想に関する研究を、大川が現代チベットにおける社会と文化の諸問題を、小浜が都市社会論的・ジェンダー論的な観点から見た中国近現代史を、田口が東アジア全域をカバーするメディアとしての「古文」にかんする研究を、舘野が中国医学を受け継ぎつつ独自の発展を見せた江戸時代の漢方医学を支えた医学理論にかんする研究を、三澤が台湾映画史に即してジェンダー論的・メディア論的な観点から見た台湾現代文化にかんする研究を、山口が中国語圏全体を俯瞰しつつ近現代の中国語圏文学の可能性とその現状にかんする研究をそれぞれ担当し、研究成果を発表した。

【研究の考察・反省】

本学科は従来より、中国内地の漢族を主たる対象とするにとどまらず、周辺部の少数民族や国外の華人をも対象とし、土着的な視点及びグローバルな視点を兼ね備えた幅広い中国文化研究を目指してきた。今年度は、大川准教授の着任により、人類学的手法を中心にした現代チベット文化史研究が行なわれるようになり、本学科のかねてからの研究の方向性を着実に発展させることができたと評価しうる。また、本学科で推進されている研究の内容を内外にわかりやすい形で発信するという点においても、日本語だけでなく、中国語・英語による研究成果の発信が行なわれ、また専門家向けの研究論文の発表に自足せず、一般向け啓蒙書の編集や監訳が行われているなど、本学科の目指すべき研究内容の発信あり方としてじゅうぶん満足できるものであったと言いうる。なお、従来より指摘のあった、中国古典文化にかんする研究発表が中国現代分野を対象とするものに比べて手薄な状況は依然として変

わっていないが、古典研究は非常に長時間の研究時間を要請される分野であり、今後の刮目すべき成果の発表を期待したい。

【研究発表】

- 青木 隆 「劉智『天方性理』における『四書』・『四書集注』の特色」, 回儒の著作研究会, 2016年3月22日／日本大学文理学部 青木研究室。
- 大川謙作 The 4th Seminar of the International Seminar of Young Tibetologists, OKAWA Kensaku, “A Study of Nangzan: On the Reality of Servant Worker in Traditional Tibetan Society”, 2015/9/8, University of Leipzig, Germany
- 大川謙作 日本チベット学会, 大川謙作「現代チベット研究と代替民族誌の問題」2015/11/14, 四天王寺大学
- 大川謙作 歴史学会, 大川謙作「包摂と排除の政治学」, 2015/12/6, 明治大学
- 小浜正子 “Birth Planning and Transformation of Rural Families in China”, Panel: Migration of Women between Urban and Rural Areas in Asia and the Trans-formation of Patriarchy, The Third Congress of the Asian Association of World Historians(AAWH2015), Nanyang Technological University, Singapore, 31st May, 2015.
- 田口一郎 『列朝詩集小伝』研究会発表, 丁集上「羅贊善洪先」, 平成27年8月29・30日／京都北文化会館
- 三澤真美恵 日本台湾学会 第17回学術大会第13分科会「「戦後」台湾における国民党政権の映像資料の可能性—統治・宣伝・正統性」における発表:「1950年代前半台湾の映画館における「国歌斉唱」プログラムの確立」2015年5月23日(土)／東北大学川内北キャンパス
- 三澤真美恵 International workshop: Nation, Gender, and Genres: Literature and Film from Taiwan and Korea, 1930s ~ 1960s, “Sinicizing Taiwanese through Singing: Ritual Program of the ROC’s National Anthem Film,” August 7, 2015 /Run Run Shaw Tower, Room 730, Hong Kong University.
- 山口 守 交差する眼差し: 巴金と芹沢光治朗, 「巴金展記念シンポジウム」, 2015年9月5日, 於慶應義塾大学文学部
- 山口 守 「北京時期: 痛苦的/張我軍/的痛苦」, 在地與易地——第十一屆東亞學者現代中文文學國際學術研討會, 2015年11月13日, 於(台灣)國立政治大學台灣文學研究所
- 山口 守 「超越本質主義: 漢語文學/華語語系文學如何可能」, 當代漢語文學概念與思潮國際學術研討會, 2015年11月20日, 於立教大學
- 山口 守 「超越作为范例的中国文学概念: 以华语语系文学与汉语文学为视角」, “东方学”学科建构与中日韩印阿文学之关联学术研讨会—暨中国东方文学研究会第十五届年会, 2015年11月29日, 於(中国), 广东外语外贸大学

【研究成果物】

- 大川謙作 「トンドゥブジャとインド的伝統: チベット現代文学の誕生をめぐって」『中国21』vol.43, 2015/8/20, 愛知大学
- 大川謙作 「チベット農奴解放言説の成立: 1950年代における解放と改革の語りから」澤井充生・奈良雅史編『周縁を生きる少数民族: 現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』2015/7/20, 勉誠出版
- 小浜正子 「現代中国の家族の変容—少子化と母系ネットワークの顕現」, 小浜正子編『ジェンダーの中国史』(アジア遊学191) 勉誠出版, 2015年11月, 43~53頁。
- 小浜正子 「歴史教育のジェンダー主流化へ向けて—日本学術会議ジェンダー史分科会などの取組から」, 大阪大学

- 歴史教育研究会・公益財団法人史学会編『史学会125周年リレーシンポジウム1 教育が開く新しい歴史学』山川出版社, 2015年11月, 86～103頁。
- 小浜正子・L.グローブ監訳, スーザン・マン著, 秋山洋子・板橋暁子・大橋史恵訳『性からよむ中国史—男女隔離・纏足・同性愛』平凡社, 2015年, 全316頁。
- 舘野正美 『『恵美寧固先生医方略説』攷—医学思想の観点から—』日本大学人文科学研究所 研究紀要 91号平成28年3月 掲載予定
- 舘野正美 「田中必大『医事談』における吐方—江戸時代吐方の研究—」中国語中国文化 13号 平成28年 3月 掲載予定
- 平井和之 「中国語教育学会の国際交流と国際発信」WINPEC Working Paper Series No. J1502, 2015年6月, 早稲田大学現代政治経済研究所
- 平井和之 「日本及び世界における中国語教育と中国語教育学会について」早稲田大学現代政治経済研究所研究叢書43『日本発多言語国際情報発信の現状と課題 ヒューマンリソースとグローバルコミュニケーションのゆくえ』pp.81-96 2016年3月10日
- 山口 守 「中国文学の本質主義を超えて—漢語文学・華語系文学の可能性」『中国—社会と文化』第30号, 中国社会文化学会, 2015年7月, pp.18—44
- 山口 守 「主體—母語—寫作：超越本質主義」利格拉樂・阿烏『祖靈遺忘的孩子』序二, 台北：前衛出版社, 2015年12月, pp.15-21
- 山口 守 「白先勇小説中の現代主義：《台北人》的記憶與鄉愁」白睿文/蔡建鑫主編『重返現代』, 2016年1月, pp.365-382

2-6 英語英文学の包括的研究（その5）(Comprehensive Study of the English Language and Literature (5))

- 代表者 保坂道雄（英文学科・教授）
- 分担者 飯田啓治郎（英文学科・准教授）
堀切大史（英文学科・准教授）

【研究の目的および概要】

人文学部に存在した伝統的な「英文学科」の多くが、地域研究や文化研究をカリキュラムの中心に据え、改革を行っている。また、高校生一般が「英文学科」に対する期待像も変貌してきている。それに対し、本学の英文学科では、従前の名称を継承しつつ、カリキュラムについては小規模な改変を中心に行ってきた。

このような社会の変容に対し、文理学部英文学科が掲げる英語の3つの学問領域、即ち、英語学、英文学、米文学の3領域を中心とした研究方針の妥当性を検討し、そのカリキュラムに適した英語技能、知識、教授法について検証することを研究の目的とする。また、教員養成機関としての適切なカリキュラムのあり方も検討する。

【研究の結果】

「英文学分野」

平成27年度には、劇や詩が多産なエリザベス朝時代と、小説が全盛のヴィクトリア朝から19世紀および20世紀に至る時代の作家たちの作品研究が行われた。

エリザベス朝時代については、William Shakespeareの喜劇*A Midsummer Night's Dream*に、20世紀の精神分析学者Sigmund Freudの夢理論に通じる言説が認められることを指摘した論文と、Shakespeareの史劇*Richard III*を“the intended audience / the true hero”という視点から考察した論文が共著の中で発表された。また、John Miltonの翻訳詩篇およびラテン語作品の研究と、それらが『楽園の喪失』に与えた影響の究明がなされた。また、Miltonの詩作における“form”や“shape”といった、Aristotleの四原因説を想起させる語の選択・用法について、とりわけ『論理学』におけるAristotleの作品への言及箇所の洗い出しとデータ化が行われ、Miltonの思想的立場が継続的に研究されている。

ヴィクトリア朝時代では、女性ジャーナリストEliza Meteyardが書いた売春問題および労働者の教育についての記事を中心に資料が収集され、分析が行われた。彼女が議会議事録を詳細に読み、関係者から内部情報を聞き込み、それをもとに雑誌・新聞記事を書くと同時に、Shakespeare作品などの枠組みを用いて風刺的な短編を発表していたことが明らかになった。19世紀では、Joseph Conradの処女作*Almayer's Folly*の研究がなされ、主人公Almayerと彼の娘Ninaの関係に関して、娘に対する父親の近親相姦的な愛情が見出された。20世紀では、1930年代のSomerset Maughamの作品の映像化に関する研究が行われた。彼の短編“Rain”を1932年版と1953年版の映画2作品との比較を交えた考察の結果、ある程度原作に忠実な1932年版に対して、1953年版では原作で重要な意味を持つ“Rain”の描写が不十分で、主人公の改心の場面も大幅に削られているものの、原作と1932年版にはない脚色として登場人物間の権利を巡る争いの構図がみられることが指摘された。

「米文学分野」

本年度の米文学研究は、まず、19世紀アメリカ作家ナサニエル・ホーソーン作品の研究として、論文「ロマンスの磁場、奇跡、子ども―「雪人形」と『秘密の花園』の生命の庭」が論文集『ホーソーンの文学的遺産』に掲載された。また、英語圏文学の研究として、研究書*English Studies Beyond the 'Center': Teaching Literature and the Future of Global English*の刊行、論文“Reconfiguring English Literary Studies in the Japanese Academy”掲載の論文集*The Future of English in Asia: Perspectives on Language and Literature*の刊行、論文“Putting Anglophone Literature to Work, and

Why This Might Be a Good Thing: Reconfiguring English Studies in a Globalized World”掲載の論文集*Deterritorializing Practices in Literary Studies: Contours of Transdisciplinarity*の刊行がそれぞれなされた。これらの研究において、日本およびアジアの大学における英語圏文学研究の意義および教授法が示されている。以上の研究は何れも独創的な研究であり、実際の授業における効果が大いに期待される。

「英語学分野」

本年度の英語学研究は、コーパス研究、統語変化研究等の分野において、顕著な成果を見た。まず、コーパス研究の分野であるが、特に近代英語期の3種類の構文解析コーパス（ARCHER, PPCMBE, CLMET）の比較考察を行い、高頻度語や品詞別頻度においてPPCMBEは、他の2者と異なり、生起率に大きな差がみられることが明らかとなった。この差異は、PPCMBEのテキスト数の少なさが要因とみられることを推定した。一方、CLMETは時期によりジャンル間に偏りがあることが明らかとなった。また、CLMET内で完了相と共起する助動詞について、先行研究とは異なり、口語的要素の高いdramaやLettersでhaveとの共起率が低いという予想とは反対の状況が明らかとなった。なお、本研究の成果は、「近代英語コーパスの代表性の検討—3コーパスの比較検討」のタイトルのもと、2015年10月に愛知大学で開催された英語コーパス学会第41回大会にて発表された。

次に、統語変化研究の分野であるが、動的言語モデル仮説に基づき、英語に特徴的な冠詞、虚辞、助動詞、進行形、完了形等の創発現象を分析、その妥当性を検証した。何れの統語変化も、文法化のメカニズムが背後に存在し、その理論的説明として、上記の仮説に基づく議論を行った。特に、機能投射構造の創発を基軸に、「英語にはなぜ義務的主語が必要であるか」等の根本的な問に対し、従来のパラメータによる説明ではなく、Computational efficiencyとCommunicative efficiencyの相克による複雑適応的現象として説明できることを論じた。なお、本研究の成果は、2015年11月に関西外国語大学で開催された日本英語学会第33回大会にて発表され、2015年3月にJELS 33号に掲載された。

また、文学研究科英文学専攻の大学院特別講義を学部学生に開放し、次の特別講義について最新の知見を得る機会を設けた。

- ・「英語の時制形式の多義性に関する分析」和田尚明（筑波大学准教授）
- ・「『リア王』の時代背景」川井万里子（東京経済大学名誉教授）
- ・「『ピーターラビットのおはなし』の作者ビアトリクス・ポターと日本」川野芳英（大東文化大学教授）
- ・「エマソンを読む—the infinitude of the private manの革新性について」成田雅彦（専修大学教授）

さらに、日本大学英文学会との共催事業として、平石貴樹（東京大学名誉教授）先生による「早わかりフォーナー」との演題での特別講演会を行った。

【研究の考察・反省】

上記のように、本年度も多くの研究成果をあげていることは確かであるが、今後は、こうした研究成果を各種専門科目の中に如何に組み入れて、魅力ある授業を展開できるかについて更なる考察が必要である。そうした研究の出発点として、本年度、本学科のマイルズ・チルトン教授が、海外の出版社であるRoutledgeから出版した単著*English Studies Beyond the 'Center': Teaching Literature and the Future of Global English*は、貴重な成果となる。日本における英米文学教育についての提言であり、世界的にも注目されている。今後はこうした研究と教育をつなぐ活動を活発化させる必要がある。なお、平成28年度より、新カリキュラムが施行されることとなり、特に、1・2年次におけるネイティブ教員による副担任制の導入、及び3・4年次におけるゼミ制度の導入に期待がかかる。今後も、

学科の総力をあげて充実したカリキュラム実現に向け、努力を続ける必要がある。

【研究発表】

- 一條祐哉 (2015) 「空間的拡張と指向を表す命題の事象性」(日本大学英文学会 2015 年度学術研究発表会, 日本大学文理学部)
- 佐藤健児 (2015) 「条件文の帰結節における be going to の生起条件と意味機能をめぐって」(英語語法文法学会第 23 回大会, 龍谷大学)
- 佐藤健児 (2015) 「条件文の帰結節における be going to の語法」(2015 年度日本大学英文学会 10 月英語学シンポジウム「Be going to をめぐって—英語史・語法・言語獲得の観点から—」, 日本大学文理学部)
- 佐藤健児 (2015) 「条件文の帰結節における be going to に関する意味論的・語用論的研究」(平成 27 年度国際モダリティワークショップ—モダリティに関する意味論的・語用論的研究—, 関西外国語大学)
- 隅田朗彦 (2015) 「英作文学習過程における焦点化したフィードバックの効果」(全国英語教育学会, 熊本)
- Chilton, Myles (2015) “Global English: Disciplining the Discipline.” Featured Speaker, LibrAsia 2015 – The Asian Conference on Literature and Librarianship. Osaka.
- Chilton, Myles (2015) “English Power.” Featured Speaker, ACE 2015 – The Asian Conference on Education. Kobe.
- Chilton, Myles (2015) “Reading and Writing, Reading as Writing.” Nihon University English Literature Society.
- Chilton, Myles (2016) “The Center and Beyond: The Expansion of the Global English Department.” Roundtable discussion. Modern Language Association 2016 Convention. Austin, TX, USA.
- 塚本 聡 (2015) 「近代英語コーパスの代表性—3 コーパスの比較検討」(英語コーパス学会第 41 回大会)
- 塚本 聡 (2015) 「英語研究におけるコーパス利用について」(日本ドイツ語情報処理学会)
- 野呂有子 (2015) 「From Paraphrasing ‘Psalm 114’ to Composing Paradise Lost」(11th International Milton Symposium, Exeter University)
- 野呂有子 (2015) 「詩篇翻訳から『偶像破壊者』へ—「出エジプト」の主題を一つの観点として—」(日本ミルトン協会第 6 回大会, 龍谷大学)
- 保坂道雄 (2015) 「文法化とことばの進化」(駒場英語史研究会, 東京大学)
- 保坂道雄 (2015) 「文法化と言語進化」(東北大学言語変化・進化研究ユニット 第 2 回ワークショップ, 東北大学)
- 保坂道雄 (2015) 「パラメータ再考」(日本英語学会第 33 回大会, 関西外国語大学)
- 保坂道雄 (2016) 「文法化と機能投射構造の創発」(北海道大学言語セミナー, 北海道大学)
- 前島洋平 (2015) 「原作と映画の溝—「雨」の場合」(日本モーム協会第 12 回春季講演会, 東洋大学白山キャンパス)

【研究成果物】

- 飯田啓治朗 (2016) 「A *Midsummer Night's Dream* における夢の諸相と Freud の夢理論の一考察」『英米文学の精神分析的考察』第 3 巻
- 佐藤健児 (2015) 「『自然の成り行き』を表す will be -ing 構文をめぐって—テンス, アスペクト, モダリティの観点から—」『モダリティの意味論的・語用論的研究 1 科学研究費による国際モダリティワークショップ発表論文集』
- 隅田朗彦 (2015) 「英語習熟度テストにみられる大学 1 年生の英語力の推移」『文理学部研究紀要』第 90 号
- 隅田朗彦 (2015) 「Graphic Organizer による語彙学習: 関与負荷仮説の検証と考察」『文京学院大学総合研究所紀要』第 15 号
- 高橋利明 (2016) 「ロマンスの磁場, 奇跡, 子ども—「雪人形」と『秘密の花園』の生命の庭」『ホーソーンの文学的

遺産』開文社

- Chilton, Myles (2015) *English Studies Beyond the 'Center': Teaching Literature and the Future of Global English*, Routledge.
- Chilton, Myles (2015) "Reconfiguring English Literary Studies in the Japanese Academy." *The Future of English in Asia: Perspectives on Language and Literature*, Routledge.
- Chilton, Myles (2015) "Putting Anglophone Literature to Work, and Why This Might Be a Good Thing: Reconfiguring English Studies in a Globalized World." *Deterritorializing Practices in Literary Studies: Contours of Transdisciplinarity*.
- Chilton, Myles (2015) "Global English: Disciplining the Discipline." *IAFOR Keynote Series*.
- 保坂道雄 (2016) "Two Aspects of Syntactic Evolution" *Advances in Biolinguistics*, Routledge 出版
- 保坂道雄 (2016) 「パラメータ再考：Broad Syntaxの視点から見た言語の共時的・通時的多様性」*JELS* 33
- 野呂有子 (2015) 『詩篇翻訳から「楽園の喪失」へー出エジプトの主題を中心として』富山房インターナショナル
- 野呂有子編 (2015) 『For the Better and Effective Writing of an English Essay—英語論文出版の手引き』金星堂
- 野呂有子 (2016) 「*Richard III*における the true hero / the intended audience」『英米文学の精神分析学的考察』第3巻
- 吉良文孝 (2015) 「条件節における認識的Willの意味機能について」(『モダリティの意味論的・語用論的研究』Vol. 1)
- 吉良文孝 (2015) 条件文帰結節における be going to の意味機能について」(『モダリティの意味論的・語用論的研究』Vol. 1)
- 吉良文孝 (2015) 「Two kinds of 'Possibility' — Can and May」(『モダリティの意味論的・語用論的研究』Vol. 2)
- 吉良文孝 (2015) 「Couldと実現性の含意」『モダリティの意味論的・語用論的研究』Vol. 2)
- 吉良文孝 (2015) 「モダリティと単純現在時制の意味論」『モダリティの意味論的・語用論的研究』Vol. 3)
- 吉良文孝 (2015) 「発話の瞬間同時性と否定, 疑問化, 条件化」『モダリティの意味論的・語用論的研究』Vol. 3)

2-7 近現代ドイツ語圏における文化・語学研究

- 代表者 保阪靖人（ドイツ文学科・教授）
- 分担者 米井 巖（ドイツ文学科・教授）
大羅志保子（ドイツ文学科・教授）
安達信明（ドイツ文学科・教授）
森田 悟（ドイツ文学科・教授）
初見 基（ドイツ文学科・教授）
関口なほ子（ドイツ文学科・准教授）
浜野明大（ドイツ文学科・准教授）
勅使川原聖子（ドイツ文学科・助手A）

【研究の目的および概要】

ドイツ語圏文化は、ドイツ・オーストリア・スイスなどにおいて使用されるドイツ語を介して、それぞれの地域の音楽、文学、思想をはじめとした分野において個性的な担い手を輩出してきた。近代化に乗り遅れた後進国性や、大戦後の経済復興などは日本と共通する点であると捉えることができる。東西ドイツの分裂、さらに再統一と言った政治的・社会的な激動を伴っているドイツ文化は、現在でも刺激的なものである。本共同研究は、文学・語学のエキスパートが、それぞれの専門分野における最新研究を持ち寄る形で行う。互いの研究分野を照らし合わせることによって、各研究者が自己の研究領域において明示的に提示可能なもの、そうではないものを明らかにしていくことを目指す。文化はまたことばの反映でもある。言語研究を進めることによって、文化との相対関係をも捉えようとするものである。言語・文化・文学の諸領域において、ドイツの近現代文化が形成されていった過程をわれわれ日本から見ることこの研究において重要な視点であると考えらる。

本共同研究が目指すドイツ語圏の文化・語学研究の対象を「近現代」としているが、それはドイツ語圏文化の現在の状況を理解するには「近現代」の歴史的・社会的・文化的事象が重要な役割を果たしているからであるが、近代文学の基盤となっているのは、中世の騎士文化から市民階級の文化への移行であり、そのことについての検証は浜野が担う。保阪は全体の総括をするとともに、歴史的なドイツ語の変化と理論的な分析を進める。安達も類型論の立場から、ドイツ語の分析を行う。大羅は、文学研究、中でも女性文学研究を進め、米井はドイツ語が日本においてどのように教えられてきたかという文化受容の観点からの研究を行う。初見は戦後ドイツの文学・文化研究を行う。森田は19世紀ドイツ文学研究を担当し、関口はドイツ系ユダヤ人女性文学の研究を進める。勅使川原は戦後ドイツ文学の研究を特に語りの手法という観点から進める。

【研究の結果】

それぞれの研究者の専門分野に応じて、言語学的アプローチでは、米井・安達・保阪が研究を進めた。米井は日本におけるドイツ語教授法の変遷を、明治以降の英語教育との比較で研究を行った。明治以降の外国語教育一般に共通している実用面の重視が英語では一貫して継続されたのに対して、ドイツ語は明治期末より大正期にかけて「思想・教養」の言語としての需要が学習者側からも要請されるようになり、その傾向が1960年代始めに至るまで継承されたことが明確となり、現在も一般の意識の中にドイツ語の「くび木」としてあることを明らかにした。安達は、各種文献調査・収集の他、日本言語学会第151回大会（11月、名古屋大学）、日本独文学会2015年春期発表会（6月、武蔵大学）、同じく秋期発表会（10月、鹿児島大学）、日本ケルト学会第35回研究大会（10月、慶応大学）等の主に言語関係の発表やセッションに参加し、類型論の方法論的親和性や可能性について考察した。保阪はドイツ語独自の仕組みとも言える非能格動詞の非対格化について英語、オランダ語、さらにイタリア語との比較で明らかにし

ており、さらに非能格動詞の種類によっても非対格化の傾向が異なることを検証中である。

文化・芸術学的アプローチでは、大羅・森田・初見・関口・浜野・勅使川原が研究を進めた。大羅は1949年にハイデッガー実存哲学の批判的受容について書かれたバッハマンの哲学博士論文と50年代に発表された文学作品、特にラジオドラマとの比較検討を中心として研究を進めた。バッハマン文学は、哲学的考察を経て得られた抽象的思考内容を、あくまでも文学的な形象や語りの構造によって表現しようとする言語芸術の探究と試作の過程であることを確認している。またバッハマンの博士論文は、ハイデッガー流の哲学的な言説からの決別宣言であり、言語芸術の認識論的な可能性への信仰告白でもある。また「暴力」の捉え方については、既に平成26年度の実績報告でフーコーの権力や近代道德の系譜学的な把握との類似点を指摘したが、系譜形成システムの推進力として、ニーチェの「支配的本能」や「ルサンチマン」、フーコーの「知への意志」にあたるものが、バッハマンにおいては、「越境（人間に定められた境界・領界を超えること）」である事を明らかにしている。森田は、E.T.A. ホフマンと彼の裁判担当事件について、その時代との関連を考察している。裁判官としての判断はナポレオン後のヨーロッパの復古体制と密接に関連していることを明らかにしている。初見は、戦後ドイツにおける〈戦争の罪〉の意識のありようをめぐって、カール・ヤスパースの『罪の問題』（1946年）を検討し、そこで触れられてはいたもののとりたてて問題化されていなかった〈直接犯罪に関与しなかった者における責任の有無〉という観点が、1986年の歴史家論争、そしてその後の〈記憶論的転回〉と称しうる事態において中心課題となってゆくことを論文で跡づけた。また、ヨーロッパにおける〈第二次世界大戦後〉を検討する際に、同時に〈第一次世界大戦後〉をも視野に入れ両者を対比的に見てゆく必要性が生じたため、それへの準備作業として、〈世紀末〉から20世紀初頭にかけての文化変動を〈都市の出現〉という相から、その代表的な例であるベルリンを対象として考察した（論文1）。これは、〈第一次世界大戦後〉と〈第二次世界大戦後〉の文化状況における断続と継続あるいは反復とが念頭に置かれた研究である。関口は主に30年代ドイツにおいて評価された女性作家イナ・ザイデル等の作品を考察し、〈母性〉や〈女性性〉についての言説から、「伝統的」に期待された女の役割としての生殖と子の養育、家父長制社会における〈父性〉と〈娘〉の心理的軋轢を中心に考察をすすめる。その過程において、女の「性」の解放と「中絶」の是非にかかわる倫理、政治権力の属性である「暴力」とそれを行使する人間の「自己肯定」と「他者との相互承認」の「不」可能性が、キリスト教的価値観といかに連動するのかを明らかにした。浜野は日本大学文理学部海外派遣研究員として一ヶ月ドイツ連邦共和国に滞在し、ミュンヘン大学エルンスト・ヘルガルト元教授、アーヘン工科大学シルビア・シュミッツ教授、上智大学菅野カーリン名誉教授たちから貴重なアドバイスを頂き、研究のパスpekティブを広げることができた。文献の蒐集もさらに充実した内容となり、昨年度取り組んだ内容とは違った研究を展開し、その文献精読も進めた。

【研究の考察・反省】

各人の研究が多岐にわたっているために、それを収斂させて、総合的な評価をするところまでは至っていない。また個別研究と普遍性にかかわる研究という二つの側面を同時に配慮していかざるを得ない。しかしながら、この共同研究によって、ドイツ語ならびにドイツ文学、ドイツ文化の多くの点が明らかにされてきたと考える。また本研究では中世研究から現代研究までが扱われており、その広さは今後も維持していくべきであるとする。

【研究発表】

Shihoko ORA: Fragmente des Mythos und der Aufklärung —Christoph Ransmays Roman „Die Schrecken des Eises und der Finsternis“ als Nekrolog auf die Gescheiterten *平成27年（2015）10月31日／長野県・野沢温泉第24回オーストリア現代文学ゼミナール 平成27年（2015）10月31日

浜野明大: Eine neue Edition der ›frühmittelhochdeutschen Genesis‹ Ein Werkstattbericht Prof. Dr. Elke Brüggem und

Claudia Wich-Reif: „Originale und Editionen. Lesehilfen für (Vor-) Leser-in/ Texten des 11. bis 15. Jahrhunderts.“
(Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn) 2015年6月

【研究成果物】

Shihoko ORA: Fragmente des Mythos und der Aufklärung —Christoph Ransmays Roman „Die Schrecken des Eises und der Finsternis“ als Nekrolog auf die Gescheiterten 『ドイツ文学論集』第37号, 2016年.

安達信明: (論文)「鳥たち —不当に忘れられた作品—」, 『ドイツ文学論集』第37号, pp.17-46 (2016), 2016年.

初見 基: (書評)『初期ルカーチ政治思想の形成』(西永亮著), 『社会思想史研究』第39巻 (2015年9月30日, 藤原書店) 299-303頁.

初見 基: (書評)「文学者の〈思想〉とその困難—速水淑子『トーマス・マンの政治思想』—」, 『季刊創文』第20号 (2016年1月1日, 創文社) 10-12

初見 基: (書評)『翼ある夜 ツェランとキーファー』(関口裕昭著), 「週刊読書人」第3126号 (2016年2月5日) 第5面.

初見 基: (論文)「ベルリンの〈近代〉」, 『西洋近代の都市と芸術5 ベルリン 砂上のメトロポール』(2015年6月1日, 竹林舎) 92-118頁

初見 基: 論文)「〈連帯〉の変容—戦後ドイツ政治文化の一断面—」, 『ドイツ文学論集』第37号, 47-66頁, 2016年.

保阪靖人: (論文)「ドイツ語における非対格動詞の非対格化」, 『より良き代案を絶えず求めて』(開拓社), 170-178, 2015年.

関口なほ子: (論文)「母性のゆくえ—イナ・ザイデルとイルゼ・ラングナーを例として」(執筆中)

浜野明大: 古ドイツ語コーパスの方法論研究 —古ドイツ語コーパスを使用した実践研究の一例としての「愛」を表す語の通時的発展考察日本大学文理学部人文科学研究所「研究紀要」第91号, 117-159頁

Hamano, Akihiro: (論文) Der Gralsheld Galaad als Erlöser? – Die unüberwindliche menschliche Beschränktheit des religiös-idealen Heldenbildes im Prosa-Lancelot Euphorien, *Zeitschrift für Literaturgeschichte*, hg. v. Wolfgang Adam, Bd. 108/Heft 3, 259-277, 2014年

Hamano, Akihiro: (著書) frühmittelhochdeutsche Genesis Synoptische Ausgabe nach der Wiener, Millstätter und Vorauer Handschrift Hermaea Neue Folge 138, De Gruyter, Berlin/ New York 2016.

2-8 現代社会における問題的地位的分析に資する社会学的研究V—「格差・不平等」をめぐる諸側面—

- 代表者 中瀬剛丸（社会学科・教授）
- 分担者 後藤範章（社会学科・教授）
菅野 剛（社会学科・教授）
立道信吾（社会学科・教授）
松岡雅裕（社会学科・教授）
好井裕明（社会学科・教授）
松橋達矢（社会学科・准教授）

【研究の目的および概要】

本共同研究では、前年度に引き続き、今日的課題として人々の耳目を集めている「格差・不平等」の問題に焦点を当て、1) 理論・学説、2) 文化・情報メディア、3) 実証・応用という多様な領域と関心に基づき、「格差と社会的不平等」をめぐる社会学的諸側面の様相を明らかにすると同時に、その構造的要因について考察を深めていくことを目的としている。

「格差」をめぐる問題については、2000年代半ばに流行語となった「格差社会」という言葉の出現を待つまでもなく、経済学の分野では「経済格差」（橋本 1998）や「所得格差」（大竹 2005）など所得や資産の再分配をめぐる研究が、また教育学においては「教育における意欲の格差」（荻谷 2001）など地位達成研究が、それぞれの視点から「格差」の存在を明らかにしてきた。

社会学においても、社会的な不平等という観点からこうした状況を問題化するべく、以前より、「社会階層と社会移動全国調査」（SSM調査）をはじめ、多様な領域にまたがる形で研究を蓄積してきた経緯がある。様々な形をとって顕在化する社会的資源（経済的・文化的・権力的・評価的・人的等）をめぐる不平等（階層間・地域間・世代間・学歴・職業選択等）の現代的な形態を明らかにしつつ、その解決策を模索していくことは、これまでの社会学の研究蓄積を見直すのみならず、新たな研究の地平を押し開いていく一助となるはずである。

こうした観点に立ち本共同研究では、「格差・不平等」をキーワードとして、より複雑さを増していく現代社会の実情を明らかにするとともに、最終的にはその実情に見合った、あるべき社会のしくみを構想していく手がかりを獲得することを目指した。

本共同研究では、上記の課題・目的を達成するために、社会システム論という分析的視点と方法論的アプローチに依拠しつつ、研究代表者ならびに研究分担者それぞれの専門領域を踏まえ、1) 理論・学説（T. パーソンズにはじまる社会システム論に依拠した理論ならびに分析枠組みの検討）、2) 文化・情報メディア（若者）、3) 実証・応用（労働・雇用、社会階層、都市、エスノメソドロジー、農村・農業）という3つの研究グループを構成した。その上で、各研究グループそれぞれが、当該領域における研究成果をもとに、現代社会において「格差・不平等」を固定・拡大させていくメカニズムとその構造的要因を探索していき、最終的な研究成果をまとめるという手続きを採った。具体的には、「格差と社会的な不平等」という共通テーマのもとで研究代表者・分担者各自のテーマに基づき、①先行研究の分析、②各領域における「格差と社会的な不平等」をめぐる情報の収集と整理、③各研究グループ内での情報・意見交換を行った。

【研究の結果】

本年度の研究結果を日本学術会議協力学術研究団体の日本大学社会学会で年3回発行している『社会学論叢』誌へ投稿した。また、7月に開催された2015年度日本大学社会学会大会（兼日本大学文理学部学術研究発表会社会学部会）では、特別講演、5人の報告者による自由報告とともに、テーマ部会として「ヴェーバー研究の現在（いま）

を考える」というテーマのもとシンポジウムを実施した。2人のシンポジストからの、「モノグラフとしての「倫理」論文の特性と意義—文書データと解釈の関係を中心に—」, 「「倫理」論文における慣用句（語）や諺の取扱いの意義」をテーマとした報告を踏まえ、コーディネーター、フロアの参加者が一体となって活発な討論が行われた。

【研究の考察・反省】

ここまで研究代表者・分担者各個人の研究はそれぞれ進められ、成果を生んでいる。しかし、まだ個人の成果としてとどまっているため、今後はこれを各グループで情報を共有・理解を深め、一つの共同研究グループとして関連付けていく作業を進めていきたい。

【研究発表】

松橋達矢

- ・「新線開業の社会的・経済的効果に関する実証的研究（1）—埼京線・埼玉高速鉄道・TXと長野新幹線・九州新幹線・北陸新幹線を事例とする第一次報告—」（後藤範章文理学部教授ほか6名による共同報告）
日本都市学会第62回大会, 2015年10月31日, 新潟県上越市ホテル・ハイマート

【研究成果物】

松岡雅裕

- ・「圓谷集団社会学の確立とその反響」
『社会学論叢』No.183, 23-43, 2015年6月25日, 日本大学社会学会

後藤範章

- ・「都市の物理的・社会的転換を可視化する写真調査の可能性—埼京線・つくばエクスプレス・埼玉高速鉄道沿線での第8次調査から—」
『日本都市学会年報』Vol.48, 229-238, 2015年5月, 日本都市学会

立道信吾

- ・『大学生の学業成績と就職活動に関する総合的研究 第5次報告』
日本大学立道ゼミナール発行, 2016年3月

松橋達矢

- ・「社会調査実習」成果報告書（巻頭言・調査の概要等を後藤範章文理学部教授と共著）
日本大学文理学部社会学科「社会調査士コース」, 2016年3月

2-9 現代社会における問題的地位の分析に資する社会学的研究V—現代人の「生」をめぐる諸側面—

- 代表者 仲川秀樹 (社会学科・教授)
- 分担者 中森広道 (社会学科・教授)
- 夏刈康男 (社会学科・教授)
- 山本質素 (社会学科・教授)
- 久保田裕之 (社会学科・准教授)
- 山北輝裕 (社会学科・准教授)
- 中村英代 (社会学科・准教授)
- 小池高史 (社会学科・助手A)

【研究の目的および概要】

本共同研究では、前年度に引き続き、現代人の「生」の問題に焦点を当て、1) 理論・学説、2) 文化・情報メディア、3) 実証・応用という多様な領域と関心に基づき、「生」をめぐる社会学的諸側面の様相を明らかにすると同時に、そうした「生」の在り方を可能とするような現代社会の存立構造について考察と分析を深めていくことを目的としている。

生殖や誕生、病や老いといった人生のリスクや課題とむきあうための作法が強く求められる昨今、「生と死」をめぐる「死生学」や「生存学」など、領域横断的な形で展開される研究がとみに増加してきている。

こうした問題に対し社会学は、E.デュルケムの『自殺論』を嚆矢として、個体の生物学的なイベントとしての「誕生」と「死」を他者や集団の価値体系との関係性や社会的相互行為から分析する研究成果を積み重ねてきた。本人を取り巻く人間関係（配偶者、家族、友人、医療・介護従事者等）や社会環境（地域社会、メディア等）に目配せしながら、より広い文脈で社会的存在としての人間の「生と死」に関する営みを考察していくことは、社会学独自の強みであるといえよう。

こうした観点に立ち本共同研究では、「生」をキーワードとして、生命や生活、生き方や生き様、生きがいや生きづらさ、生涯など、様々な側面を有する現代人の「生」の形態を明らかにしつつ、そうした「生」の在り方を規定する現代社会の実情を反省的に捉え直していく。その上で、最終的には豊かな「生」の在り方や望ましい社会のしくみを構想していく手がかりを獲得することを目指した。

本共同研究では、上記の課題・目的を達成するために、研究代表者ならびに研究分担者それぞれの専門領域を踏まえ、1) 理論・学説（E.デュルケムに依拠した理論ならびに分析枠組みの検討）、2) 文化・情報メディア（メディア文化、災害、人生儀礼）、3) 実証・応用（野宿者、シェアハウス、高齢者、依存症）という3つの研究グループを構成した。その上で、各研究グループそれぞれが、当該領域における研究成果をもとに、上述のような現代人の「生」の在り方を可能とするメカニズムとその構造的要因を探索した。具体的には、現代人の「生」という共通テーマのもとで研究代表者・分担者各自のテーマに基づき、①先行研究の分析、②各領域における現代人の「生」をめぐる情報の収集と整理、③各研究グループ内での情報・意見交換を行った。

【研究の結果】

本年度の研究成果を日本学術会議協力学術研究団体の日本大学社会学会で年3回発行している『社会学論叢』誌へ投稿した。また、7月に開催された2015年度日本大学社会学会大会（兼日本大学文理学部学術研究発表会社会学部会）では、特別講演、5人の報告者による自由報告とともに、テーマ部会として「ヴェーバー研究の現在（いま）を考える」というテーマのもとシンポジウムを実施した。2人のシンポジストからの、「モノグラフとしての「倫理」論文の特性と意義—文書データと解釈の関係を中心にして—」、「「倫理」論文における慣用語（語）や諺の取扱いの

意義」をテーマとした報告を踏まえ、コーディネーター、フロアの参加者が一体となって活発な討論が行われた。

【研究の考察・反省】

ここまで研究代表者・分担者各個人の研究はそれぞれ進められ、成果を生んでいる。しかし、まだ個人の成果としてとどまっているため、今後はこれを各グループで情報を共有・理解を深め、一つの共同研究グループとして関連付けていく作業を進めていきたい。

【研究発表】

久保田裕之

- ・「「脱法ハウス」問題にみる法的住宅概念と家族モデル」
第88回日本社会学会自由報告, 2015年9月20日, 早稲田大学

中村英代

- ・「ナラティヴ・セラピーによる摂食障害の治療・回復の実際—臨床社会学の観点から」
第19回日本摂食障害学術集会, 2015年10月25日, 福岡パピヨン24
- ・「私を語る 社会が変わる—アディクションの問題から、地域に“語る場”があることを考える」(講演)
平成27年度 コミュニティフォーラム事業, 2016年3月28日, 静岡市こころの健康センター

小池高史

- ・「超高齢集落としての都市近郊住宅団地」
日本老年社会科学会第57回大会, 2015年6月14日, パシフィコ横浜
- ・「団地自治会の形成と変遷」
第10回日本応用老年学会大会, 2015年10月25日, 砂防会館

【研究成果物】

仲川秀樹

- ・『H・ブルーマーの集合行動論—流行理論を軸として—』
学文社, 2015年4月10日

山本質素

- ・「社会経済発展と農村の変容—カンボジア2農村の事例—」(山本質素・大塚友美・石川晃司, 共著)
『紀要』91号, 2016年3月, 日本大学文理学部人文科学研究所,

久保田裕之

- ・「シェアする—共同生活とジェンダー役割」
伊藤公雄・牟田和恵編『[全訂新版] ジェンダーで学ぶ社会学』130-145, 2015年, 世界思想社
- ・「高齢者の安心と若者の未来を支える異世代間プログラムの開発」(片桐恵子・久保田裕之, 共著)
『地域ケアリング』1, 42-45, 2016年

山北輝裕

- ・「知的・精神障害をかかえた野宿者の地域生活への移行」
『理論と動態』vol.8, 2015年12月15日, 特定非営利法人 社会理論・動態研究所

中村英代

- ・「『ひとつの変数の最大化』を抑制する共同体としてのダルク―薬物依存からの回復支援施設の社会学的考察」
『社会学評論』vol.66, No.4, 2016年3月, 日本社会学会.

小池高史

- ・「都市近郊住宅団地に暮らす高齢者の社会的孤立」
『地域ケアリング』17巻4号, 2015年4月1日, 北隆館
- ・「高齢者の緊急連絡先登録システム利用者の特徴」
『日本公衆衛生雑誌』62巻7号, 2015年7月15日, 日本公衆衛生学会

2-10 ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題に関する総合的研究

- 代表者 山田祐子 (社会福祉学科・教授)
- 分担者 上之園佳子 (社会福祉学科・教授)
井上 仁 (社会福祉学科・教授)
川村宣輝 (社会福祉学科・教授)
諏訪 徹 (社会福祉学科・教授)
山田祐子 (社会福祉学科・教授)
金子絵里乃 (社会福祉学科・准教授)
後藤広史 (社会福祉学科・准教授)
- 協力者 阿部里美 (社会福祉学科・助手)

【研究の目的および概要】

本共同研究では、「社会的包摂」(social inclusion, 以下「ソーシャル・インクルージョン」と記す)に焦点を当て、1) 問題、2) 法制度、3) 方法論(ソーシャルワーク)のそれぞれから、1) 原論・理論、2) 家庭・児童福祉、3) 障害者福祉、4) 高齢者福祉、および5) 公的扶助等の社会福祉の多様な分野や関心領域に基づき、ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題に関して考察することを目的とする。

昨年度の共同研究では、『『社会的排除』をめぐる諸問題と構造的要因に関する社会福祉学的研究Ⅱ-『社会的包摂』を探る諸側面-』と題し、今日大きくクローズアップされている「社会的排除」(social exclusion)の問題に焦点を当て、1) 原論・理論、2) 家庭・児童福祉、3) 障害者福祉、4) 高齢者福祉、および5) 公的扶助という社会福祉の多様な分野と関心領域に基づき、社会的排除をめぐる諸問題に対し、社会福祉学的側面からアプローチすることによって、その現状や構造的要因を明らかにするとともに、福祉という立脚点に立った主体的参加の在り方やその方法等について考察した。今年度は、さらに研究を継続するとともに、その成果を発展させ、ソーシャル・インクルージョンをとりあげることとした。

ソーシャル・インクルージョンは、社会的排除の相反する概念として、社会的排除より差別的ではなく、積極的な意味をもつことから、社会的排除に変わり使用され始めた。その意味するところは「排除をしない」のみならず、「多様な人間を市民社会のなかに統合していく」、「社会的つながりから疎外、阻害された人びとを社会的に包摂する」こと、またその施策、「社会から排除されて孤立する人びとと、ともに生きる社会づくりをめざす」ということから「共生社会」を意味するものとの捉え方もある。その意味で、ソーシャル・インクルージョンは社会的排除に比し、より実践的な概念を含むといえる。

今日、ホームレス、依存症、虐待や暴力、孤独死等のような福祉システムが十全に機能しない局面が増大傾向にあるなかで、排除の現状や、その構造的な要因、さらには現実社会と福祉制度との在り方等々についての具体的な調査・分析・考察を行った研究成果を踏まえ、今年度は、ソーシャル・インクルージョンを研究テーマとして、社会福祉課題とソーシャルワーク実践についてさらに検討することとした。

研究計画における具体的スケジュールは、以下のとおりである。

- 4月～8月 研究代表者ならびに各研究分担者による先行研究の収集と整理
- 9月 研究代表者ならびに各研究分担者による経過報告
- 10月～1月 各研究者間における共通テーマをめぐる情報の整理・意見の交換
- 2月 各研究者による中間的な成果報告
- 3月 研究成果のまとめと全体の総括

【研究の結果】

本共同研究では、上記の研究課題や目的を達成するために、研究代表者ならびに分担者それぞれの専門研究領域について、これまでに行われた当該研究領域についての研究成果を参考にしながら、それぞれの分野における排除の現状や出現の仕方、また、その構造的な要因や福祉制度との関わり、ソーシャル・インクルージョンをめぐる社会福祉課題とソーシャルワーク実践を中心に、検討を行った。

具体的には、「ソーシャル・インクルージョンとその関連領域の社会福祉課題」を共通のテーマとして、研究代表者・各分担者が各自のテーマに基づき、①先行研究の整理、②各領域におけるソーシャル・インクルージョンをめぐる情報の収集と整理、を行った。

取り上げたソーシャル・インクルージョンをめぐる研究テーマは、以下のとおりである。

- ・「ソーシャル・インクルージョン」に関わる理論的枠組・分析的枠組みと諸問題の研究
- ・社会政策における「ソーシャル・インクルージョン」に関する研究
- ・「ソーシャル・インクルージョン」に関する社会福祉・介護システムの研究
- ・生と死の臨床における「ソーシャル・インクルージョン」の研究
- ・ホームレスを取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」に関する諸問題の研究
- ・子どもを取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」の諸問題の研究
- ・精神障がいを取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」に関する諸問題の研究
- ・高齢者を取り巻く「ソーシャル・インクルージョン」の研究

【研究の考察・反省】

今年度の研究は、昨年度の研究成果を更に発展させることを目的として行われた。「ソーシャル・インクルージョン」という共通テーマのもとに各自の領域ごとに研究を進めた点では、一定の成果をあげたといえる。しかし、各研究者間における情報・意見交換について十分な時間がとれず、結果的には、社会福祉の各分野をほぼ網羅したものとはなっているものの、「総合的研究」としての知見を呈示することについては、課題が残った。

【研究発表】

上之園 佳子

- ☐ 学会名：第23回日本介護福祉学会大会
- ☐ 発表テーマ：参加型地域ケア政策と Active Ageing— rights-based approachからの接近 —
- ☐ 年月日：2015年9月28日
- ☐ 場所：金沢市

後藤 広史

- ☐ 学会名：日本社会福祉学会
- ☐ 発表テーマ：「自立困難層」のホームレス状態にある人々の実態と支援課題—自立支援センターの「再利用者」に着目して—
- ☐ 年月日：2015年9月20日
- ☐ 場所：久留米大学

【研究成果物】

金子 絵里乃

- ☐ テーマ：緩和ケアにおける援助者のグリーフとその対応：職種間の共通性とソーシャルワーカーの独自性
- ☐ 誌名：社会福祉学
- ☐ 巻・号 56巻4号
- ☐ 発行年月日 2016年2月29日
- ☐ 発行所・者 日本社会福祉学会

- ☐ テーマ：援助者が自殺で患者を喪うということ
- ☐ 誌名：『自殺をケアするということ：「弱さ」へのまなざしからみえるもの』
- ☐ 発行年月日：2015年6月10日
- ☐ 発行所・者：ミネルヴァ書房・木原活信・引土絵未編著

- ☐ テーマ：ソーシャルワークの歴史
- ☐ 誌名：『ソーシャルワーク』
- ☐ 発行年月日：2016年2月23日
- ☐ 発行所・者：弘文堂・金子絵里乃・後藤広史編著

川村 宣輝

- ☐ テーマ：職業リハビリテーションの成り立ち（職業生活を支える福祉分野の取組み）
- ☐ 誌 名：障害者職業カウンセラー厚生労働大臣指定講習テキスト
- ☐ 巻・号：第3版 第1巻
- ☐ 発行年月日：2016年3月
- ☐ 発行所・者：独立行政法人高齢・障害者・求職者雇用支援機構

後藤 広史

- ☐ テーマ：ソーシャルワーク（編者）
- ☐ 発行年月日：2016年2月23日
- ☐ 発行所・者：弘文堂

- ☐ テーマ：「ソーシャルワークにおける『支援観』—ホームレス状態にある人々の支援の現場から」
- ☐ 誌名：『ソーシャルワーカーのジリツ—自立・自律・而立したワーカーを目指すソーシャルワーク実践』
- ☐ 発行年月日：2015年12月20日
- ☐ 発行所・者：生活書院

- ☐ テーマ：「生活困窮者の現状とソーシャルワーカーの役割」
- ☐ 誌名：『社会保障改革とソーシャルワーク』
- ☐ 発行年月日：2015年8月5日
- ☐ 発行所・者：中央法規

- ☐ テーマ：「生活困窮者自立支援法における自立概念をめぐって」
- ☐ 誌名：『ソーシャルアクション』
- ☐ 巻・号：3号
- ☐ 発行年月日：2015年6月20日
- ☐ 発行所・者：全国コミュニティライフサポートセンター

山田 祐子

- ☐ テーマ：「高齢者の権利擁護・虐待防止の動向」
- ☐ 誌名：『権利擁護・虐待防止白書2016』
- ☐ 発行年月日：2016年
- ☐ 発行所：全国社会福祉協議会

2-11 現代における教育改革の理念・方法・成果についての研究視点の構築に関する研究

- 代表者 広田照幸（教育学科・教授）
- 分担者 北野秋男（教育学科・教授）
小野雅章（教育学科・教授）
末富 芳（教育学科・准教授）
小笠原喜康（教育学科・教授）
下司 晶（教育学科・教授）

【研究の目的および概要】

1980年代の臨時教育審議会以降、わが国の教育は、欧米で進展する教育改革から理念・アイデアや手法を借用しながら、さまざまな教育改革を進めてきた。しかしながら、教育学内部の諸分野でバラバラにそれらについて研究が進められており、分野を超えたトータルな分析・考察の視点の構築については、必ずしも十分になされてきているとはいえない。教育学内部の各分野でそれぞれに蓄積されてきた固有の問題関心や固有の分析概念などが、かえって各分野の壁を越えた共通の像を構築することを困難にしているのである。

以上のような問題状況を克服するために、本研究では、欧米の教育改革を研究する研究者、日本の教育改革の歴史を研究する研究者、現在の政策的な次元での動きを分析する研究者、それらの背景にある大きな教育思想の変容について研究する研究者などが、1980年代のわが国の教育改革の理念・方法・成果を考察する上で、どのような共通の視点を持ちうるのかをさぐっていく。具体的には、教育学内部の下位分野それぞれの観点からの研究を相互に突き合わせ、問題関心の違いや分析概念の違いなどを超えて、1980年代以降の教育改革の考察にどのように共通項となる視点を見出すことができるのかを検討し、複数の分析枠組みや概念相互間の関係を明確にすることを目的としている。ただし、大きな主題であるだけに、初年度の今年度は探索的な作業から開始する。

【研究の結果】

まずは問題意識を共有するため5月に研究会合を持ち、それぞれの視点から現代の教育改革のどの側面をどのように考察するのか／してきているのかを突き合わせる作業を行った。研究代表の広田が問題提起を行い、それをめぐって自由に討論をした。そして、その問題意識を共有した上で、各自の作業を進め、10月、11月、2月に作業の進捗状況の報告と意見交換のための研究会合を持った。それぞれの下位分野の専門性に沿ってなされた研究から、どのように／どこまで共通項となる視点を見出すことができるのかを明確にしていく作業が主となったが、問題関心の方向の違い、下敷きとなる理論や使用する分析概念の違いによるもののほか、何を望ましい教育と見なすかという価値的な選択の違いなどによって、まったく同じ教育事象が分野によって違ってとらえられていることが確認された。それが、現代の教育改革の評価をめぐる教育学諸分野間での不一致を生み出している理由の一つと考えられる。

【研究の考察・反省】

本年度の研究では、単に問題関心の方向の違いや、下敷きとなる理論や使用する分析概念の違いだけでなく、何を望ましい教育と見なすかという価値的な選択の違いが、教育学諸分野間の議論のすれ違いに大きく関わっていることが確認できた点が、大きな収穫の一つであった。

もう一つ重要な成果は、研究方法の違いが、同一の概念に異なる意味づけを与えているような例を確認できた点である。教育哲学では演繹的に定義されているような概念が、教育社会学においてはデータや現実から帰納的に定義されている、というふうな例である。たとえば、「大学とは何か」というふうな基本的な研究対象の同定に関し

ても、「個に応じた教育」という教育改革でのキーワードなどにおいても、それによって考え方の違いが生じているわけである。

こうしたことをふまえ、特定の主題を定めて教育諸分野間での扱い方や考え方のズレと重なりを検討していくことが重要ではないかという方向で、今年度の議論がまとめられた。

【研究発表】

- 広田照幸 「戦後の教育政治を問い直す」日本教育社会学会第67回大会課題研究, 2015年9月10日, 於 駒澤大学。
- 北野秋男 課題研究発表「学力政策の国際比較研究—日米の学力テスト体制を中心に—」(国際教育学会第10回大会) 相模女子大学, 2015年9月13日。
- 小野雅章 「『日本教育史研究の発信力』とは何かの自問自答——「受け手」を意識した研究の成果と授業とは」(第34回日本教育史研究会サマーセミナー テーマ:「日本教育史研究の発信力——「受け手」との関係から考える」の提案, 於東洋大学白山キャンパス, 2015年8月23日)
- 小笠原喜康 「参加をうながす学習キットの理論問題—標本型・制作型・物語型—」全日本博物館学会・第41回研究大会, 2015年6月28日, 於 京都国立博物館。
- 相馬伸一・下司 晶・室井麗子・小山裕樹・生澤繁樹「教育思想史の「裏面」を問う—「古典」はどう読まれてこなかったのか」教育思想史学会第25回大会, コロキウム1, 2015年9月13日, 於 慶應義塾大学三田キャンパス。

【研究成果物】

- 広田照幸「高校生の「コドモ」扱いをやめよう メディアはまなざし変える努力を」『Journalism』第307号, 朝日新聞社, 2015年12月10日, 65～72頁
- 北野秋男「米国の巨大企業財団と教育改革の歴史」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』, 第90号, 2015年6月30日. pp.25-37.
- 小野雅章「『日本教育史研究の発信力』とは何かの自問自答——「受け手」を意識した研究の成果と授業とは」『日本教育史往来』(日本教育史研究会) 第216号, 2015年6月30日。
- 末富 芳「キャメロン連立政権下におけるイギリス教育財政改革の特質: Pupil Premiumによる学校改善と子どもの貧困への対応を中心に」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』第90号, 2015年6月30日. pp.60-77(査読付)
- 小笠原喜康 「論考: 人工知能と視聴覚教育」『視聴覚教育』第816号: pp.24-25, 2015年10月1日。
- 下司 晶編 『「甘え」と「自律」の教育学—ケア・道徳・関係性』, 世織書房, 2015年5月。
- 下司 晶・青柳宏幸・本田伊克・木村 元「「戦後教育学」のアーリーナー 政治・ディシプリン・教育運動」『近代教育フォーラム』第24号 (2015年9月)

2-12 スポーツ競技者のパフォーマンス低下をもたらす心理的ストレスについての精神生理学的検討

- 代表者 水落文夫 (体育学科・教授)
- 分担者 高橋正則 (体育学科・教授)
- 西川大輔 (体育学科・教授)
- 松本 恵 (体育学科・准教授)

【研究の目的および概要】

スポーツ競技の試合において、一般的にプレッシャーと称される自我を脅かす心理的ストレスに対して、選手は認知的評価を介して感情、生理、行動面のストレス反応を表出する。本研究は、スポーツ競技における選手の心理的なストレス反応の個人差要因について、視床下部－下垂体－副腎皮質（HPA）系と、交感神経－副腎髄質（SAM）系の2つのストレス反応系の活動を軸に検討するものである。心的努力の増加やコルチゾールの分泌亢進とその後の認知機能の障害などから、パフォーマンス低下の要因としてSAM系に対するHPA系の影響力の強さが推測される。すなわち、強いプレッシャーの中での認知機能と運動の協応性低下は、主にHPAストレス反応系の活動亢進による“すくみ反応”の様相を特徴的に呈した状態と思われ、そのときにはコルチゾールの分泌亢進、ネガティブ感情の増強とポジティブ感情の低減、および不合理な意思決定の増加が起きていると思われる。これらの一連の反応は、自我ストレスを中心としたストレスとなる人前でのスピーチ課題で起こるストレス反応に似ており、このパーソナリティの側面と捉えられるストレス反応の起こりやすさは、HPA系の反応性の個人差に依存している可能性がある。このように、スポーツ競技場面で起きている一過性のストレス反応の多くは、2つのストレス反応系の作用から仮説的に説明できる。そこで、スポーツ競技場面の選手の心理的ストレスにみられる反応プロセスに関するいくつかの仮説のうち、申請した期間中は次の点に関心をもって検証する。

仮説：競技直前および競技中における心理的プレッシャー下の選手のストレス反応増強あるいはパフォーマンス低下は、人前でのスピーチのストレス反応表出と同様で、主にHPA系の過剰反応による。

なお、HPAストレス反応系の活動亢進を推測する指標として、唾液に含まれる副腎皮質ホルモンであるコルチゾールとポジティブ／ネガティブな感情状態を採用した。このうち、唾液の採取と定量に関しては、スポーツ競技場面の選手を対象としても、自前の簡易的な測定システムで妥当な値を得ることが確認されている。しかし、選手の感情状態の評価については、かなり特化した状況の感情であるため、般化を視野に入れた既成の感情尺度（たとえば、日本語版PANAS）では、競技ストレスによる感情の変化をとらえきれない可能性がある。そこで、スポーツ場面に適合するポジティブ／ネガティブな情動を表現した単語で構成され、試合直前や試合中でも選手が負担なく回答できる質問紙の開発も進める。

【研究の結果】

反復測定の実験デザインに基づき16名の競技選手（男子のバレーボール選手とバドミントン選手）に対して、実際の公式試合、実験室実験のためのストレス課題であるTSST（The Trier Social Stress Test）などの各種ストレス刺激を与え、それらのストレス反応性を、ストレス刺激の前・中・後で評価した。測定した項目は、唾液コルチゾール、心拍変動（心拍数、心電図RRI：Lorentz plot法によるCSI（cardiac sympathetic index）とCVI（cardiac vagal index））、質問紙尺度（TDMS二次元気分尺度）であった。なお、公式試合においては、選手の競技成績に対する影響を考慮してハートレートモニターによる心拍変動測定を行わなかった。

結果の中で、注目すべきものの一つが公式試合におけるコルチゾールの変化であった。バレーボール選手8名の公式試合では、1回戦の試合開始45分前（安静）のコルチゾール値を基準とすると、ほとんどの選手の値は試合直前、第1セットと第2セットのセット間と次第に上昇し、このセット間をピークに、第2セットと第3セットのセット間

で低下した。引き続き行われた2回戦では、試合直前で値は低下したが、その後の第1セットと第2セットのセット間では半数の選手が上昇した。なお、落としたセットは1回戦の第1セットのみであった。そして、コルチゾール値がピークとなった1回戦の第1セットと第2セットのセット間では、多くの選手がTDMSによって評価された情動のうち、「安定度」と「快適度」が低下する傾向を認めた。

スポーツ選手の試合におけるパフォーマンスの精度（実力発揮度）を予測できる感情尺度を開発するために、まず男女の大学生スポーツ選手104名を対象に、スポーツ競技場面における情動に関する単語（情動に関する形容詞）を用いた「情動プロファイリングテスト」（蓑内，2005）を行った。情動プロファイリングテストでは、その実施に当たり実力発揮度あるいはコンディションに影響する情動要素を選手が選択した。大学生スポーツ選手が選択したポジティブ情動として「自信のある」、「楽しい」、「やる気がある」などの8項目、ネガティブ情動として「不安な」、「緊張した」、「心配な」などの8項目が、比較的に高い確率であった。

スポーツ選手の競技における感情状態を評価する尺度の開発に関しては、試合におけるパフォーマンスを予測するための指標になるとして選定した17項目のポジティブあるいはネガティブな情動要素で構成される心理尺度の原案が作成されている。そこで、情動プロファイリングテストにおいて選択された16項目のうち、感情尺度原案17項目と重複しない項目を加えた28項目の「試合における感情状態検査」を、男女の大学生スポーツ選手304名に対して行った。その際に、最近の重要な試合をイメージさせて回答させ、併せてその試合の実力発揮度を自己評定させた。その結果、実力発揮度との関係が認められない2項目、および回答に強い偏りがみられる6項目が確認された。現時点では、これら8項目を除いた20項目の回答データから因子分析によって共通因子を探索し、尺度の信頼性、妥当性、簡便性を高めるためのデータ処理と分析を行っている。

【研究の考察・反省】

スポーツ競技における強いプレッシャーの中で、選手はパフォーマンスの低下により実力を発揮できないことが、様々な心理的モデルで説明されている。この研究は、このプロセスを一過性のストレス反応として扱い、主にHPAストレス反応系の活動亢進が関与していることを検証している。公式試合の直前から試合中にかけての唾液コルチゾールの変化は、2つの試合におけるポジティブ情動の変化および成績（たとえば、セット得失）と関連することを認めた。また、最初の試合において、選手は一様にコルチゾールの高値を認めたものの、2試合目になるとコルチゾールの変化と感情の変化に個人差が認められている。現在、この個人差がプレー選択などの認知的側面や動作精度などの運動的側面とどう関係するか検討を行っている。

スポーツ選手のパフォーマンスを予測できるポジティブ／ネガティブな感情状態を評価する尺度の開発に関しては、現在までに実力発揮と関連する情動を表現する20の単語を整備するにとどまっている。今後は、因子分析や公式試合で測定されたデータとの関連から、因子構造の確認、尺度の信頼性・妥当性・簡便性について検討し、スポーツ現場で選手が負担なく回答できる有効な尺度の開発を進める。

【研究発表および研究成果物】

これまでに、申請した研究期間において得られた知見を、論文投稿および学会発表などで公表していない。本年11月に開催される日本スポーツ心理学会第43回大会での発表、人文科学研究所研究紀要第93号に投稿を予定しているが、それ以外の公表は未定である。

2-13 体育教師における実践的指導力の構成能力—教科指導に焦点化して—

- 代表者 青山清英 (体育学科・教授)
- 分担者 大嶽真人 (体育学科・教授)
- 鈴木 理 (体育学科・教授)
- 野口智博 (体育学科・教授)
- 伊佐野龍司 (体育学科・助教)
- 城間修平 (体育学科・助教)
- 村上幸史 (体育学科・助教)
- 吉田明子 (体育学科・助教)

【研究の目的および概要】

近年、教師の「実践的指導力」に関する議論が止まない。現在の学校現場は、いじめ、学校不適應による保健室登校や不登校、SNS問題など、これまでの教育観では対応しきれない問題が生じている。こうした教育課題に対し、2012年の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、教師はグローバル化や情報化等の社会の変化に応じた教科・教職に関する高度な専門的知識を有し、それらを授業・生徒指導・学級経営等において実践できる力を備えることが必要であることが示された。これは、伝統的な学習指導のみならず、社会の変化に応じた学びをデザインすることのできる能力を持ち合わせることを要求され、教師の職能の多様性が一層増すことを意味している。さらに、これらの能力は獲得完了型ではなく、養成段階から現職教員の段階へと延長し、省察を中心とした更新型となっているため、生涯を通じて学びつづけることも求められていることは言うまでもない。こうした状況について佐藤学(2015)は、教師の専門家像は『教える専門家』から『学びの専門家』というように変化していることを指摘し、「反省的实践家」としての教師のあり方の重要性と専門職性の現状を述べている。

上記の実践的指導力の向上は、体育教師にも他人事ではない。教科指導に焦点化すれば、体育が身体活動を通じた学習であるにも関わらず、運動の学習そのものが生理学的効果に依拠したエクササイズとしての媒介効果の獲得や技能やルールの一方向的な教授に留まるなど、本来の志向とは異なる方向性の授業が依然として散見されている。こうした事態に歯止めがかからなければ、学習とは掛け離れた体育授業が再生産され続けることは容易に想像できるだろう。それは同時に、要請される教師の職能性ともかけ離れることになる。

こうした状況に対して、多くの体育教師を輩出する体育学科においても、早急に対応する必要があることは他言を要すまい。そこで、教職必修の実技授業担当教員によって組織された筆者らは、2014年より、体育教師の実践的指導力を構成する諸能力に関する議論を進めてきた。そして、その能力の一つとして、運動指導において必須とされる発生活動学における「創発能力」を取り上げ、その形成過程の分析を、2015年度体育学科実技授業の受講者を対象に実施することを目的とした。

【研究の結果】

伊佐野により、教師及び体育教師の実践的指導力に関する研究動向を調査した。教育学的方面においては、教師の実践的指導力と、答申が示す活動内容との相違を指摘しながら、その関係構造を提示した。そこでは、反省的实践家モデルを参照のもと、教育的実践を個別の解決ままで終わらせるのではなく、そこで動員される顕在的であり潜在的な知の様式を、「省察」と「熟考」によって再構成し直す思考の過程が、実践的指導力の醸成に向けて必須となることが提示された。また、鈴木により、体育科教育学の研究領域から、日本の体育の学習指導を基礎づけている諸科学、とりわけ体育の授業実践を研究対象とする体育科教育学やスポーツ教育学において、教師の力量形成に

関してどのような知見が集積されてきたのかが概観された。さらに、青山により、教科体育の教育目標に提示される「身体能力としての技能」を、学習者のある運動が「できない」状態から「できる」状態への移行のなかで発生する能力であると捉え、運動学習の実践がフィールドとなることが提示された。そこから、運動感覚能力が主題化される運動学習における動感創発身体知と、その分析方法論としての現象学的反省分析の必要性が示唆された。

これらの理論背景を基に、陸上・水泳・球技（バスケットボール・サッカー）・ダンスにおける創発身体知の形成を企図した授業実践が行われた。運動感覚能力の推移を観察するためにVAS（Visual Analog Scale）と運動内観を記載する自由欄を設けたアンケートを所定の授業にて実施した。全体的にScale値は高く学習の成果が認められるが、運動内観に関する記述が乏しい学生が多く散見された。

【研究の考察・反省】

理論背景における先行研究の概観と検討については、度重なる議論の上で実施された。また、授業実践においても各担当が授業計画、アンケート作成等事前準備に余念がなかった。しかしながら、体育学科に在籍する学生であっても、自らの運動について、とりわけ運動感覚に関する内省報告は習慣化されておらず、客観的身体に関する議論が展開されることが多い。また、自動化された運動についても、振り返ることが困難であり、豊富な記述に至る学生が少なかった。こうした課題は、授業展開によって改善可能と判断している。今後は、現象学的反省分析の形式（自我論的還元・相互主観的還元・形相的還元）を導入し、自らの運動感覚を言語化する習慣化を図りたい。

【研究発表】

平成27年度桜門体育学研究ディベートフォーラム「体育教師に求められる実践的指導力の養成に向けた授業実践：創発分析能力に焦点化して」にて発表。

【研究成果物】

桜門体育学研究50号2巻 「体育教師に求められる実践的指導力の養成に向けた授業実践：創発分析能力に焦点化して」特集にて研究に向けた背景と実践報告を掲載。

「特集号目次」

- | | |
|--|-------|
| 1) 教師に求められる実践的指導力とは | 伊佐野龍司 |
| 2) 体育教師に求められる実践的指導力とは | 鈴木 理 |
| 3) 体育教師教育における動感創発身体知 | 青山清英 |
| 4) 各実技授業実践における成果・課題報告 | |
| 4.1 砲丸投（ステップ投法）における「コツ」身体知の形成について | 村上幸史 |
| 4.2 水泳授業「10分泳」の泳力養成のための実践例：息継ぎの創発能力に着目して | 野口智博 |
| 4.3 バスケットボールにおける「カン」の創発身体知の形成 | 城間修平 |
| 4.4 サッカーにおける「カン」の創発身体知の形成を企図した授業実践 | 大嶽真人 |
| 4.5 「現代的なリズムのダンス」における動感創発身体知の形成をめぐる一考察 | 吉田 明子 |

2-14 日常認知に関する基礎と応用に関する総合的研究 (3)

- 代表者 岡 隆 (心理学科・教授)
- 分担者 巖島行雄 (心理学科・教授)
- 齋藤慶典 (心理学科・准教授)
- 坂本真士 (心理学科・教授)
- 内藤佳津雄 (心理学科・教授)
- 羽生和紀 (心理学科・教授)
- 依田麻子 (心理学科・教授)

【研究の目的および概要】

心理学の研究はしばしば基礎領域と応用領域に分けて考えられているが、実際に何を以て基礎、応用というかはそう簡単に決める事はできない。一昨年来の継続テーマであるため、本年度の研究においても基礎と応用という区分を非日常（いわゆる実験室実験）と日常としてとらえ、この検討のために、犯罪心理学、認知心理学、社会心理学、生理心理学からそれぞれのテーマを選択し、実施してきた研究の成果を報告する。また、これらの成果を踏まえ、次年度はそれぞれの分野の成果をまとめ、基礎領域の研究手法や研究成果の応用や実用の可能性に焦点を当てた総合的な研究に着手するものとする。

一昨年から継続して、教員の研究分野である、犯罪心理学、認知心理学、社会心理学、生理心理学からそれぞれ日常認知に関わる研究テーマを取り上げている。

本年度、犯罪心理学分野では、侵入窃盗犯の認知過程を検討し、認知心理学分野では、目撃供述や識別にかかわる認知的な問題、および、高齢者の知的機能の問題を検討し、社会心理学部分野では、うつや偏見などの日常的な現象に基底する認知的過程を検討し、生理心理学分野では、教育・学習場面での課題遂行中のストレス反応の生理的な測定方法、および、日常場面における連続肺気量の測定方法の検討を行った。

【研究の結果】

犯罪心理学分野では、実際に受刑中の窃盗犯に対して、侵入窃盗を行う対象、手口、実行プロセスの決定過程に関して半構造化面接で聞き取りを行い、侵入窃盗の一連の意思決定過程についての個人差と一般性を明らかにした（羽生）。

認知心理学分野では、過去25年間での現実の刑事事件で、目撃供述や識別が裁判の争点となった諸事件を取り上げ、それらの心理学評価のための模擬実験を通して証拠の信用性を評価した。いわゆる専門家証人として働いた経験から、どのような要因によって目撃供述や識別が誤るのかを指摘し、誤判を防ぐ政策提言を行った（巖島）。また、高齢者の知的機能について、最近10年間程度の年代別コホート間の変化について、NILS-LSA (National Institute for Longevity Sciences – Longitudinal Study of Aging) のデータを再解析する等の手法で分析した（内藤）。

社会心理学分野では、うつ病かもしれないと示唆することが、義務を果たさないことの弁解として機能するかを、質問紙実験によって検討した。また、いわゆる「新型うつ」のパーソナリティ特徴として対人過敏・自己優先傾向を仮定し、それを測定する尺度を作成、信頼性及び妥当性を検証するとともに、本研究がらが開発し実施してきた抑うつ予防のための教育プログラムを改訂し、新たなプログラムを実施し、その効果を実証的に検討した（坂本）。また、女性という社会的集団に対するステレオタイプの構造を明らかにするとともに、ネガティブなステレオタイプ（偏見）の意識的抑制にとって効果的な認知方略を検討した（岡）。

生理心理学分野では、教育・学習場面を想定した難易度の高い記憶課題を遂行する実験室場面において、他者から肯定的評価を得ることを目標とする遂行接近志向と、他者から否定的評価を与えられることを避けようとする遂

行回避志向をそれぞれ教示によって誘導し、それら目標志向性の相違が課題遂行中のストレス反応に与える影響について、唾液中コルチゾール濃度を指標として検討し、ストレス反応の測定に適した唾液中コルチゾール濃度には、実験室場面で使用するには比較的長い反応潜時があることと、濃度に大きな個人差が見られることが予備的分析で明らかになった。十分なデータ数を得るために実験を継続中である（齋藤）。また、従来心理学実験における連続肺気量測定は困難であったが、ウェアラブル呼吸モニタはそれを可能にした。また、ウェアラブル呼吸モニタは日常場面における研究に最適であるため、その基本的特性の検討を行った（依田）。

【研究の考察・反省】

日常認知の基礎と応用に関する総合研究の3年目としての成果は積み重ねられている。昨年度の反省にもあるように、全体的なテーマの設定が広範囲なものであるだけに、基礎と応用の関係をどのように関連づけて理論化していくのが重要な点である。今年度は、本研究テーマの最終年度であったが、それぞれの分野の成果を有機的に関連づけて検討し、日常認知の基礎と応用、すなわち、非日常（実験室実験）と日常との関係を総合的に明らかにするには至らなかった。そこで、これらの関係を捉えるための視点を絞り込み、その視点に基づいて、それぞれの分野で実証的研究を行うことによって、分野をまたがった通約可能性を担保する試みを次年度から実施する予定である。具体的には、基礎心理学分野における研究手法や研究成果の日常場面での応用や実用の可能性に焦点を絞った総合的研究を実施する予定である。

【研究発表】

Itsukushima, Y. (2015). Psychology of eyewitness testimony: Lessons from 25 years as an expert on eyewitness testimony. SARMA XI. June 26, Victoria, Canada.

岩倉 望・宇梶義一・羽生和紀・島田貴仁（2015）．侵入窃盗犯の犯行における意思決定過程について．日本犯罪心理学会第53回大会．

Yamamoto, M., & Oka, T. (2016). The role of non-dominant female stereotype activation in suppressing dominant female stereotypes. The 17th Annual Meeting of the SPSP, San Diego, California.

依田麻子・平良里奈・依田光正・根武谷吾（2015）．ウェアラブル呼吸モニタを用いた課題遂行時の呼吸の検討（1）．日本心理学会79回大会，名古屋大学．

依田麻子・依田光正・根武谷吾（2015）．ウェアラブル型換気・心拍モニタ法による生理変化の時系列的特徴分析の試み．日本催眠医学心理学会第61回大会，日本体育大学．

【研究成果物】

亀山晶子・及川 恵・坂本真士（2016）．女子大学生における抑うつ予防のための改訂版心理教育プログラムの検討．心理学研究, 86, 577-583.

内藤佳津雄・北村世都（2016）．精神心理的老化の経時的データ．日本老年学会（編）『高齢者に関する定義検討ワークグループ報告書』（印刷中）．

Yamakawa, I., Muranaka, M., & Sakamoto, S. (2015). Validity and reliability of the Interpersonal Sensitivity/Privileged Self scale: Solving a new type of depression. Psychology, 6, 1013-1021.

Yamakawa, I., & Sakamoto, S. (2015). Insisting on depression, but not showing symptoms: A Japanese study of excuse-making. International Journal of Psychological Studies, 7, 146-154.

山本真菜・岡隆（2016）．ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差：認知的複雑性との関係．社会心理学研究，

第31卷, 第3号 (印刷中).

2-15 精神的健康に関する臨床心理学的研究 (5)

- 代表者 篠竹利和 (心理学科・教授)
- 分担者 横田正夫 (心理学科・教授)
- 津川律子 (心理学科・教授)
- 菊島勝也 (心理学科・准教授)
- 山口義枝 (心理学科・准教授)

【研究の目的および概要】

臨床心理学は、米国心理学会 (American Psychological Association / 2007) によれば、臨床心理学 (clinical psychology) は「情緒や行動の障害に関する研究 (research), アセスメント (assessment), 診断 (diagnosis), 評価 (evaluation), 予防 (prevention), 治療 (treatment) を専門とする心理学の部門のこと」と定義されている。情緒や行動の障害を広く精神障害・症候と捉えるならば、臨床心理学は精神障害・症候の「アセスメント」(「診断」, 「評価」を包含), 「治療」の実践から翻って、人々の精神健康を「研究」する立場にある。「予防」が主要な専門行為の1つに挙げられている所以がここにあると言える。

このような立脚点を踏まえ、今回の共同研究においても、これまで「精神健康に関する臨床心理学的研究」を継続テーマとし、精神健康に関する臨床心理学的知見をさらに蓄積し、それらを総合していくことを目的とする。具体的には、研究代表者及び研究分担者の臨床実践／専門性を活かして、1) 自閉症スペクトラム障害 (ASD) の概念が浸透してきているなか、過剰診断の問題も指摘されているが、ASDをもつ人々の生活上の困難を個別的に理解し、その対処や援助といった臨床実践につながるアセスメントはどのようなものか、2) 統合失調症の長期経過について、3) 自殺念慮をもつ生活者が自らそれを積極的に周囲に語るとは限らない臨床的事実から、心理アセスメントによって臨床心理士を代表とする心理援助専門職がどのようにして希死念慮に関してエビデンスをもって介入できるのか、4) 幼児をもつ母親への子育て支援グループ活動において、参加者である母親が感じている活動の効果と、ボランティアスタッフである学生の活動体験との間にどのような関連がみられるか、5) ASDをもつ人々へ、臨床心理面においてどのような関わりが援助となるのか、についての研究を行う。

【研究の結果】

1) 篠竹は、①ASDの過剰診断への注意喚起のために、現場においてASD鑑別補助目的で実施される心理検査バッテリーの組み方について論じた。また、②ASDをもつ人々の生活上の困難の理解に資するべく、健常群を対照群として、友人関係に対する志向性の違いが精神的健康にどのように関連するかを検討する基礎的研究を行い、自分自身を改善、成長させることを目標とする志向性を高めることが精神的不健康を軽減する要因となる可能性を示唆した。2) 横田は、①統合失調症患者の経過研究を行い、精神症状の変化にともなって描画に特徴的な変化が生じることを示した。また、②抑うつや妊娠期の不安についての研究もおこない、それらの症状変化にともなう描画特徴の変化についての検討も行った。3) 津川は、①自傷行為を呈したうつ病女性事例を個性記述的に検討し、自殺のリスク評価と治療計画の策定における心理検査バッテリーの有用性を提起した。併せて、②心理検査によって自殺関連行動前にみられる特徴を明らかにし、自殺予防に寄与する心理検査バッテリーの工夫について論じた。4) 菊島は、幼児をもつ母親への子育て支援グループ活動の継続において、参加者である母親の認識する活動効果と、ボランティア学生の活動体験について、参加型観察によるデータ収集を蓄積した。5) 山口は、大学生として生活しているASD特性をもつ学生の感覚過敏が学生生活上にどのような影響を与えるのかという視点から、ASD傾向の高い大学生が感覚過敏による日常生活上の困難さを体験していることを実証した。

【研究の考察・反省】

1) 篠竹の研究では、今後も心理アセスメントの事例研究を継続して、ASDのアセスメントにおける有効因子を提示していくことが課題である。2) 横田の研究では、今後もさらに、蓄積している統合失調症患者の長期にわたる描画データを基に事例研究を続けていくことが望まれた。また、それらと抑うつ状態や産褥期にある女性の描画にみられる特徴を総合して、描画にみられる精神的健康（不健康）の特徴を検証していくことも課題である。3) 津川の研究では、対象者数をより多く蓄積すること、および、それを通して自殺予防に寄与する心理検査バッテリーに関する知見を総合して提示することが課題である。4) 菊島の研究では、長期的経過を要する子育て支援グループ活動を継続してデータを収集し、それらを集計して検証することが課題である。5) 山口の研究では、素質としての発達上の違いが、実際の対人関係とどのようにつながるのかを臨床的に検討していくことが課題である。さらに、1)～5)の成果を今後はひとつの統合モデルの中に組み込んでいくことが求められる。

【研究発表】

〈横田正夫〉

- ・「初期統合失調症長期化の1例」のその後—彩色描画で追跡した約8年の経過—。日本心理臨床学会第34回秋季大会。
- ・抑うつの変化に伴うバウムテストに関する検討。日本心理学会第79回大会。
- ・産褥早期の母親による母子画にみられる特徴と対児感情との関連。第56回日本母性衛生学会学術集会。
- ・女子大学生の児接触経験と母性意識及び対児感情に関する検討。日本心理学会第79回大会。
- ・妊娠・産褥早期の心理的特徴（2）—妊娠期・産褥早期・産後1か月における対児感情の縦断的検討—。日本応用心理学会第82回大会。

〈津川律子〉

- ・交際相手の事故死を契機に頻回の自傷行為を呈したうつ病女性の事例—自殺のリスク評価と治療計画の策定における心理検査バッテリーの有用性。日本自殺予防学会総会第39回大会。
- ・自己評価式抑うつ性尺度（SDS）および文章完成法（SCT）において自殺関連行動前に見られる特徴。日本精神衛生学会第31回大会。

【研究成果物】

篠竹利和 発達年代に沿った検査バッテリー 青年期(医療場面)。高橋依子・津川律子 編著 臨床心理検査バッテリーの実際。第9章, 138-150, 遠見書房, 2015。

篠竹利和 大学生の友人関係場面における目標志向性と適応, 精神的健康の関連。日本大学文理学部心理臨床センター紀要, 第13巻第1号, p.55-62, 2016。

津川律子 自殺のリスク評価からみた包括システムによるロールシャッハ・テストのSuicide Constellation（自殺の可能性）と風景構成法との関連性—精神科患者76例を対象として。臨床心理学, 第15巻6号, p.763-771, 2015。

津川律子 臨床心理検査バッテリーの実際。遠見書房, 2015。

山口義枝 自閉症スペクトラム傾向の高い大学生の理解と支援のための一考察—感覚過敏による日常生活上の困難さ—, 日本大学文理学部心理臨床センター紀要, 第13巻第1号, p.29-40, 2016。

2-16 グローバル化時代のリージョナリズムの潮流

- 代表者 石川晃司（総合文化研究室・教授）
- 分担者 青木一能（総合文化研究室・教授）
- 椎名正博（総合文化研究室・教授）
- 大塚友美（総合文化研究室・教授）
- 日吉秀松（総合文化研究室・助教）
- 小林和歌子（総合文化研究室・助教）

【研究の目的および概要】

グローバリゼーションの下で、近年、東・南アジアは世界でも最も目覚ましい経済発展を遂げており、21世紀が「アジアの時代」と呼ばれることもある。東アジア全体が有望なマーケットの一つとして世界にクローズアップされている中で、アセアンを土台にした東アジア共同体を模索する動きも次第に高まり、アセアン10カ国プラス日中韓3カ国のサミット会議も定期的におこなわれるようになった。日中韓3カ国のそれぞれがアセアン諸国との自由貿易協定（FTA）の締結にむけて積極的にすすんでいる。中国はすでにアセアンとの自由貿易協定を締結しており、総人口約18億の巨大な市場が誕生した。韓国も日本もアセアンとの間の自由貿易協定の締結に大きな進展も見られている。しかし、経済交流が非常に活発している日中韓3カ国の間の自由貿易協定の締結は、いまだに足踏みの状態にあるのも事実である。これは、領土問題を含むさまざまな政治的な対立が続いていることに起因する。

近年、私たちは、これらの問題について、経済、政治、文化、言語などの各面から、継続的に研究を続けてきた。具体的には、東・南アジアという地域ではどのような「共同体」を形成すべきか、という根本的な問題を出発点に据えて、単に経済共同体にするか、それとも経済共同体を実現したうえで政治共同体を目指すのか、などの検討をおこなってきた。

本共同研究は、既述のように、東・南アジアにおける共同体のあり方について分析を主要な課題とし、昨年度と同様、総合文化研究室の共同研究会の実施を柱とする。本共同研究において、各メンバーは個別領域を担当するが、個別の研究の積み上げに終始しないよう、相互の意見交換による体系的な分析が必要と考える。そのため、これまでの研究成果に基づき、必要に応じて随時研究会を開催し意見交換をおこなう。さらにそれを敷衍していくことが重要と考える。この観点から、平成26年度は数回にわたる研究会を開催し、現地調査を実施する。それと同時に各自の資料収集と分析を踏まえた途中経過報告、情報交換、さらに討議を行う。

各メンバーの担当領域は、以下の通りである。

研究代表者の石川晃司は、ナショナリズムとインターナショナリズムの相克について担当し、また、本共同研究全体を総括する。

国際政治を専門とする青木一能は、グローバル化時代におけるアジア共同体への要請について担当する。

国際経済を専門とする大塚友美は、地域協力への経済的要請について担当する。

フランス文学を専門とする椎名正博は、地域協力の先進的事例研究について担当する。

中国政治を専門とする日吉秀松は、地域協力と中国の役割について担当する。

英語教育を専門とする小林和歌子は、アジア共同体における英語教育について担当する。

【研究の結果】

本年度の研究では、アジア社会におけるグローバリゼーションとリージョナリゼーションの相互関連を踏まえ、それらが東・南アジアの共同体構想にどのような影響を及ぼすかを分析の主要な課題としている。

各研究者は自分の本来の研究領域や問題意識に引きつけて、本共同研究の個別的な深化を図った。また、課題と

した現地調査も、個別に実施した。青木一能はベトナム・カンボジアにて現地調査をおこなった。椎名正博は、フランスのBDと日本のマンガの比較文化的研究をおこない、今後の東・南アジア文化研究への足掛かりをつくった。大塚友美・石川晃司は昨年度に引き続き、今年度も9月と12月にカンボジアに赴き、現地の生活調査をおこなった。その成果の一端は「社会経済発展と農村の変容——カンボジア2農村の事例」にあらわしたが、今後陸續と発表されることになっている。日吉秀松も、昨年に引き続き、中国での現地調査やアメリカでの資料収集をおこなっており、これらの調査研究の成果については公刊の予定がある。小林和歌子は、英語教育の比較研究の中に・東・南アジアを対象に組み込み、研究成果をあげつつある。

【研究の考察・反省】

実際にこの地域を研究してみると、驚くべき多様性があり、将来的にどのようにまとまっていくのか、容易に決定しがたいところがある。研究すればするほど課題が増えていくという現状がある。現在、私たちは多角的な研究をおこなっているが、一方で対象を絞る必要も感じているところである。今後の検討課題としたい。

【研究発表】

大塚友美 「生活の充足度に関する住民意識調査」

日本人口学会第67会大会（2015年6月5日～6月7日、於：梶山学園大学）

椎名正博 「マンガとBD—文化翻訳のケーススタディとして」

『グローバル人材育成のためのオープンエデュケーションに関する総合的研究（平成27年度日本大学学術研究助成金（総合研究））

国際シンポジウム「文化翻訳がひらく異文化間コミュニケーションの可能性」2016年2月22日、於：日本大学通信教育部

Wakako KOBAYASHI, 'The Use of Self Assessment in Second Language Testing through SEM analysis', FLEAT6国際学会（於：ハーバード大学、アメリカ合衆国）

【研究成果物】

大塚友美・石川晃司 「社会経済発展と農村の変容—カンボジア2農村の事例」（山本質素との共著）

日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』（91号）、2016年3月

椎名正博 「マンガとBD—文化翻訳のケーススタディとして」

『文化翻訳が拓く異文化間コミュニケーションの可能性 報告書』、2016年3月

小林和歌子 「英語習熟度テストにみられる大学1年生の英語力の推移」（隅田朗彦、T・グティエレスとの共著）

日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』（90号）、2015年9月

3 「日本語教育の可能性」

平成27年度人文科学研究所主催公開講演会

- 講演者 笈川幸司（ジャスロン代表）
- 開催日時 平成27年11月12日 16：30～18：00
- 開催場所 文理学部図書館3階 オーバル・ホール

私の後輩に当たると思うんですが、日本大学の皆さん、こんにちは。どうぞよろしくお願いします。

この中で日本人の方、手を挙げていただきたいんですが……。あーあ、ありがとうございます。中国から来た中国人の皆さん……。大体半分ぐらいですね。私の日本語分かりますか。きょう全部日本語で話しますけど、大丈夫ですか。（会場から「大丈夫です」の声）。はい、ありがとうございます。

きょうの「日本語教育の可能性」というテーマは中文科の青木先生からいただいて、すばらしい、いいテーマだなということで、皆さんにお話ししたいと思うんですが、日本語教師になりたいとかいう夢を持っていないでも、皆さんが将来、10年後、20年後、30年後、40年後、社会で活躍できるようなお話ができたなあという気持ちで、まいります。

皆さまは二十歳ぐらいですか。私は二十歳のときは、皆さん、多分知らないでしょうが、尾崎豊が好きだったんです。この社会に対して反抗するとかそんなことがカッコいいなあみたいな気持ちを持って、人生というか社会をなめて、世の中を軽く見て、他人のことをバカにして、31歳までずーっと生きてきました。そんなことを31歳までやっていて、とうとう壁にぶつかってしまった。気持ちのうえでは人生もう諦めて、自殺しようと思ったけれども、自殺する勇気もない。夢の中では自殺しているのに、起きてよかったなと思ったり、もうしょうがないなあという気持ちでいました。

そのころの私は、できるだけ楽な仕事をしてたくさんおカネをもらいたい、ひとよりも楽なことをして生きていきたいなあと思っていました。そういう人生を送ったからといって、それほどひどい状況になることもなかったの、このまま生きていけるだろうなあと思っていました。

さっきのご紹介のように、31のときに夢を諦めて、お笑いをやっていたといっても売れない芸人でしたし、政治家の秘書も難しいテストに合格してなったわけではない。「あなた行きなさい」と言われて、「いいですか。はい、じゃあ行きます」といって行ったら、政治家の公設秘書になれた。たまたま運がよかったのか悪かったのか分かりませんが、少なくとも実力ではない。能力があったから秘書になったわけではないから、その世界でもうまくいかない。先ほど言いましたように社会ををなめていましたから、うまくいかない理由は全部他人のせいにして、いいところだけは、「あ、さすがおれはすごい。われながら……」みたいな感じで生きていました。

こんな人生、もうどうでもいい。価値もないんだから損してやろうと、そこで価値観を全部変えました。たとえば中国の大学の先生の給料ってそれほど高くないんですよ。1日4時間ぐらい大学の授業をして、それ以外の授業を朝から晩までボランティアみたいにすると、もともと安い時給がさらに安くなる。この人生、できるだけ損してやろうと考えだしたのが31歳のときです。

ここにこれだけたくさんの方がいますので、31歳までの私と似た考えの人が多分1割ぐらいいると思います。その1割の人たちに言いますけれども、そのときの私の考え方は非常に間違っていて、31歳から始めた「ひとのために、無料でもいいのでやってやろう」というようなやり方、考え方が正しいことがすぐ分かるようになります。

朝、起きると、事務所の先生も学校の先生も学生たちも、私に対して大きな声であいさつして、「よく来てくれました」と、うれしそうな顔で私を迎えてくれる。夜、終電に間に合うように11時とか12時に帰るときも、みんなが「(腰を90度に曲げ、深々と頭を下げて)ありがとうございます」と言うんです。日本人じゃない。中国人ですよ。「あ、うれしいなあ。こんなに感謝される人生を歩めるんだ」と思ったのが2001年、いまから14年前、31歳

のときです。

一回諦めたけれども、こんな面白い人生ならもう一回やろうという気持ちになって、いまに至っている。といっても、皆さんがここまで来るまでに、いいことも悪いこともあったように、私もいろいろなことがありました。ただ、この15年間、いつもブレずにやってきたのは「自分の得になることを優先しないでやる」ということです。たまには自分のために、自分の利益のためにやってしまうこともあります。なぜかその後、うまくいかない。そうすることがこの14年間あったので、きょうはそれを中心にまずお話しをして、後半、教育の可能性についてお話ししたいと思っています。

ここまで自己紹介というかたちでお話ししました。中国人学生の中で、私ときょう初めてという人、手を挙げてもらいたいんですが……。

「あ、いま何年生ですか」

「1年生です」

「名前は」

「チョーです」

「チョーさん。いま顔が赤くなって緊張してますね。ここまでの話で、何か質問とか感想とか言いたいこととかありませんか。何でもかまいませんよ」

「ないです」

「ないですか。全然ないですか。じゃあちょっとこちらから質問させてください。どうしてここに来ましたか」

「日本語と関係がある話を聞きたかったから」

「そうですか」

いまチョーさんの発音はとってもよかったです。日本語と関係のある話をちょっとだけさせてください。日本人学生にとってはあまり意味のないことかもしれませんが、中国語を勉強しているとか英語を勉強しているとか外国語を勉強している日本人にとっては役に立つことになるかもしれません。

チョーさん、私の中国人の学生は最初、2001年のころ、発音がよくなかったんです。教室に行くときみんな「(口を大げさに広げて) 笈川先生、おはようございます。こんにちは。私はチョーです。よろしくお願いします」という発音で話していたんです。一人二人ではありません。ほとんどみんな「(口を大げさに広げて) 私の日本語まだまだ下手です」といってしゃべっていたんです。でも、いまのチョーさんの発音、すごくよかったなと思いました。どこが違うのでしょうか。

私は最初、中国人の学生に、「ちょっとその発音おかしい。もう一回練習して。こんにちは」「(口を大げさに広げて) こんにちは」「こんにちは」「(口を大げさに広げて) こんにちは」という発音で、どこが日本人と違うんだろうと結構迷ったんですけれども、すぐに分かりました。

中国人が日本語を話すときは口がとて大きいのです。だから話し方をちょっと変えてくださいと言いました。中国人は「ア」のときはa、「イ」のときはi、「ウ」のときはu、「エ」のときはei、「オ」のときはouと発音します。日本人は「ア」のときはi、「イ」のときもi、「ウ」のときもi、「エ」のときもi、「オ」のときもiです。だから学生たちに、鏡で自分の笑顔を見ながら、「(iの口の形で) あ、皆さん、こんにちは。どうぞよろしくお願いします。あ、そうなんですよねえ。これはペンです。チョーです。どうぞよろしくお願いします」というように、口の形を常にiで発音してくださいと言った1週間後には、多くの学生の発音がものすごくよくなっていました。いまのチョーさんの話し方はiの口でしゃべっていたので、発音きれいですねと私は言ったんです。

中国人学生に日本語を教えるときは「口の形を i にしてください」と教えていますし、北京のいろいろな大学で中国語を勉強している日本人留学生には「中国語を話すときはいつも u の口で話してください」と言っています。

なぜかという、私は中国に1年だけ留学していたことがあって、最初半年ぐらいずっと、「何人ですか」と言われて、「ウォーシー・リーベンレン」と言っても全然通じなかったんですね。中国人は「eu, eu」と言う。私は「i:, i:」と言ってたんですけども、もういやになって、音を消して映画を見たりテレビを見ていたら、中国人は中国語を u の口で話している。私はある日から中国語を話すときは u の口の形で「ウォーシー・リーベンレン」と言ったら、「ああ、日本人か」と、すぐ分かるようになります。一瞬のことです。ほんのちょっとした違い、舌を巻くとか舌の位置とかは私はあまりよく分からないんですけども、中国人と同じ口の形で中国語を話したら、「中国語の発音、きれいですね」と言われるようになりました。

英語を上手に話すにも、アメリカ人の口の形で英語をしゃべったら、多分英語の発音がよくなるだろう。こんな簡単な原則だということに気づきました。この間、結婚したばかりの福山さんの物まねをする人たちみんな、福山さんのように口を丸めて「福山です」としゃべってますよね。口の形をまねすれば、声も似て、発音もよくなっていく、というのが私の考えです。チョーさん、いかがでしょうか……。

それでは中国に行ったことのある日本人いますか……。一人。

「いつ行きました？」

「大学2年のとき。2年前に」

「高校生のときに」

「いや、いま大学3年ですから」

「お名前教えてもらってもいいですか」

「村上です」

「村上さん、たとえばタクシーに乗っていて、何人ですかと聞かれて、日本人ですと中国語で言ったことありますか」

「いや、タクシーに乗らなかったです」

「乗らなかったんですか。えーっ。何で？ 地下鉄とか……」

「いや、ホテルに泊まったときは何かが迎えに来たんで、タクシーには乗らなかったです」

「じゃあ中国人から質問されて日本人ですと答えたことないですか」

「多分英語で聞かれたと思います」

「分かりました。ありがとうございます」

9日ですから3日前に、10年ぐらい前に北京に留学していた仲間が5～6人集まって、「留学生生活、大変だったねえ」みたいな話をしていましたけれども、日本人留学生はみんな、中国にいと嫌な思いをします。なぜかという、「あなた何人ですか」という質問に対して「日本人です」と答えると、「おまえ、歴史分かってるのか」「南京大虐殺についてどう思っているんだ」とすぐ言われます。上手に答える場合もあるし、たまに日本人が「あの30万人という数は多すぎると思います」とか本当のことを言ったら徹底的に言われますよ。だから多くの日本人留学生は中国に行って嫌な思いをしていると思います。

10年前は私は大学の先生をしていましたけれども、まだ若くて留学していたころ、「何人ですか」と言われたときに、「ウォーシー・グイズー」と言ってたんです。どういう意味かという、戦前、日本人がアメリカ人とかイギリス人を「鬼畜米英」と言ったような言い方で、中国人が日本人を「鬼子」という言い方があるんです。それで私

が「ウォーシー・グイズー」と言うと、中国人は全員、「やめろやめろ。そんな過去の話はもうやめましょう」と言うんです。全員ですよ。例外はありません。

どういふことなのかなあと、いま簡単に分析してみると、彼らは「日本人、おまえ歴史分かってるのか」ということをちょっと確認したい、そういう気持ちなのかなと思います。だから、その確認の前に私が「ウォーシー・グイズー（私は鬼子です）」と言うと、「ああ、もうやめましょう、その話は。日中友好、日中友好でいきましょう」とみんなが言うので、私は1994年12月、21年前に初めて中国に行つて以来、ずーっとこのやり方で、中国での生活で嫌な思いをしたことがないし、中国人にののしられたことも一度もないんです。10年前に留学していた皆さんが「えっ筈川先生、ほんとなんですか。私たち、すごい言われましたよ」と言うので、「いや、ウォーシー・グイズーと言ってるだけで、全部問題は解決できますよ」という話をしたら、「ああ、それを留学する前に聞いておけばよかった」と彼らは言っていました。

「南京虐殺についてどう思いますか」という質問に対しては、何万人とかそういう話は私はしません。「たくさんの方につらい思いをさせてしまったことに対して申しわけない気持ちがあります。そういうふうを考えている日本人は日本国内にもたくさんいます」という話をすると、中国の方は「ああそうか。じゃあ違う話にしましょう」といって違う話をしてくれます。私はうそもつかないし、30万人じゃなくて何万人だとかそういうことを言うつもりもない。いままでそうやってきたので、学生たちとも同僚の中国人の先生たちともそういうことでケンカしたことはないんですよ。

中国との付き合いが20年ぐらゐの私が思っているのは、皆さんがもし中国に行くチャンスがあったら、中国人とケンカしてもらいたくない。中国の方が戦争によって傷ついていることはうそじゃないので、「なんでそんな30万人とか大人数を言うんだ」とか、そんな話もしないでほしい。中国人とケンカしている日本人に「30万人云々の話をして、お互いに喜んだんですか。本当にうれしかったんですか」と聞くと、お互いに嫌な思いをしているだけですから、そういう話をするよりも、もっといいところを見てもらいたいと思っています。

日本はアメリカとか先進国のいいところをまねして、自分たちも先進国になった。いま中国や韓国がどんどん発展しているのに、なんとなく中国や韓国の悪いところばかり見ているような気がします、もうちょっといいところを認めたほうがいい。自分に自信がなくて、他人のいいところをあまり認められない人がいるじゃないですか。そういう理由で認められないのかもしれませんが、もうちょっと日本人は自信を持って、堂々とした態度で中国や韓国や東南アジアの人たちのいいところを学べばいいなと私は思っています。

「村上さん、何か私に質問とかありませんか……。急にふられて、ドキドキしてるでしょう」

「ぼく自身も中国の友人が多くて、いま筈川さんがおっしゃったように、そういった話には基本的に触れないように生活しているんですけど、お互いがお互いをそうやって尊重し合つて生活できればいいのかなと思っています」

「ありがとうございます。同感です」

その話になると複雑になってしまうので、あまり入り込みたくないんですけども、触れない話があつてもいいですよ。あいつとは何でも話せる、何でも話し合える間柄がすばらしいみたいなことをよく言いますけれども、相手が一人とかならいいですよ。でも、中国人は13億人いますし、日本人だって1億2000万人いますから、みんながみんなお互いに何でも話し合える関係なんて、日本人同士だってないでしょう。親子だって言えない話いっぱいあるし、夫婦だって、これは言ってもいいけど、こんなことは言っちゃいけないということがある。きょう奥さんの顔色が悪くて、「あれ？ ちょっとふけたんじゃないの」と思つても、「いつもきれいだね」と言つたほうがいい。

本当のことを言わなくてもいいときってたくさんあると思うので、それに関しては私も尊重しているし、大賛成です。

「ちょっと話を変えたいと思いますので、ここで何か質問のある人いませんか……。あ、どうぞ。お願いいたします」

「史学科の宮田と申します。先ほど31歳のときに中国に日本語を教えに行かれたということですが、留学もされたんですね」

「留学は大学卒業してすぐですから、31のときには中国に渡って日本語の先生を始めました」

「留学のほうなんですけど、なぜ中国だったんですか。ほかの国もあったと思うんですけど」

「ありがとうございます」。

この質問は何回もされて、同じことしか言えないんですけれども、私は大学時代、日本大学文理学部教育学科の学生で、大学3年生のときに、文理学部の60人だか70人ぐらいの学生が夏休みにヨーロッパに行くツアーがあって、それに参加したことかあるんですよ。ありますか、いまでも。

私、それに参加したときに、ミュンヘンというドイツの都市で、普通に芝生の上にみんなが座っているような状況で、そこでイタリアのトリノに住んでいる子と仲よくなって、イタリアに行きたいなあと思うようになりました。

イタリアに行ったときには、自由な時間を使って海に行っただすけれども、ポーランドの若者たちがワーッと10人、20人ぐらいいて、一緒にビーチバレーボールをやって、そのときにすごくやさしくしてくれているポーランドの方がいて、「あ、ポーランドに行ってみたいなあ」と思ったり、スイスのチューリッヒに行ったときには、バーンホフ通りという駅前通りをずーっと歩いていて、公園があって、そこでチューリッヒの女の子がすごくやさしくしてくれたので、私はヨーロッパに留学しようと思ったんですよ。

絶対にヨーロッパに留学しようとして、自分でアルバイトをして学費も自分で出してとか、そういう準備をしていたんですけれども、そんなばかばかしい話を——ばかばかしいでしょう。でも、この45歳のおじさんが言っているのではなくて、二十歳ぐらいの子が言っているんですけれども、その話を聞いた、当時中国の研修生をたくさん受け入れている建設会社の社長さんが「幸司君、面白い。中国へ行きなさい」と言うんですね。

そこに母もいたので、母が「おまえはヨーロッパとかアメリカばかり言ってるけど、中国へ行ってこい。中国はこれからどんどん発展する国なんだから、いまはバカにしているかもしれないけれども、これから本当にいい国になっていくんだから、中国を見てこい。日本の発展していく高度成長みたいなものを見たことがないだろう。日本だって、昔、貧乏だったんだ。すごかったんだ。それがいま、だんだん発展して、おまえはいまいい思いをしているかもしれないけど、中国はこれからなんだから、見てこい」みたいなことを言われて、「でも中国には行きたくないなあ」と言ったんですよ。

そしたら母が「おまえ、アルバイトしなくていい。学費も生活費も私が出すから、おまえ行ってこい」と言われて、「1日ちょっと時間くれ」(笑)。すみません。私、31歳までそういう人だったんです。それで「1日時間をくれ」という話をして、次の日、「やっぱり中国に行かせてください」という話をして、中国に行きました。

こういうきっかけなので、よくきっかけが大事だとか言うんですけれども、私はきっかけは大事だとは思っていません。きっかけは何でもいいと思っています。たとえば男女の関係の出会いだって、べつにどんなきっかけであれ、その後、お互いを思いやって、お互いに一生懸命成長していく関係で、結婚してお互いに相手の幸せを思って生きていけば、それでいいと思います。いま思うと、きっかけはべつに大したことはないなあと思っているんです。それは言いわけですが、そんなつまらないきっかけで中国に行きました。

だからといって、その後の中国での生活をつまらないものにしたつもりはないし、朝6時から学生たちと走って、授業が始まったら12時まで授業をして、1時半になると学生たちと一緒にごはんを食べて、その後また走ったりとか授業をして、大体毎日、夜11時、12時、遅いときは2時というときもありましたね。そういうことを毎日毎日、10年間やりました。

「ごめんなさいね。こんなつまらないきっかけだったんですけれども、満足できましたか、宮田さん」

「全然つまらないことはなかったので、大丈夫です」

「大丈夫ですか。ありがとうございました」

私の文理学部教育学科の学生4年間の一番の親友が宮田君でした。覚えてますか、ハタ先生（笑）。25年前の学生ですからね。

「ほかに何か質問のある方いらっしゃいませんか。もしいたら、勇気を出して手を挙げてください。ありがとうございます。どうぞ」

「先生、こんにちは」

「こんにちは」

「中国から来たりヨー・ユキと申します。私は自信がないんですけど、日本語の先生になりたいんです。先生の授業をきょう知ったんですけど、いままでずっとフューチャーというネットスクールで日本語の勉強をしていて、もし卒業したらそこで日本語の先生をやろうと思っています。だから先生に、日本語の先生になるためのアドバイスを何かお聞きしたいです」

「はい、ありがとうございます」

日本語の先生になるアドバイスなんですけれども、私は2001年に日本語の先生を始めて、学生からの質問に対して自分であんまり上手に答えることができなかったんですよ。経験もないし、知識もないし、あまり勉強してないしということで、最初の3年ぐらいは、一生懸命本を読んだり、夏休み、冬休みはほとんど本を読んでいたりと、かそういうことをしてたんですけど、そのときに分かったのは、大切なのは自分に知識があることではなく、自分に経験があるとかも関係なく、全員が全員かは分からないけれども、多分一番大切なのは自信だと思います。だって、先生に自信がないと、学生たち全然ついてこないんですもの。ほんとですよ。

だから、「スピーチコンテストに出たいんですけども、私は自信がありません」と言う学生に対して私は、「あ、そうですか。じゃあ私があなたを全国ナンバーワンにします。だから安心してください」という話を必ずします。どうすればいいか、全然分からないんですよ。でも2001年のときは最初からそういうことを言っていました。私がそういうことを言うので、学生たちは「分かりました。頑張ります」と、夜11時、12時、遅くまでずーっ練習についてきてくれました。

普通のスピーチコンテストに出る学生って、1週間か2週間、毎日2時間ぐらいの練習しかしないでしょう。私の学生は半年ぐらい、毎日6時間、7時間、ずっとスピーチの練習をしていますから、それはもう優勝するのはあたりまえですよ。

そんなに長い時間練習させるには、教師が自信がある—最初はふりですけどね。「私がいますから安心してください。絶対あなたを中国ナンバーワンにしますから、安心してください」と半年ぐらいずっとだまして、その子が優勝しますよね。そうすると後輩には「ほら、見てください。先輩のように、彼女のようにあなたもなれます。私が教えますから、安心してください」というふりをしました。

その学生が優勝した後、ちゃんと信頼関係ができたとき、二人っきりで一緒にごはん食べるときに、「いや、実はね、先生も自信なかったんだよ」みたいな話はしますが、やっぱり自信を持つことがすごく大切だなと思いました。

もう一つ、質問に答えられないとき、ありますよね。たとえば文法の説明で、「笈川先生、これどういうことなんでしょうか。これとこの違いはどういうことなんでしょうか」という質問をされると、私は「はい、分かります。それでは文法博士、お願いします」と言うと、「文法博士」というのがクラスに一人ぐらいいて、「はい、失礼いたします」と言って答えてくれました。だから私は、自分が分からない質問はほとんど、「あ、ありがとうございます。その質問はすばらしいと思います。文法博士、どうぞ」ということをやりましたね(笑)。

「文法博士」はプライドがありますから、どんな質問にも必ず答えます。普段から夜も一生懸命、文法の勉強をして答えられるようにしています。その学生は卒業のとき、文法についての論文を書いて、全国卒業論文コンテストで一番になったりしています。ですから私は困ったとき、「物知り君」とか「物知りさん」とか、「スピーチ女王、どうぞ」とか、そんなことをやりましたね。

きょうのテーマは「日本語教育の可能性」ですけれども、自分自身がものすごい知識を得て、経験をたくさん重ねるというよりも、メンバーのいいところをほめて、その子たちに任せる。日本語学校でも、大学での日本語授業でも、海外にいる日本語を教えているところでも、そういう授業をやっている先生があまりいないようなので、これは一つ、可能性の大きいことかなあと考えています。

「以上です。リョーさん、よろしいでしょうか」

「はい。分かりました」

「ありがとうございます」

「それではもう一人、何か質問したい人いませんか。あ、後から入ってきましたね。遅刻してきましたよね」

「すみません」

「はい、どうぞ」

「文理学部社会学科のkouと申します。江ノ島の江のkouです。日本に来たのは2年前で、長年ずっと、中国人ですというだけでつらい思いがあって、それでコンプレックスになったというか、日本人と付き合うときはできるだけ自分を教えないようにみたいな態度をとったんです。自分に自信がないという部分もあると思いますけど、自分の国に対するプライドが薄くて、日本のマスコミでも中国の悪口とかいっぱい出ますし、周りの人も政治に無関心だとしても、ニュースを見ている限り、「あ、中国、いま大変でしょう」「あんな問題もあるし、食の安全問題もあるし」といろいろ言われて、プライドがどんどん傷つくんですよ。そしていつの間にか自分も、できるだけ違和感のない日本語をしゃべりたい、日本人のように付き合いたいと考えて、日本語を究めよう究めようという思いをしてきたんです。

そして最近になって、バイト先とかもみんなも中国人に変な態度もとらないし、ステレオタイプの人たちも減ってきた気がして、「もう大丈夫だろう」と思いつつ、やっぱりどうしても「中国人です」とプライドを持って胸を張って言えないんですよ。恥ずかしいことですけど、日本にいる限り、みんなからプレッシャーもあって、いつも人と出会うとき、中国人ということをバレないようにして、もしバレなかったらすごく達成感が沸いてくるんです。もしいったんバレますと、「ああ、大変だな」と失望感が沸いてきて、こういう気持ちとずっと闘ってきたんです。

こういう気持ちを二度とこれからしないようにするにはどうすればいいか、ずっと悩んでいて、誰も「しょうがないよ。自信持って」と言われるしかないんですよ。いまこういう状態をどうすればいいのかなあと考えて、先生に質問しようと思いました」。

「ありがとうございます」

そうですね。この悩みは、中国に住んでいる日本人もそういう気持ちがあると思うんですよ。だから、コウさんと私はすごく似ているところがあります。日本人のように振る舞ったり、日本人だと思われたら達成感がある。すでにそういうことも何度も何度もあって、どんどん日本語も上手になって、それはすごくいいことですよ。

それはいいことなんですが、問題は「中国人です」と堂々と言えないところなんですよ。この問題はそう簡単に解決できるとは思わない。だって、メディアで中国のことをものすごくほめていることってあまりないし、中国人だ、中国だ、あまりよくないニュースが多い中、日本人の中国人に対するイメージもあまりよくない。80%とか90%の日本人は中国に対してよくないイメージを持っていますね。そんな中で堂々と「中国人です」と言うのはすごく難しいですよ。

どうすればいいか、ちょっと私も考えてみたんですけども、最初、「何人ですか」と聞かれたときに、「あのう……、言いにくいんですよお……」という話をします。そうすると日本人は「えっ、何人？ どこ？」「いや……、言いにくいんですよ」、「何人ですか。絶対何人でもそんな変な眼で見ませんかさら「ほんとですかあ。中国人です」「ああ、もう全然いいじゃないですかあ。中国人、いいですよお」と言って仲よくなって友だちになる。これ、日本人の反応だと思います。分かりますか。

「何人ですか」「(大きな声で)中国人です」と言うと、(小声で)あ、出た。やっぱり中国人だ(笑)。でも、「何人ですか」「いやあ、ちょっと言いづらいんですよえ」とコウさんが言った瞬間に、「あ、この人とはもしかしたら仲よくできるかもしれない」という気持ちが日本人に芽生える。そしてコウさんがその日本の友だちといつも一緒にいて、彼、彼女のためにいろいろ気を遣ったり、そんな関係を築いていって、お酒飲んだりごはん食べたりしたときにたまたま「(堂々と)私は中国人です」と言っても、多分日本人は嫌がらないと思いますよ。信頼関係を築くまでは絶対言わずに、信頼関係を築いて仲よくなった人だけに、お酒を飲んだり、ごはん食べたり、カラオケのときに、「(大きな声で)私は中国人です」と言えるなら、コウさんが解決したい問題は解決できるんじゃないですか。

そうではなくて、どんなときでも「私は中国人です」と言ったら、多分みんな、コウさんのことを嫌いになると思います。私も中国で「日本人です」なんてことを言わないですよ。「何人ですか」と言われて、「ウォーシー・ゲイズー」と言うときもありますが、「何人に見えますか」と言うと、「韓国人ですか」と最初言われます。「韓国人ではありません」「日本人だろう」と言われてヤバイと思ったときは、「私はマレーシアの富豪です」とか「私はマレーシアの華僑です」とか言うと、「ああ、そうか」みたいなかたちで、みんなよく思ってくれるんです。

「私は日本人です。プライドがあります」、そんなことを中国で言わなくても、日本人としてのプライドを本当に持っていればそれで十分でしょう。なんでひとに言わなきゃいけないんですか。「私は中国人です」と言っている人だけが本当に中国人としてのプライドを持っているということですか。習近平でも胡錦濤でも、すごい人たちですが、「私は中国人です」と中国人に対しても言わないし、オバマに対しても言わないですね。本当に自分が中国人であることに誇りを持っていたら、そんなことを言う必要もないし、考えるまでもないと思います。

コウさんは若いですから、言いたいときってたまにはあると思います。それは、本当に仲よくなった友だちとカラオケに行ったときやお酒を飲みに行ったときに、「ちょっと言ってもいいですか。言ってもいいですか。言いたいこと言ってもいいですか」「なんですか、どうぞ言ってください」「いや、ちょっと言いにくいんですけど……」「どうぞ言ってください」「私は中国人です」。

以上です。ありがとうございました(笑)。

コウさん、こんな話では全然だめですか(笑)。これでオーケーですか。

ということで、一応コウさんの質問に答えます。以上です。皆さん、どうもありがとうございました(拍手)。

私の中国人の学生はすごくよく拍手しますよ（拍手）。日本人は全然だめですねえ。私は文理学部を卒業してもう20年以上経ってるんですよ。そしてきょうは後輩がたくさんいるということで、皆さんが大歓迎してくれるだろうと思って、きのうの夜もほんとにドキドキドキドキしていました（拍手）。

ありがとうございます。

「それではほかに何か質問のる人いませんか。なければ前のこの二人にしたいと思っているんですが……。はい、どうぞ」

「何でもいいですか」

「失礼な質問でも何でもかまいません。お名前は？」

「史学科の桜井です。中国に留学してたそうなんですけど、本場の中華料理はおいしかったですか」(笑)。

「ありがとうございます」

桜井さん。本場の中華料理はおいしいですかという質問なんですけれども、ここに半分ぐらい中国人がいて、おいしくないと言えるわけがないんですけれども（笑）、少なくとも15年ぐらい前の中華料理は安くてもおいしかったです。いまも、おいしいかもしれない、味はいいかもしれないけれども、多分ここにいる中国の若者も知っているとありますが、何が入っているか分からないので、とても心配です。私が心配している以上に、中国の人たちはもっと心配しています。

今回 ここに来る前に40日間ヨーロッパを回ったんですけれども、そこでやさしくしてくれたのがイギリスとかフランスに留学している中国人の留学生でした。彼らは「私は中国に帰っても、中国の中華料理をあまり食べたくない」と私に言っていました。「どうしてですか」と言ったら、「ちょっと汚いし、危ないからです」と、中国人が言っていました。私の意見ではありません。

もしかしたら日本に留学中の皆さんも同じことを考えているのかなと思うんですが、チョーさん、いかがでしょうか。（会場から「そうです」の声）。ありがとうございます。リョーさん、いかがでしょうか。（会場から「ちょっと考えます」の声）。

そういう意見があって、味は確かにすごくおいしいんです。濃いので、若者にとっては何杯でもごはんが食べられるようなおかずです。ただ、危ないということを考えると、いまの中国で二人で食べて1万円ぐらいする中華料理は、おいしいし、安全だし、それはお勧めです。でも、1万円はします。500元はします。

よろしいでしょうか。

「では桜井さんのお隣、お願いします」

「国文学科の茂木です。質問……」

「いまずーっと私、何十分もしゃべっているんだから、一つぐらい質問思いつくでしょう。何でもかまいませんよ」

「いま中国人留学生の方が日本語をしゃべっているのを聞いて、すごい流暢でびっくりしたんですけど、多分たくさん勉強されているんだろうなと思っています。私は20歳ですけど、20年間何も考えないで生きてきて、そんなに努力もしたことがないので、そのモチベーションみたいなものがどこから来ているのかなと思いました」

「そうですよね。ほんとにこの問題は大きいですね。日本人は外国語を習得するモチベーション、あまりないですよ。

この質問は私にされても困るので、すみません、チョーさん、どうしたら外国語をマスターしようというモチベー

ション、動機づけみたいなのが続けられるのかなあという質問ですけれども、答えられますか」

「私もさっき質問しましたが、自分では日本語はそんなに上手ではないと思っています」

「と思っているんですけど、茂木さんは上手だと思っているんですって」(笑)。

「きっと周りの人もみんなでしゃべっているから、上手になれるんだろうと思います」

「ライバルというか、周りの人もみんな一生懸命頑張っているから、というようなご意見ですけれども、茂木さんはそんなので納得できるわけがないですね。

じゃあ私の教え子が一人ここにいますので、日本語のレベルをどんどん高めていく、そのモチベーション、やる気をずっと持ち続けるのはすごく難しい。それはなぜなのか、ちょっと教えていただきたいと思います。

「急に指名されるとは思いませんでした。その質問は、私が答えるよりは、先ほどぺらぺら一っとなしゃべっていたコウさんをお願いしたほうがいいんですけど(笑)、でもせっかく指名していただいたので、一言言わせてください」

「はい、どうぞ」

「私は、外国人の友だちと一緒に話したときに、自然に流暢な日本語を話せるようになると思います。それに、多分日ごろ、メディアとか本とか読んで、あるいはドラマ、映画を見て、それをまねすれば、外国語力は伸びると思います。以上です。ありがとうございます」

「はい、ありがとうございました」(拍手)。

いまオウさんがアニメやドラマをまねしてと言いましたが、アニメやドラマをまねしているのがありますので、これを1分ぐらい見てください。(アニメ放映)

これは、アニメを見ながら、アニメの声優が話している音を消して、まねしています。中国の学生はこういうことを趣味でやって、どんどん上手になって、このセーラー服を着ている彼女はいま日本でアニメの声優をやっています。ただの趣味だったんですけれども、一生懸命やっていって上手になっていく。こういうものをまねしていくと、とっても楽しい気持ちで勉強できます。

私も日本語でやったことがあります。1分間とか3分間とか、短いもので何回も何回も練習します。最初はセリフを見ながら、口の動きに合わせてしゃべるんですけれども、10回、20回やると、見なくても覚えられますよ。暗記できるんです。それがぴったり口の動きと合ったりすると、すごくうれしい。本当にうれしいです。だから、中国語を勉強している人たちは中国語でもいいし、中国人学生たちは日本語でもいいし、英語でもいいし、こんなことを続けてもらえたらいいなあと思っています。こんな感じのことを英語でも中国語でもぜひやってください。お願いします。

「それでは新しい質問を受け付けたいと思います。じゃどうぞ」

「先生、こんにちは」

「こんにちは」

「教育学科のニーと申します。いま日本に5年間います。その前に中国で6年間日本語を勉強していました。でも日本に来たばかりのとき全然話せませんでした。これから日本語教師を目指して、コミュニケーションツールとして日本語の教え方を研究したいと思います。先生、何かいい教え方とかありませんか」

「はい、ありがとうございます」

コミュニケーションと外国語をぺらぺら話せることとは全く別のスキルなので、コミュニケーションの話なの

か、中国人のニーさんがどう上手に日本語を話すか、別の話なんですけれども、一つずつ話します。

まずコミュニケーションですけれども、こんなことがありました。

日本人留学生が私と一緒に海外に行って、私がパリで講演するときに、「あ、じゃ私も行きたいです」といって彼ら二人もパリに来たんです。そして一緒に地下鉄とかバスとかに乗るときに、最初、私が3人分チケットを買って、「あ、もう大丈夫だ。心配しないでください」。食事私がご馳走する、喫茶店に行ってコーヒーを飲むのも私がご馳走します。どこへ行っても私がご馳走するんです。

そうしたら講演会のときに水1本ぐらい用意してくれるかなあと思いました(笑)。でも、なんにも用意してくれないし、後ろのほうで座って見てるんですよ。応援するために来てくれたのかなあとと思ったら、水も用意してくれないし、終わってバスとか地下鉄で帰るときにも、私が3人分おカネを出そうすとなると、2人は黙って立って待っているんですよ。そうすると、その日の晩ごはんはおいしい料理をご馳走しようと思っていたけど、そうする気持ちがなくなります。分かりますか……。

バスとか電車に乗るとき、「私たちが先生の分出します。食事ご馳走していただいていますので、こちらは私たちがやりますので大丈夫です」とかもし言われていたら、3人で5000円ぐらいの料理を食べる予定が、1万円、2万円になる可能性がありますよ(笑)。言ってる意味、分かりますか。それはたった100円とかの問題ですよ。もし100円をケチったら、2万円ぐらいの料理を食べられるのが2000円とかになる可能性がありますよ。多分コミュニケーションで、そういうことだと思うんです。

なんでこんな話をしたかという、私がロンドンに行ったときに、モルガンスタンレーで働いている北京大学を卒業した私の教え子がいて、食事もご馳走してくれましたし、どこに行くにも、「笈川先生、何もしないでください。きょう1日、全部私がやりますので」と言って、ロンドンを1日案内してくれました。身長190ぐらいある男の子です。

一緒にバスに乗っていたり、地下鉄やタクシーに乗っているときに、「給料幾らなの」「いやあ、そんなにたくさんもらってません。生活費と家賃だけで精一杯です。給料はそのぐらいです。ボーナスがなかったら無理です」と言うんです。

そのときは聞かないんですが、アパートとかマンションを見ているときに、「幾らぐらいのアパートに住んでいるの」と言ったら、28歳の彼は100万円ぐらいのところに独り暮らししているんです。また違う機会に、「食費は幾らぐらいなの」と聞くと、「そうですねえ、月100万円ぐらいです」と言うので、月200万円ぐらい出費しているんです。だから給料はそれぐらいで、あとはボーナスです。「ボーナスは幾らなんですか。1億円とかもらってるの」と、また違う機会に冗談で聞きました。そしたら彼が、「ことしの金額はちょっと言えないんですけど、そうですね、来年は1億円です」と言っていました(笑)。

その彼は大学時代、「一緒に北京ダック食べに行きましょう」とか言う、「バス代は私が2人分出しますから、先生はもういいです」と言うような人でした。2角ですから、日本円で4円とかですよ。私がご馳走するときは、「じゃあ違うところは私がやります」といつも言うし、授業のとき、私がしゃべり過ぎてのどが痛い、「先生、これどうぞ」とアメの一つ持ってくる。このアメだって10円もしないですよ。というようなことを彼はしていて、大学時代からコミュニケーション能力は非常に高かったです。

中国人の学生で、「私は敬語ができません。敬語は難しいです。敬語が上手になれば、私の日本語はすごく上手になります」と言う人がいます。もし敬語ができたなら本当に日本語が上手になるのか。

たとえば私が重い荷物を持っているときに、「(突っ立ったままで)先生、その重い荷物を私がお持ちいたしましょうか」(笑)と言うのと、「(小走りで駆けだして)先生、すいません。失礼します」と言って持ってくれるほうがいいのか。先生としては後のほうがいいですよ。敬語で「お持ちいたしましょう」と言われるのは、むしろかばかしいですよ。敬語が上手に話せたから、日本語能力があって、コミュニケーション能力があるとは決して思いま

せん。絶対にそうは思いません。

コミュニケーションって何なのかなという、たとえば相手がつまらなそうな顔をしていたら、「あ、ごめんなさい」と一言言うんです。そうすると、つまらなそうな顔をしていた人が「えっ？ あ、なんですか。ごめんなさい」となりますね。だって、つまらなそうな顔をしているんだから、「ごめんなさい」と言っても悪くないでしょう。そして「どうしたんですか」と相手の気持ちを思いやれるのがコミュニケーションかなあとと思っています。

もう一つ、中国人の学生で日本語を勉強して、まだ2年とか1年とか、間もない方いませんか……。みんな5年とか6年やってるのかな。私のところに夏休み、冬休みに来る学生で、1級とか2級とか、試験は強いんですけども、日本語をあまり上手に話すことができない学生がいます。

多分ここにいるコウさんが一番上手なのかもしれないので、コウさんに質問します。

「コウさん、春夏秋冬、春・夏・秋・冬、四季がありますよね。その四つの季節中で一番好きな季節はいつですか」「えーっとお……、秋ですかね」

「ありがとうございます。じゃありょーさんに質問させてください。りょーさん、春夏秋冬、春・夏・秋・冬、ありますよねえ。一番好きな季節を教えてくださいと思いますが……」

「春です。春は暖かいし、日本の桜は大変きれいで、花見をするのがすごく楽しくて、春が好きです」

「ありがとうございます」

いまコウさんに質問したら、コウさんは「秋です」と一言しか言いませんでしたね。りょーさんに質問したら、りょーさんは「春が好きです」、春の好きな理由二つ言いました。ほとんどの人が大体そういう答え方をします。

でもちょっと考えてみてください。夏が好きな人って何%ですか、コウさんのように秋が好きな人は何%ですか、冬が好きな人は何%ですか、りょーさんのように春が好きな人何%ですか。多分大体25%ですよ。ということは、あなたの意見に反対する人は75%もいます。にもかかわらず、いまりょーさんは春のことしか言いませんでした。「春が好きです。桜が咲きます。春は暖かいです。春だ春だ」、春の話しかしません。75%の人はその話聞きたくないにもかかわらず。

ではどうすればいいのか。

「オウさん、どうしたらいいですか。好きな季節を教えてください」

「ご指名いただき、ありがとうございます。もちろん春も冬も夏も好きです。でも私が一番好きな季節は夏です。なぜなら、私は紅葉が好きだからです。以上です」

「ありがとうございます」

こんな感じで、皆さん、分かりましたか。「私は秋が好きです。もちろん春も好きですよ。春の桜、きれいですよねえ。夏の海だってきれいですよねえ。冬の雪も大好きです。しかし私が一番好きな季節はやっぱり秋です。理由は、紅葉が好きで、紅葉がきれいだからです」、これでオクケーです。分かりましたか。

いまオウさんは、いきなり質問されても、そういう考えで反応しました。これは卓球のサーブをしたら瞬時に返すのと同じ反応ですから、条件反射です。考えてやったんじゃないくて、オウさんはいつもいつもそういうことをやっています。

(スライド) ちょっとこちらを見てください。私は学生にこんなものを提示しているんです。

たとえば「仕事と家族とどちらが大切ですか」という質問に対して、まず「ご質問、どうもありがとうございます」とあいさつをします。中国のほとんどの学生は、あいさつをしないで、「夏です」「春です」と、小学生のように、すぐに言います。コウさんもそうでした。オウさんは質問に答える練習をしていますから、私が「何か質問のある方。オウさん」と言ったら、オウさんは必ず、「ご指名いただき、ありがとうございます」と、質問をする前に条件反射であいさつをします。

質問に答える練習だったら、「仕事と家族とどちらが大切ですか」という質問に対して、まず「ご質問ありがとうございます。私は仕事より家庭を優先します」と、自分の意見を言います。「もちろん仕事は大切です。私も仕事をして社会に貢献したいです」。家族が大事だと言っている彼は、仕事のこともほめます。自分の意見と違う反対意見のほうも話します。先ほどオウさんは「私は秋が好きです。でも、春も好き、夏も好き、冬も好きです」と言いました。同じように、自分の意見を言ったら反対意見も言ってくださいということを、私はルールとして学生たちに教えています。

次です。「しかし私は仕事より家庭を優先します」ともう一回言います。強調ですね。そして理由、「なぜなら、私の人生の目的は家族を幸せにすることだからです。以上です。皆さん、どうもありがとうございました」と最後はあいさつです。これを私は骨と教えています。

骨というのは骨格の骨です。中国にいる中国人の学生たちは、単語を一生懸命覚えます、文法をたくさん覚えます。ですから成績がとてもいいです。1級試験にも合格します。しかし話すことができません。なぜなら骨がないからです。単語も文法も肉です。勉強すれば勉強するほど、肉は大きくなっていきます。強くなっていきます。しかし、骨がないので、立つことができません。歩くこともできません。走ることもできません。骨がないから、(体をふにゃふにゃ揺らしながら)いつもこんな状況で、「春です、春です」、こんな感じです。でも骨があれば、まずあいさつをする、自分の意見を言う、そして反対意見をほめる、自分の意見をもう一度言って強調する、理由を話す、そしてあいさつをする。この骨があれば、どんな質問にも答えることができます。

これは日本語学習歴3カ月の学生だってできるんです。1分ぐらい、ぺらぺら話すことができるんです。でも、日本に5年、10年住んでいてもできない人がほんとにたくさんいます。骨がないと、そうなります。これは一番簡単な骨です。

次に紹介するのは2番目の骨です。日本語を3カ月ではなくて、4カ月、5カ月、半年ぐらい勉強した学生にはこの骨を教えます。

たとえば「東京が好きですか、それとも大阪が好きですか」「ご質問ありがとうございます。私は東京よりも大阪のほうが好きです。もちろん東京は世界的に有名です。おしゃれなお店がある、魅力的な都市だと思います」と、私は大阪がいいと言ったのに、東京をほめます。「しかし私は東京より大阪のほうが好きです。理由は二つあります。どうぞ聞いてください」。

これを言えば、聞いている人は「あ、この人は頭がいいんだ。頭が整理できているんだ、すごいんだ」と思うでしょう。「まず一つ目の理由は、大阪の人たちは面白いからです。吉本新喜劇で有名な大阪のお笑いは日本一です」、こういうのはプラスアルファです。理由を言って、もう一言、好きなことを言ってください。「いつ、どこで、誰と誰が何をしました。彼らはどうでした。私はどうでした」、こんなのは小学校1年生でもできます。「次に二つ目の理由は、大阪にはおいしい料理がたくさんあるからです。皆さんもご存じの通り、大阪は食い倒れのまちとして有名です。私は世界で一番料理が好きな中国人ですから、料理がおいしい大阪が大好きです。以上の理由で、私は東京より大阪のほうが好きです。どうもありがとうございました」。

こういう骨を教えています。骨というのは型と同じです。柔道にも型があります、空手道にも型があります、剣

道にも型があります，茶道にも型があります，華道にも型があります。「道」がつくものは全部，型があります。その型を毎日毎日練習すると，3日，4日で飽きます。そうしたら新しい型を覚えて，また3日，4日一生懸命やると飽きます。この型が10，20あれば，たった半年，たった1年でも，誰でも上手に話すことができます。日本人の学生にはこういう型を英語で書いてあるものがあればいいので，もし英語の先生がいらっしゃったら，これを英語に翻訳してもらいたいと思うんですが，中国の学生たちには私はこういうもので型を教えています。

もちろん型が一番ではありません。一番大切なのは肉です。文法をたくさん覚える，単語をたくさん覚える。肉が大切です。肉がたくさんあれば，内容も深く，そしてたくさん話題を話すことができそます。でも，骨がなければ，立つことができません，歩くことができないんです。だから，この型を一生懸命勉強してもらいたいと思っています。

時間がもうすぐなくなってしまうので，最後に私が心がけていることをさっさと話しをしたいと思います。

私が気をつけていること。まず学生の名前を覚えています。授業中に先生は「皆さーん」とか言いますけれども，それではなかなか話を聞いてれません。「いいですか。分かりましたか。この問題について分かりましたか，宮田さん」と言うと，宮田さんだけではなくて，隣の学生もびっくりします。だから私は語尾に必ず，「そういうことなんですよ。チョーさん」，「いいですね，リョーさん」という話をします。学生の名前を覚えると，みんな集中することができます。だから先生はできるだけ学生の名前を覚えてくださいという話をしています。

私のクラス，たくさん学生がいるんですけども，初日，2日目ぐらいに，「ライデン外国語大学のオウさん」，「南京上海大学のチョーさん。いま寝てましたね」と言うと，寝ていた学生が「ごめんなさい」と言って，次から絶対寝ません。その周りの人もびっくりして，「あ，次は私だ」と思うので，寝なくなります。

次に，「覚えなくてください。絶対に覚えなくてください」，「頑張らなくてください」，そして「無理をしないでください」と私はいつも言っています。「頑張ってください」と言ったら，学生たちはみんな「うぜえな」と思いますよ。必ず思うんです。なぜなら，小学校，中学校，高校，大学みんな，「頑張ってください。勉強してください。一生懸命覚えてください」と言うので，私は「覚えなくてください」と必ず言います。でも，覚えなくてくださいと言っても，皆さんは覚えなくなります。

「皆さん，いまから目を閉じて考えなくてください。想像しないでください。コウさんも想像しないでください。目を閉じて想像しないでください。いいですか。茂木さんも目を閉じて想像しないでください。皆さん，想像しないでください。富士山を想像しないでください。富士山を想像しないでください。富士山を想像しないでください。桜井さん，富士山を想像しないでください」。

いま何を想像しましたか（笑）。先生がもし「覚えなくてください」と言ったら，学生たちは覚えたい気持ちになるので，私は「覚えなくてください」と言います。

そして最後に，できるだけむだな間を空けないで，CDとCD，歌と歌の間，音を流し続けるDJのようにずっとしゃべり続けると学生は話を聞いてくれるということです。

ということで，皆さん，きょうは90分という長い時間，最後までお話を聞いてくださいますて，本当にありがとうございました。私も25年ぶりのこの会場なんですけれども，皆さんとお会いできて，すごくうれしく思っ

おります。

本日は皆さん，どうもありがとうございました（拍手）。

4-1 科学研究費補助金（文部科学省・日本学術振興会）

【史学科】

- 土屋好古 基盤研究（C）（一般）
「ロシア第一次革命における労働運動と自由主義運動—同盟・包摂・乖離の視点から」
- 加藤直人 研究成果公開促進費（学術図書）
「清代文書資料の研究」

【国文学科】

- 荻野綱男 基盤研究（C）（一般）
「WWW検索による日本語研究の総合的展開」
- 小平麻衣子 基盤研究（C）（一般）
「文学雑誌『若草』における読者階層の形成と混交をめぐる総合的研究」
- 高 榮蘭 基盤研究（C）（一般）
「冷戦アジアの「革命」とベトナム戦争における「日本語」の役割に関する研究」
- 武内佳代 基盤研究（C）（一般）
「大岡昇平と女性読者の関係についての総合的研究」
- 田中ゆかり 基盤研究（C）（一般）
「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」

【中国語中国文学科】

- 青木 隆 基盤研究（C）（一般）
「清朝ムスリム学者劉智『天方性理』における形而上学」
- 小浜正子 基盤研究（C）（一般）
「歴史的視点による中国のジェンダー秩序に関する総合的研究」
- 三澤真美恵 基盤研究（C）（一般）
「1945年前後」「1949年前後」の台湾映画統制に関する基礎研究」

【ドイツ文学科】

- 初見 基 基盤研究（C）（一般）
「現代ドイツ文化における戦後意識の継承と変容」

【社会学科】

- 後藤範章 基盤研究（B）（一般）
「交通インパクトの社会的効果に関する研究—量と質とビジュアルの混合研究法—」
- 菅野 剛 基盤研究（C）（一般）
「社会階層と社会的ネットワークに関する地域比較分析」
- 好井裕明 基盤研究（C）（一般）
「被爆表象・言語の批判的エスノメソドロジー：「被爆の記憶」の語り方の解読」
- 中村英代 若手研究（B）
「女性の依存問題をめぐる言説と介入／支援の展開からみる〈回復〉と〈ジェンダー〉」

山北輝裕 若手研究（Ｂ）
「野宿者支援と「自立生活運動」の社会学的研究」

【社会福祉学科】

金子絵里乃 基盤研究（Ｃ）（一般）
「高齢者施設におけるケアワーカーによる看取り介護の実践と課題」
山田祐子 基盤研究（Ｃ）（一般）
「虐待による高齢者の死亡事例等と検証に関する調査研究」
後藤広史 若手研究（Ｂ）
「「自立困難層」のホームレスに対する社会的包括に向けた支援のあり方に関する研究」

【教育学科】

廣田照幸 基盤研究（Ａ）（一般）
「戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究」
末富 芳 基盤研究（Ｂ）（一般）
「効果的な学校運営のための学校財務の実証的研究」
小野雅章 基盤研究（Ｃ）（一般）
「戦後教育における学校儀式と国旗・国歌に関する基礎的研究」
北野秋男 基盤研究（Ｃ）（一般）
「日米のローカル・ミニマム学力保障政策の比較研究」
下司 晶 基盤研究（Ｃ）（一般）
「ポストモダン以後の教育哲学における規範の再創出ーポスト構造主義のフロイト解釈から」

【体育学科】

大嶽真人 基盤研究（Ｃ）（一般）
「ブラインドサッカーにおけるゲーム分析からのコーチングシステムの構築」
水上博司 基盤研究（Ｃ）（一般）
「地域スポーツの推進計画立案における多元的主体の相互補完的ガバナンスに関する研究」

【心理学科】

巖島行雄 新学術領域研究
「目撃証言の正確さを規定する要因および正確さを担保する識別・尋問方法に関する研究」
坂本真士 基盤研究（Ｃ）（一般）
「「新型うつ」に関するパーソナリティと社会的認知の研究」

4-2 文理学部個人研究費及び付置研究所所員個人研究費

【哲学科】

- 飯田 隆 「日本語における量化の研究」
嘉吉純夫 「古代ギリシア思想における神観念の諸相」
久保光志 「古代哲学と藝術における感情」
合田秀行 「初期瑜伽行派における修行論の多角的解明」
小林紀由 「宗教共同体と人口移動」
高橋陽一郎 「『青騎士』の藝術家たちとショーペンハウアー哲学」
丹治信春 「意識・自由・思考」
永井 均 「実在性と現実性」
古田智久 「相対主義の克服を目指して」
上野山晃弘 「現代倫理学と生権力論」
三平正明 「認識様相」

【史学科】

- 上保國良 「京都圏と東照宮」
大塚英明 「文化財の保存と活用」
粕谷 元 「トルコにおける司法制度および法体系の西洋化・世俗化に関する歴史学的研究」
加藤直人 「清代文書資料の総合的研究」
坂口 明 「ローマ帝国の社会構造」
関 幸彦 「日本中世史における通説の誕生」
土屋好古 「ロシア第一次革命と国会体制の成立」
中村順昭 「奈良時代政治史の研究」
浜田晋介 「日本大学考古学研究会の関する基礎的研究」
古川隆久 「日本近現代史像の再構築」
松重充浩 「『満洲国』におけるビジュアルイメージの歴史的位置づけに関する基礎的研究」
森ありさ 「近代ヨーロッパにおける「大戦」とメモレーション研究」
山本孝文 「古墳時代日韓交渉史の考古学的研究」
林 亮 「13世紀フランスにおける官職獲得の新興家門形成に対する影響に関する研究」
堀川 徹 「日本古代における地域社会の統合過程」

【国文学科】

- 阿部好臣 「平安時代物語文学の研究 特に源氏物語宇治十帖と仏教」
荻野綱男 「ウェブをコーパスとして活用する日本語研究」
小平麻衣子 「女性の〈教養〉と文学」
梶川信行 「『万葉集』の研究」
紅野謙介 「日本近現代文学の生産と受容の研究」
佐藤至子 「近世文芸をめぐる諸問題についての研究」
鈴木晴彦 「日本近世書学の研究」
竹下義人 「芭蕉の研究」

田中ゆかり 「日本語と日本語社会の実態把握」
 辻 勝美 「中世文学の書誌学的研究」
 藤平 泉 「鎌倉時代初期歌壇の研究」
 高 榮蘭 「日本における文化翻訳と革命の表象に関する研究」
 鈴木功真 「日本語史と漢字・漢和辞書に関する諸研究」
 武内佳代 「日本の近現代文学作品における「犬」の表象に関する研究」
 鮮干 媚 「非母語話者の日本語のリズム習得と客観的評価モデル」
 金子 馨 「中世における書論の研究―藤原教長「才葉抄」を中心に―」
 林 直樹 「首都圏東部域音調の多角的な研究」

【中国語中国文学文化学科】

青木 隆 「中国清朝ムスリム学者・劉智のコスモロジー（その4）」
 小浜正子 「中国史の家族観の変遷に関する研究」
 近藤直子 「残雪の小説と批評」
 田口一郎 「明清・江戸期における「古文」の研究」
 舘野正美 「吉益東洞医学思想の研究Ⅱ」
 張 麗群 「日中数量表現に関する比較研究」
 平井和之 「“暫擬系統”と中国語教育」
 三澤真美恵 「戒厳時期台湾における「中華民国」国歌フィルムの分析」
 山口 守 「張我軍の中国体験」
 劉 子瑜 「唐诗一字平上两读而义有异同问题研究」
 大川謙作 「チベット仏教を通じた漢人とチベット人の関係性の再考察」

【英文学科】

吉良文孝 「モダリティと英語未来表現」
 高橋利明 「ホーソン文学の平衡感覚―『大理石の牧神』論」
 塚本 聡 「英語史的コーパスを用いた英語発達史の研究」
 野呂有子 「①17世紀叙事詩のJohn Miltonの総合的研究―その10 ②William Shakespeareの総合的研究―その9 ③アーサー王伝説の総合的研究―その4」
 保坂道雄 「言語変化と言語進化」
 飯田啓治朗 「Joseph ConradのAlmayer's Folly研究」
 関田朋子 「Victoria朝社会問題小説とジャーナリズム」
 リチャード・キアラ 「Second Language Acquisition and English as a Second language Pedagogy」
 隅田朗彦 「英語ライティング活動における効果的な外国語指導法」
 フィル・マイルズ 「Literature and the Future of Global English」
 前島洋平 「1930年代の英国小説研究」
 一條祐哉 「事象命題と非事象命題の認知言語学的考察」
 野村宗央 「ジョン・ミルトンの作品における「存在」の研究」
 佐藤健児 「条件文の帰結節におけるbe going toに関する一考察」

【ドイツ文学科】

- 安達信明 「・言語類型論並びにその関連領域の研究 ・近現代のドイツの音楽劇研究」
大羅志保子 「バットハマン文学と暴力の系譜学」
初見 基 「ドイツ戦後文学と社会的規範」
保阪靖人 「ドイツ語における非能格動詞の非対格化について」
森田 悟 「E.T.A. ホフマン研究」
エーリッヒ・モイテ 「Sprache und Zeit in der erzählenden deutschen Literatur von Fontane bis Sebald」
関口なほ子 「ドイツ・ユダヤ人作家・作品研究」
浜野明大 「中世文学作品におけるミネ概念再考とミヒャエル・ハネケの映像分析」
ディルク・ヘーゲル 「Die moderne Autobiographie」
勅使川原聖子 「戦後ドイツ文学と世界文学に至る歴史を語る手法について」

【社会学科】

- 後藤範章 「視覚/映像社会学とビジュアル・リサーチ・メソッドに関する研究(9)」
菅野 剛 「社会調査データの計量的分析手法に関する研究」
立道信吾 「日本の企業と雇用システムの社会学的分析」
仲川秀樹 「中心市街地活性化にみる百貨店と商店街の社会学的研究」
中瀬剛丸 「テレビCMと生活意識に関する研究」
中森広道 「災害情報ならびにメディアの社会的機能に関する研究」
夏刈康男 「デュルケムの宗教社会学の研究」
山本質素 「日本社会とアジアにおける家族・親族に関する儀礼と慣行の比較方法についての研究」
好井裕明 「被爆表象のメディア社会学的研究(3): エスノメソドロジー的な映像解説・言説解説を中心として」
久保田裕之 「日本におけるシェアハウス居住者に対する聞き取り調査」
中村英代 「ナラティブ・アプローチの社会学研究における可能性」
松橋達矢 「「都市づくり」における公共空間の役割に関する歴史社会学的研究」
山北輝裕 「ストリートの現在・社会史」
小池高史 「高齢者の居住環境と移住に関する研究」
徳山弓恵 「1941年から1945年までにおけるマックス・ヴェーバーの Wertfreiheit 受容とヴィルヘルム・ディルタイの関係性について」

【社会福祉学科】

- 上之園佳子 「地域における保健福祉の包括ケア政策に関する研究ーイギリスの Health and Social care Act 2008以降の動向よりー」
井上 仁 「子どもの権利基盤に関する研究(実践的アプローチ)」
今泉礼右 「社会的排除の構造と日本型社会保障に関する研究」
川村宣輝 「障害者雇用における差別禁止と合理的配慮の在り方に関する研究」
諏訪 徹 「地域福祉における協働システムに関する研究」
山田祐子 「国および地方公共団体による高齢者虐待事例の「分析」、「調査及び研究」に関する研究」
金子絵里乃 「高齢者福祉施設の援助者による看取りの実践」

- 後藤広史 「「自立困難層」のホームレスに対する社会的包括に向けた支援のあり方に関する基礎的研究」
阿部里美 「子育て家庭の「育児問題」と子育て支援の検討ー乳幼児を持つ家庭のシステムに着目してー」

【教育学科】

- 小笠原喜康 「教育メディア研究領域の論理」
小野雅章 「戦後教育における学校行事に関する基礎的研究——基礎史料の収集を中心に」
北野秋男 「地方自治体の学力調査の実態」
下司 晶 「現代教育の哲学的研究」
小山憲司 「電子情報環境下における大学図書館サービスに関する基礎的研究」
佐藤晴雄 「コミュニティ・スクールに関する研究(4)」
関川悦雄 「ブーバーの教育思想の研究」
羽田積男 「アメリカの大学における学修成果の効用に関する調査研究」
平野英俊 「公立図書館司書の専門性再構築に関する研究」
広田昭幸 「戦後日本における教育改革をめぐる対抗関係の研究」
渡部 淳 「教師研修のシステムと教材開発に関する研究」
末富 芳 「教育における公私教育負担に関する研究」
杉森知也 「戦前期中等教員の臨時的養成ー植民と「内地」での対応を比較してー」
松岡佑介 「教育における動機づけと道徳の原理ージョンデューイの理論を手がかりにー」
内海美由紀 「インターネット化時代における博物館での学びのあり方」

【体育学科】

- 青山清英 「状況負荷トレーニングに関するコーチング学的考察」
大嶽真人 「ブラインドサッカーにおけるGKのプレーに関する研究」
櫛 英彦 「体組成が高強度運動後の生理的变化に及ぼす影響と、疲労回復法の検討」
久保木優 「剣道選手の呼吸位相による脳波周波数の変化」
鈴木 理 「ゲーム構造論再考」
高橋正則 「スポーツ競技場面におけるコミュニケーションスキルの内容とその機能に関する研究」
野口智博 「レジスタンス・トレーニングと競技成績、競技パフォーマンスの関係」
水落文夫 「大学生のスポーツ活動経験に関わる特性的な感情と自律性」
水上博司 「スポーツ推進計画策定における市民参画に関する日独比較研究」
森 昭雄 「音声ペン使用での英語能力による幼児の脳活動の変化」
小山貴之 「スポーツ関連頸部障害の指標作成に関する研究」
金野 潤 「全日本選手権における卓越した足車の動作解析」
西川大輔 「鉄棒の高さとけ上がり技術の関係に関する一考察」
松本 恵 「持久系競技選手におけるカロテノイド色素摂取がパフォーマンス・疲労感に及ぼす影響」
伊佐野龍司 「ボール運動における運動空間把握における学習過程」
城間修平 「ゲーム構造論からみたバスケットボールプレイヤーの実践知について」
村上幸史 「陸上競技における経験者と未経験者の動作フィードバックの相違について」
吉田明子 「教員養成課程におけるダンス・身体表現の学習内容についての研究」

【心理学科】

- 巖島行雄 「登山の心理学：道迷いのメカニズムの解明」
- 岡 隆 「ステレオタイプ抑制の逆説的效果に関する研究」
- 坂本真士 「「新型うつ」に関する心理学的研究」
- 篠竹利和 「自閉症スペクトラム障害の臨床心理アセスメントに関する研究」
- 津川律子 「臨床心理検査バッテリーに関する研究」
- 内藤佳津雄 「高齢者介護における意思決定過程に関する研究」
- 羽生和紀 「生活環境に対する環境心理学的研究(6)」
- 横田正夫 「最近のアニメーションにおけるこころの問題の表現に関する臨床心理学的研究」
- 依田麻子 「生理心理学で用いられる指標の使用時の留意点の検討」
- 菊島勝也 「子育て支援グループにおける、参加者の効果と、ボランティア学生の学びとの関連について」
- 齋藤慶典 「課題遂行行動に影響を及ぼす動機づけ要因についての生理心理学的検討―目標志向性が心理的・生理的活動に与える影響について―」
- 山口義枝 「心理療法における共感の想起はどのように生じるのか」
- 市川優一郎 「発達障害における聴覚過敏に関する生理心理学的研究」
- 北村世都 「高齢者の心理的援助に関する研究」

【総合文化研究室】

- 青木一能 「日中アフリカ政策の比較」
- 石川晃司 「戦後日本思想の研究」
- 大塚友美 「簡易人口経済計量モデルによる日本経済のシミュレーション分析」
- 椎名正博 「石川淳の小説とジャック・リヴィエールの『冒険小説論』」
- 斎藤・芳江 「オーラル・リピーテッド・リーディングと第二言語の読みにおける流暢さ」
- 小林和歌子 「Development of Can-do Statements for Assessing the Writing Skills of Japanese University Students」
- 日吉秀松 「文化大革命期における上山下郷運動の目的についての分析」

4-3 その他の助成金等

【教育学科】

佐藤晴雄 文部科学省初等中等教育局

「学校の総合マネジメント力の強化に関する調査研究事業」

【体育学科】

松本 恵 大塚製薬株式会社

「大学トライアスリートの合宿により低下する免疫能にリカバリー食品が及ぼす影響」

凸版印刷株式会社

「「パーソナル食コンディショニングサポートサービス」アプリ開発」

森 昭雄 文化シャッター株式会社

「脳活性化ドア基礎研究」

5. 研究員受入

客員研究員

1. 氏 名	布村 育子
2. 現 職	埼玉学園大学人間学部こども発達学科准教授
3. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	「戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究」及び「戦後日本における教育の変容と教職のあり方の社会学的研究」
5. 受 入 教 員	広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名	土屋 弥生
2. 現 職	聖パウロ学園高等学校 通信制課程（エンカレッジコース）教頭
3. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	教員養成における効果的なインターンシップの構築に関する研究
5. 受 入 教 員	青山 清英（体育学科）
1. 氏 名	山下 雅子
2. 現 職	東京有明医療大学看護学部看護学科准教授
3. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
4. 研究プロジェクト名	基礎心理学と臨床心理学を結ぶ試み
5. 受 入 教 員	坂本 真士（心理学科）

研究員

1. 氏 名	今村 純子
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	イメージ思考の可能性
4. 受 入 教 員	飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名	田澤 慎也
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	非反省的自己意識研究による無神論的実存主義擁護
4. 受 入 教 員	飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名	林 晃紀
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	ウィトゲンシュタインの治療的哲学に関する考察
4. 受 入 教 員	飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名	BRONS / 石橋 LAJOS
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	遠近法主義についての比較哲学的研究
4. 受 入 教 員	飯田 隆（哲学科）
1. 氏 名	三木 那由他
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	チャンネル構築ゲームとしての言語的 / 非言語的コミュニケーションの分析
4. 受 入 教 員	飯田 隆（哲学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	関谷 雄磨 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 幸福主義および快樂主義の諸相とその限界 嘉吉 純夫（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小山田 智寛 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 ポール・ヴァレリーの藝術創作論研究 久保 光志（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中根 宙志 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 倫理的意決定について 丹治 信春（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	山田 浩司 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 因果の向きと時間の向きに関する考察 丹治 信春（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	清水 将吾 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 主観性と主観概念の研究 永井 均（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	成田 正人 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 ヒュームと帰納のパラドクス 永井 均（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	真鍋 真悟 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 ウィトゲンシュタインの研究 永井 均（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	田村 知佳 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 認識論的媒介者の必要性（必要性）と日常の実在感との関係について 古田 智久（哲学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	多々良 圭介 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 清代文書史料の分析ならびに整理、清代の社会史にかかわる研究 加藤 直人（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	山本 興一郎 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 古代ローマ史に関する史料の収集・整理 坂口 明（史学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	関屋 雄一 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 東国武士団の諸相 関 幸彦（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	千葉 篤志 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 東国武士団の諸相 関 幸彦（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	吉田 修太郎 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本古代の異文化交流に関する研究 中村 順昭（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	荒船 俊太郎 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小形 利彦 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	佐藤 宏治 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	椎名 則明 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	多比羅 充 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中田 崇 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近現代史像の再構築 古川 隆久（史学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	余 淳宗 平成 27 年 5 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 「万葉集」の渡来系氏族（特に百済系）に関する研究 梶川 信行（国文学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	李 正熙 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 金鶴泳と「在日朝鮮人文学」をめぐる研究 紅野 謙介（国文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中野 綾子 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近代文学における戦場の読書行為の総合的研究 紅野 謙介（国文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	片岡 慎泰 平成 27 年 5 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 ドイツ戦後文学と社会的規範 初見 基（ドイツ文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小林 哲也 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 ドイツ戦後文学と社会的規範 初見 基（ドイツ文学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	秋 貞子 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 観光産業に関するアジア研究 後藤 範章（社会学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	矢吹 康夫 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 可視的症状の不可視の問題：歴史に埋没してきた「見た目問題」当事者の声を聞き取る 好井 裕明（社会学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小野沢 美明子 平成 27 年 5 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 基礎学力の理論構築及び実態調査研究 小笠原 喜康（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	小林 彰彦 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日本近代教育の実態究明に関する史料の調査収集 小野 雅章（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	水戸部 光則 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 日米におけるペスタロッチ主義の展開と変容 北野 秋男（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	谷川 夏実 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究 広田 照幸（教育学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	CHUOP SARARN 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究 広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	中嶋 亮太 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究 広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	長嶺 宏作 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究 広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	仲野 由佳理 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 非行少年の「立ち直り」と支援に関する教育学的研究 広田 照幸（教育学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	川崎 弥生 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 前に思い出したことを思い出せるのか：文章と単語を用いた検討 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	素保 友紀 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 事前知識の活性化が目撃パラダイムのソースモニタリング判断に及ぼす影響の検討 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	高橋 望 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 顔の情報処理に関する実験的検討 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	花村 光貴 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 展望的記憶の認知過程に関する研究 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	福島 由衣 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 目撃証言の正確さを規定する要因および正確さを担保する識別・尋問方法に関する研究 巖島 行雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	伊澤 冬子 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 社会心理学とポジティブ心理学の共同研究 岡 隆（心理学科）

1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	亀山 晶子 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 地域住民を対象とした、自殺予防のための啓発活動の実践と介入効果の検討 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	田中 江里子 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 地域住民を対象とした、自殺予防のための啓発活動の実践と介入効果の検討 坂本 真士（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	狩野 武道 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 幼児期から青年期における精神的健康 津川 律子（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	相澤 裕紀 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 良質な高齢者介護の習得と教育に関する心理学的研究 内藤 佳津雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	望月 正哉 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 高齢者介護に関する認知心理学的研究 内藤 佳津雄（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	岩倉 希 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究 羽生 和紀（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	白川 真裕 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究（6） 羽生 和紀（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	西本 和月 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 生活環境に対する環境心理学的研究（6） 羽生 和紀（心理学科）
1. 氏 名 2. 期 間 3. 研究プロジェクト名 4. 受 入 教 員	滑川 瑞穂 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日 抑うつにみられる認知障害の特徴についての検討 横田 正夫（心理学科）

研究協力員

1. 氏 名	内藤 正文
2. 期 間	平成 27 年 6 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	わが国における「ローカル・ミニマム学力保障政策」の研究
4. 受 入 教 員	北野 秋男（教育学科）
1. 氏 名	吉田 明
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	大学ラグビーチームの競技力向上に必要な組織変革論を明らかにする
4. 受 入 教 員	櫛 英彦（体育学科）
1. 氏 名	杉田 房子
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	同調行動の社会心理学的研究
4. 受 入 教 員	岡 隆（心理学科）
1. 氏 名	佐久 浩子
2. 期 間	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
3. 研究プロジェクト名	「新型うつ」への心理学的アプローチ
4. 受 入 教 員	坂本 真士（心理学科）

6-1 研究紀要

人文科学研究所研究紀要第 90 号 総目次

【研究論文】

日本大学における考古学研究の歴史—第1期の活動概要—	浜 田 晋 介	1
米国の巨大企業財団と教育改革の歴史	北 野 秋 男	25
1980年代日本教職員組合の400日抗争における路線対立軸の整理(その3)	広田照幸・末富芳・筒井美紀・田中真秀・香川七海	39
キャメロン連立政権下におけるイギリス教育財政改革の特質 —Pupil Premiumによる学校改善と子どもの貧困への対応を中心に—	末 富 芳	63
「満洲国」における中等教員養成—日本人教員の再教育と養成の開始に着目して—	杉 森 知 也	79
教員養成課程におけるダンスの学習内容について(1) —アレンジの工夫 4象限の左回りループ—	吉 田 明 子	95

【研究ノート】

オスマン帝国はいつ滅亡したのか	粕 谷 元	113
英語習熟度テストにみられる大学1年生の英語力の推移	隅田朗彦・小林和歌子・ティモシー グティエレス	131

6-2 研究紀要

人文科学研究所研究紀要第 91 号 総目次

【研究論文】

『恵美寧固先生医方略説』攷—医学思想の観点から—	舘 野 正 美	1
From Paraphrasing “Psalm 114” to Composing <i>Paradise Lost</i>	野 呂 有 子	11
子どもの貧困対策のプラットフォームとしての学校の役割	末 富 芳	25
持永只仁のアニメーションの作品にみるライフサイクル的展開	横 田 正 夫	45
認知症高齢者に対する援助者の共感性類型	北村世都・内藤佳津雄	67

【研究ノート】

社会経済発展と農村の変容—カンボジア 2 農村の事例—	山本質素・大塚友美・石川晃司	83
--------------------------------------	----------------	----

【資料紹介】

「趣味」から見た生涯学習—『発表会文化論』の書評を中心に	霜 村 光 寿	105
---------------------------------------	---------	-----

平成26年度 人文科学研究所総合研究 研究報告

コーパス言語学の方法論研究	研究代表者：荻 野 綱 男	117
	研究分担者：田中ゆかり・塚本 聡 浜野 明大・板倉 歌	
東アジアの情報統制と地域間・メディア間における テキスト変容に関する総合的研究	研究代表者：三 澤 真美恵	161
	研究分担者：小平麻衣子・金子 明雄 高 榮蘭・紅野 謙介・山口 守	

7 事業報告

I 刊行物発刊

人文科学研究所「研究紀要」第九十号 平成27年9月30日発行

人文科学研究所「研究紀要」第九十一号 平成28年2月28日発行

II 委員会

人文科学研究所運営委員会

第1回 平成27年 4 月23日開催

第2回 平成27年 7 月 8 日開催

第3回 平成27年11月 5 日開催

第4回 平成28年 3 月22日開催

研究活動報告書 第7号 平成28年7月31日発行

編集・発行者 保 阪 靖 人

発 行 所 日本大学文理学部人文科学研究所

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3丁目25番40号

TEL : 03-5317-8 6 4 2

FAX : 03-3329-6 6 4 6

(株) 文 成 印 刷

日本大学文理学部人文科学研究所